

時代物浮世草子に基づく「世界」の記述的研究

著者	木越 治
雑誌名	平成15(2003)年度科学研究費補助金 基盤研究(C) 研究成果報告書
巻	2000-2003
ページ	18p.+86p.
発行年	2004-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2297/46616

時代物浮世草子に基づく 「世界」の記述的研究

課題番号 12610445

平成 12 年度～平成 15 年度科学研究費補助金基盤研究 (C) (2)

研究成果報告書

平成 16 年 3 月

研究代表者 木越 治

(金沢大学文学部教授)

目 次

はしがき	1
研究の概要	3
米国議会図書館所蔵『梅若一代記図絵』をめぐって	6
『勸進能舞台桜』注釈	右 1

は し が き

研究組織

研究代表者：木越 治（金沢大学文学教授）

交付決定額	直接経費	間接経費
平成 12 年度	600 千円	0 千円
平成 13 年度	500 千円	0 千円
平成 14 年度	500 千円	0 千円
平成 15 年度	600 千円	0 千円
総計	2,200 千円	0 千円

研究発表

(1)学会誌等

木越 治・高島 要・高橋 明彦他 3 名

『勸進能舞台桜』注釈（一）

『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』第 21 号 平成 13 年 3 月 18 日

同

『勸進能舞台桜』注釈（二）

『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』第 22 号 平成 14 年 3 月 18 日

同

『勸進能舞台桜』注釈（三）

『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』第 23 号 平成 15 年 3 月 18 日

同

『勸進能舞台桜』注釈（四・終）

『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』第 24 号 平成 16 年 3 月 18 日

木越 治

古典文学データベースがもたらしたもの

『文学』第 2 巻第 1 号 平成 13 年 1 月 29 日

時代物浮世草子研究会（木越 治・高島 要・高橋 明彦他 2 名）

多田南嶺『龍都俵系図』注釈（2）

『北陸古典研究』第 15 号 平成 12 年 10 月 31 日

同

多田南嶺『龍都俵系図』注釈（3）

『北陸古典研究』第 16 号 平成 13 年 10 月 31 日

同

多田南嶺『龍都俵系図』注釈（4）

『北陸古典研究』第 17 号 平成 14 年 10 月 31 日

同

多田南嶺『龍都俵系図』注釈（5）

『北陸古典研究』第 15 号 平成 15 年 10 月 31 日

高島 要・木越 治・高橋 明彦他 2 名

『風流宇治頼政』注釈（一）

『石川高等工業専門学校紀要』第 34 号 平成 14 年 3 月 31 日

同

『風流宇治頼政』注釈（二）

『石川高等工業専門学校紀要』第 36 号 平成 16 年 3 月 31 日

（2）口頭発表

Kigoshi Osamu（木越 治）

A Text and Its Reincarnations: The Pictorial Biography of Umewaka in the Library of Congress

（米国議会図書館所蔵『梅若一代記図絵』をめぐって）

AAS (Association For Asian Studies) 2003 Annual Meeting (New York)

2003 年 3 月 29 日

（3）出版物

米国議会図書館日本古典籍目録刊行会（渡辺憲司・木越治他）編

『米国議会図書館日本古典籍目録』 八木書店 平成 15 年 2 月 28 日

研究の概要

当初の目的

本研究は、西鶴没後約 80 年間の近世上方小説界をリードした八文字屋本浮世草子のうち、時代物に分類される作品群を素材に、これらの作品の背景となっている「世界」についての包括的な調査を試み、それに基づきながら、近世演劇の「世界」の包括的な記述をめざそうとするものである。

同時代の浄瑠璃・歌舞伎作品との関係はもちろんのこと、前代までの御伽草子・仮名草子・説話・軍記・物語等との関係を確定し、さらに、これら時代物浮世草子が後代の演劇や読本・草双紙作品などに与えた影響についても考察していく作業を通して、従来あまり高い評価の与えられてこなかったこれら時代物作品評価のための視座をも定めていきたいと考えている。

各年度の研究概要

平成12年度

本年の主たる研究対象として取り上げたのは『花樺巖柳嶋』(元文4年刊)である。従来から多田南嶺作と考証されているが、この点は、彼と交わりのあった俳人達の名前が取り入れられていることなどからも認めてよいと思われる。この作品における最大の問題は、前半部が元禄の赤穂浪士事件を素材にしているか否かにある。後半の姉妹の敵討に至るまでの展開には『仮名手本忠臣蔵』を髣髴とさせる要素が数多い見出せるのであるが、もちろんこの作品は寛延元年初演の仮名手本忠臣蔵に先立って刊行されたものである。とすれば、本作に影響を与えた忠臣蔵狂言を特定しておく必要があるが、この点はなお検討中である。

また、『勸進能舞台桜』(延享三年刊)巻一の注釈を公にし、『龍都俵系図』(元文五年刊、いずれも南嶺作とされているもの)巻二の注釈も発表された。

平成13年度

本年は、昨年に引き続いて『花樺巖柳嶋』(元文4年(1739)刊)を中心に研究を進めた。この作品が元禄の赤穂浪士事件を素材にしている可能性のあることは昨年の報告に記したとおりであるが、この点について、寛延元年(1748)初演『仮名手本忠臣蔵』に先立つ浮世草子・浄瑠璃作品についての検討をすすめた。『碁盤太平記』『鬼鹿毛無佐志燈』『忠臣金短冊』(以上浄瑠璃)『忠臣略太平記』『西海太平記』『けいせい伝受紙子』『今川一睡記』(以上浮世草子)等の諸作品であるが、本作に影響を与えた忠臣蔵ものはまだ特定するに至ってはいない。殿中刃傷の発端に横恋慕があることや、忠臣蔵の加古川本蔵同様家老が主君を救うために工作をする、といったあたりの展開は『花樺巖柳嶋』独自の趣向であり、それが『仮名手本忠臣蔵』に直接影響を与えたという可能性も当然考えられるが、この点はさらに慎重を期して調査を重ねた

いている。

なお、この問題から派生するかたちで、忠臣蔵世界の形成に関しても若干の調査・研究を行った。忠臣蔵については『仮名手本忠臣蔵』がひとつの目安となるが、現代の忠臣蔵はこの浄瑠璃作品を起点とはしていない。浪曲・講談等で取り上げられてきたおびただしい忠臣蔵もの（おおざっぱに本伝・銘々伝・外伝に大別できよう）がその源流と考えられるが、そのエピソードのいくつかについて、話の輪郭・パリエーションの幅等を見極めながら、淵源について探求してみた。幕末から明治にかけての大衆向け出版物にいくつか見られるようであるが、これは別にテーマを立てるべき問題かもしれない。

また、『勸進能舞台桜』巻二の注釈をまとめ、『龍都俵系図』巻三の注釈も発表され、新たに『風流宇治頼政』（江島其磧、享保五年刊）巻一の注釈も活字になった。

平成14年度

昨年から引き続いている『花樺殿柳嶋』（元文4年（1739）刊）と『仮名手本忠臣蔵』（寛延元年（1748）初演）及びそれに先行する浮世草子・浄瑠璃作品についての検討は一段落した。忠臣蔵の加古川本蔵の造型及び役割は『花樺殿柳嶋』をモデルにしていると考えてさしつかえないというあたりが、その要点であり、いずれ論文として発表する予定である

また、『勸進能舞台桜』巻三の注釈をまとめ、『龍都俵系図』巻四の注釈も発表された。

平成15年度

平成10年～平成14年にかけて、米国ワシントンD. Cにある議会図書館の古典籍目録編纂のプロジェクトに参加したが、この過程で新しく『都鳥妻恋笛』（享保19年（1734）刊）の改題本『梅若一代記図絵』がこの図書館に蔵されていることを発見した。そして、この点を中心に2003年3月末にニューヨークで開催されたAAS（全米日本文学研究集会）で、口頭発表を行なった。その全文は本報告書に収録されている。

なお、前年より調査を続けていた『花樺殿柳嶋』（元文4年（1739））と『仮名手本忠臣蔵』（寛延元年（1748））の関係については、その過程で収集した資料を利用しつつ、後期の特殊講義において「忠臣蔵ものの諸相」を取り上げた際に触れる機会があった。

なお、『勸進能舞台桜』巻四・五の注釈を発表し、『龍都俵系図』も巻五の注釈を発表して、いずれも完了した。また、『風流宇治頼政』は巻二が公にされた。

本報告書には、私の責任でまとめ発表してきた『勸進能舞台桜』全五巻の注釈の改訂増補版とAASでの口頭発表を収めた。

以上、八文字屋本浮世草子のうち、時代物に分類される作品群のいくつかについて、注釈的研究を主体に、後代への影響等を考察してきたわけであるが、包括的な「世界」記述のためには、なお個別作品について精細な分析が必要であることを痛感している次第である。

米国議会図書館所蔵『梅若一代記図絵』をめぐって

発表要旨

米国議会図書館所蔵『梅若一代記図絵』は、江島其磧作の浮世草子『都鳥妻恋笛』(享保 19 年(1734)刊)の改題本のひとつであるが、『八文字屋本全集・第 12 巻』の書誌解題にも出ないめずらしいものである。刊記を欠くために刊行年を特定できないが、付された広告等からみて安政 3 年(1856)前後の刊行と推定される。

もともと、この『都鳥妻恋笛』という時代物浮世草子は、初版刊行から 50 年以上経過した天明 8 年(1788)に折柄流行していた勧化物ふうの『梅若丸一代記』という題名で再刊され、さらに 50 年ほど経過した天保 13 年(1842)になって、今度は読本仕立てで題名も『梅花柳水』と変えて三度の勤めを果たしている作品であった。この間の事情については、横山邦治氏『都鳥妻恋笛』から『隅田川梅柳新書』へ(『読本の研究』1974 年)等にくわしいが、今回出現した LC 所蔵の改題改装本の存在は、それから更に 10 年以上経た後もなお一初版本である『都鳥妻恋笛』刊行からすれば 120 年以上あともなおこの作品が現役の小説として読み継がれていたことを物語るものであり、この浮世草子作品の驚嘆すべき息の長さを端的に示す資料といえる。

私はかつて、この作品が先行の怪異小説類を下敷にしていることを中心に「隅田川」ものとしての特質をどのような点で生かしているか等について考察したことがあるが(拙稿「八文字屋本時代物と怪異小説—『都鳥妻恋笛』の場合—」『近世文藝』68 号)、数多く生み出されている「隅田川」もの系統の小説作品一本作以後では、勧化本読本『隅田河鏡池伝(すみだがわがみいけでん)』や馬琴の『隅田川梅柳新書』等が即座に思い浮かぶ一なかで、この作品がどのような位置を占めているのかについて改めて考えつつ、時代物浮世草子が近世小説史において占める位置の重要性についても言及したいと思う。

2003 年 2 月に八木書店より刊行された『米国議会図書館蔵古典籍目録』の 113 頁、通し番号 0886 番に掲載されている『梅若一代記図絵』という書物がここで私が問題にしたい書物である。

まず、そこに記載されているまを引用してみる。

0886 梅若一代記図絵 UMEWAKA ICHIDAIKI ZUE IN:85/LCCN:98847081

(江島其磧) 刊 4 冊 挿絵有 袋 20.5cm × 18.8cm

序:文亭主人誌

巻 5 欠 『都鳥妻恋笛』の改題本 異称:〔松若全伝〕梅花柳水

WEB 上で公開されている Library of Congress (以下 LC と略する) のオンライン目録には、これよりやや詳しい情報が記されている。こちらも、念のために引用しておこう。

LC Call No.: PL793.6.U64 1842

Notes: Caption title (v. 2).

Written by Ejima Kiseki and Hachimonjiya Jisho. Cf. Kokusho somokuroku.

Includes a preface from "Matsuwaka zenden baika ryusui" (rev. ed. of Umewakamaru ichidaiki) published 1842. First published as "Miyakodori tsumakoi no fue" (1734), then rev. and title changed to "Umewakamaru ichidaiki" (1788), then to "Matsuwaka zenden baika ryusui" (1842). Cf. Nihon koten bungaku. On double leaves, oriental style (fukurotoji).

LC set incomplete: v. 5 wanting. DLC

Gendai "Miyakodori tsumakoi no fue" no Hachimonjiya-bon no kaidaibon, yomihon-jitate. (Edo koki)

Bungaku, kokubun, shosetsu, kinsei shosetsu, yomihon. Cf. Rare Book Project Team. LC copy has "Asakusa Honsaku" stamped.

DLC LC copy v. 2 "Exchange Drevel Institute Technology 11-15-44" pencilled in.

DLC Other authors: 880-06 Hachimonjiya, Jisho, d. 1745. 880-07 Ejima, Kiseki, 1667-1736.

Miyakodori tsumakoi no fue.

Other authors: Japanese Rare Book Collection (Library of Congress) DLC

Control No.: 5331965

巻 2 にある鉛筆での書き込み "Exchange Drevel Institute Technology 11-15-44" により、LC に入ったのは、1944 年 11 月のことであったことがわかる。LC が所蔵する古典籍は、第二次大戦以前に朝河貫一・坂西志保らによって収集されたものと、大戦後に占領軍により接收された旧日本陸軍関係諸組織に所蔵されていたものとに大別されるが（この間の事情については本目録解題を参照のこと）、本書はそのどちらにも属さない時期に Drevel Institute Technology 〈注 1〉 よりもたらされたものである。

『米国議会図書館蔵古典籍目録』では、国文／小説／近世小説／読本に分類している。備考欄に記しているように、この書物は江島其磧作の浮世草子『都鳥妻恋笛（みやこどりつまこいのふえ）』（享保 19 年（1734）刊）の読本仕立て改題改装本であるが、しかし、『八文字屋本全集・第 12 巻』（1996 年、汲古書院刊）の書誌解題にも出ておらず、その意味では、新出資料とみなしうるものである。ただ、残念なことに、刊記を有しているはずの第 5 巻を欠いているために刊行年を特定することができない。その手がかりを求めて、国文学研究資料館が公開している『国書総目録』オンラインデータで「一代記図絵」という書名を持つ作品を検索してみたところ、以下のような例が見つかった。

WORK[95874]

【書名】一休禅師一代記図絵(いっきゅうぜんじいちだいきずえ) K 1

【巻冊】五編二〇巻

【別書名】

[1] 一休一代記図絵(いっきゅういちだいきずえ)

【分類】合巻

【著者】

[1] 楼花亭／江島(ろうかてい／えじま) 作者へ 作

[2] 吉重(よししげ) [歌川／芳重(うたがわ／よししげ) 作者へ

[3] 芳晴(よしはる) [歌川／芳春(うたがわ／よしはる) 作者へ 画

【成立】嘉永六 - 安政三刊

【著作注記】〈般〉一休諸国物語図絵の摸刻再版。

【著作種別】J

WORK[221578]

【書名】釈迦御一代記図会(しゃかごいちだいきずえ) K 1

【巻冊】六巻六冊

【別書名】

[1] 釈迦一代記図会(しゃかいちだいきずえ)

[2] 釈迦御一代図会(しゃかごいちだいきずえ)

[3] 釈迦如来御一代図会(しゃかにょらいごいちだいきずえ)

[4] 釈尊御一代記図会(しゃくそんごいちだいきずえ)

[5] 世尊一代図会(せそんいちだいきずえ)

【分類】読本

【著者】

[1] 山田／意斎叟(やまだ／いさいそう) [山田案山子(やまだのかかし) 作者へ 編

[2] 前北斎／卍老人(ぜんほくさい／まんじろうじん) [葛飾／北斎／一世(かつしか／ほくさい／ 1
せい) 作者へ 画

【成立】天保一二刊

【著作注記】〈般〉明治一七版あり。

【著作種別】J

WORK[247541]

【書名】親鸞聖人御一代記図絵(しんらんしょうにんごいちだいきずえ) K 1

【巻冊】五巻五冊

【分類】伝記

【著者】

[1] 一禅(いちぜん) 作者へ

【著作注記】〈般〉明治一九版あり。

【著作種別】J

WORK[461632]

【書名】天満宮御一代記(てんまんぐうごいちだいき) N 0

【別書名】

[1] 天神一代記図会(てんじんいちだいきずえ)

【著者】

[1] 岡野／是重(おかの／これしげ) 作者へ 編

【著作種別】J

WORK[523488]

【書名】祐天上人御一代記図会(ゆうてんしょうにんごいちだいきずえ) K 1

【巻冊】六巻六冊

【別書名】

[1] 祐天上人一代記(ゆうてんしょうにんごいちだいき)

【分類】読本

【著作種別】J

WORK[526874]

【書名】義経一代記図会(よしつねいちだいきずえ) K 1

【分類】絵本

【著者】

[1] 鈍亭／魯文(どんてい／ろぶん)[仮名垣／魯文(かながき／ろぶん) 作者へ 作

[2] 歌川／広重(うたがわ／ひろしげ)[歌川／広重／一世(うたがわ／ひろしげ／ 1 せい) 作者へ
画

【成立】安政三刊

【著作種別】J

WORK[1796458]

【書名】義経一代記図抄(よしつねいちだいきずしょう) K 1

【巻冊】一軸

【分類】絵画

【著作種別】J

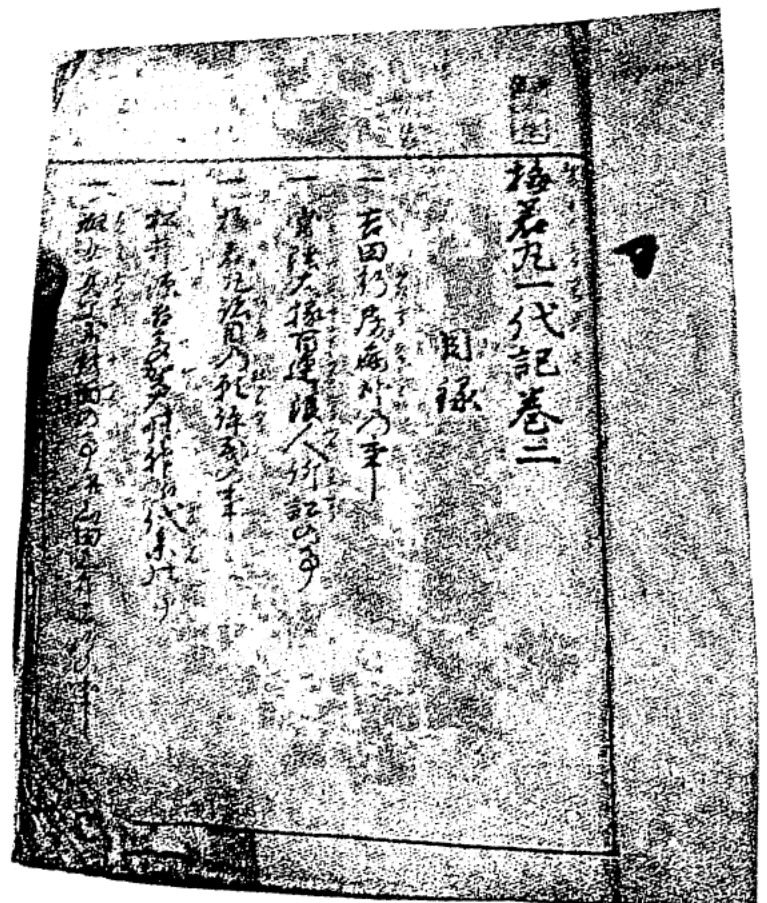
年代的には『釈迦御一代記図会』の天保 12 年(1841)がもっとも早く、他には嘉永 6 年(1853)・安政 3 年(1856)などの年号が見える。後述するごとく、『都鳥妻恋笛』が読本仕立てで刊行されたはじめは天保 13 年(1842)であり、安政 3 年の再版本も存在することからすれば、LC 本は安政期以後の刊行と考えるべきであろう。

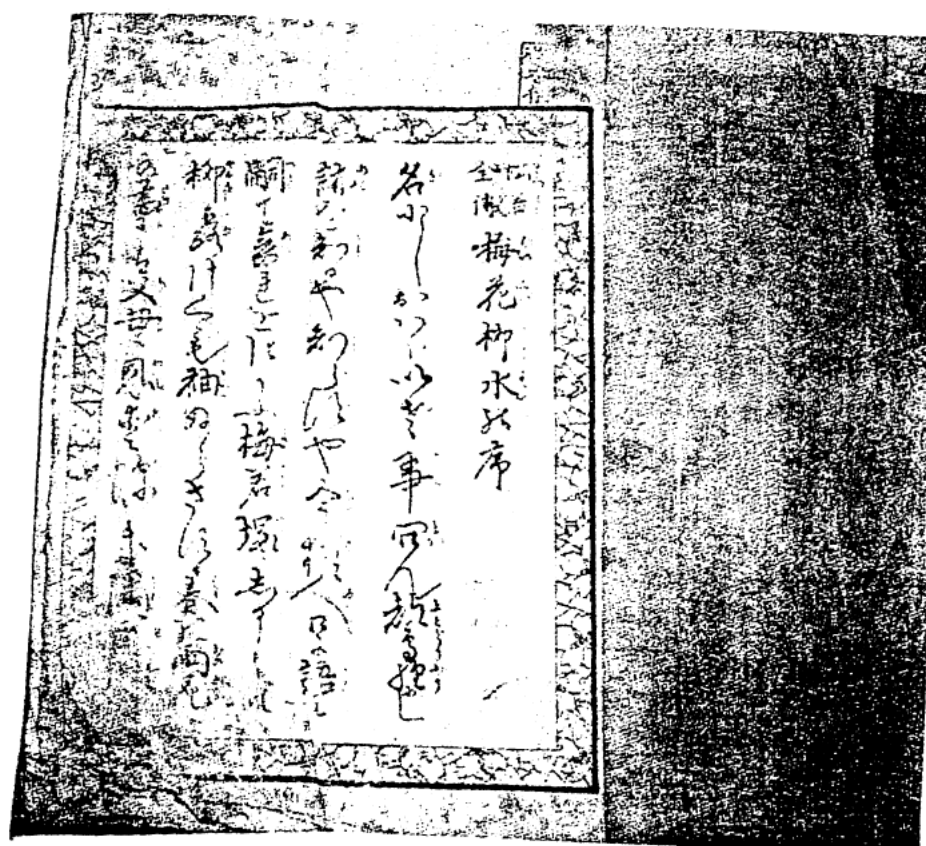
もともと時代物浮世草子として出版されたこの『都鳥妻恋笛』という作品は、後述するごとく以後何度も体裁を変えて刊行されており、今回出現した LC 本は、その最下限の時期に刊行された版とみなされる。

以下に掲げるのが、該書の表紙(題簽の残る巻二と巻四)と序・巻一卷頭の目録・内題(これも巻二と巻四)の写真である。



同内題



[illegible]

オリジナルの『都鳥妻恋笛』は5巻5冊で、享保19年(1734)に八文字屋自笑・江島其磧連名の序文を付して刊行されているが、実質的な執筆者が江島其磧であったろうことは長谷川強氏はじめ諸家の指摘するとおりである。

そして、初版刊行から54年後の天明8年(1788)に、折柄流行していた勧化物ふうの体裁に改められて『梅若丸一代記』という題名で再刊される(注2)。そして、それからさらに50年以上経過した天保13年(1842)になって、今度は読本仕立てで、題名も『梅花柳水』として三度の勤めを果たすことになったのである。この間の事情については、横山邦治氏『『都鳥妻恋笛』から『隅田川梅柳新書』へ』(『読本の研究』1974年)にくわしく論じられており、前記『八文字屋本全集・第12巻』解題や石川俊一郎氏「近世梅若物の一考察—『都鳥妻恋笛』他二篇の書誌」(『梅若縁起の研究と資料』、昭和63年1月)等にもくわしい書誌的な記述がある。

今回出現したLC本は、それから更に10年以上経過したあとにおいてもなお一初版刊行時からすれば120年以上あともなお—この作品が現役の小説として読み継がれていたことを物語るもので、この浮世草子作品の驚嘆すべき息の長さを端的に示す資料といえる。

しかも、注目すべきは、この間、本文にほとんど変更が加えられていないことである。版面のいたみや刊記を新しくする等の関係で一部彫り直しがなされ、それにともなっていくわずか語句の異同がみられるが、いずれも本文の改変といえるようなものではない。その意味では、本文は初版時のまま120年以上も生き延びてきたわけである。

しかし、書物の体裁や挿絵は大きく異なっている。この点だけでいえば、それぞれの版を手にした読者は、印象としては全く別の書物のように感じたにちがいない。そのことをなによりも端的に示すのが挿絵の変化である。

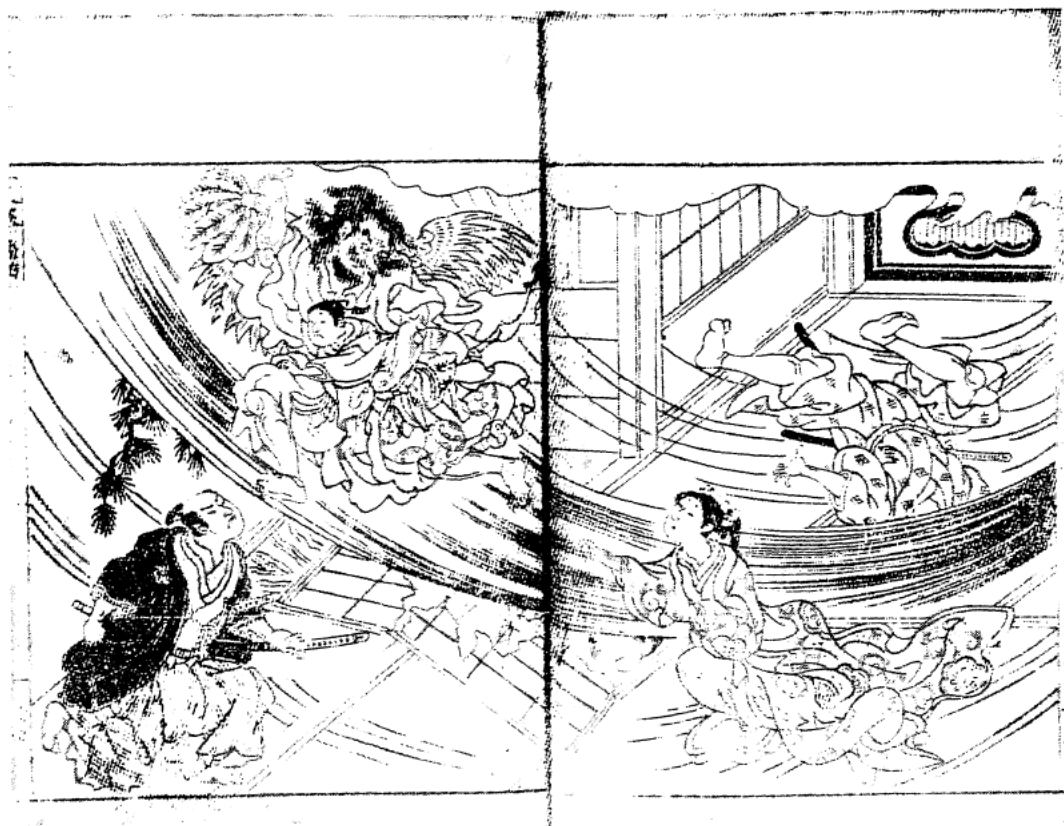
ここではふたつの例を挙げてみる。

まず最初の例は、天狗になった松若丸の伯父上かずさのたいふかずつら総大輔員貫すいてきしょうにん=吹笛上人が、松若丸をさらっていく場面で、本文では巻1の3にあたる。

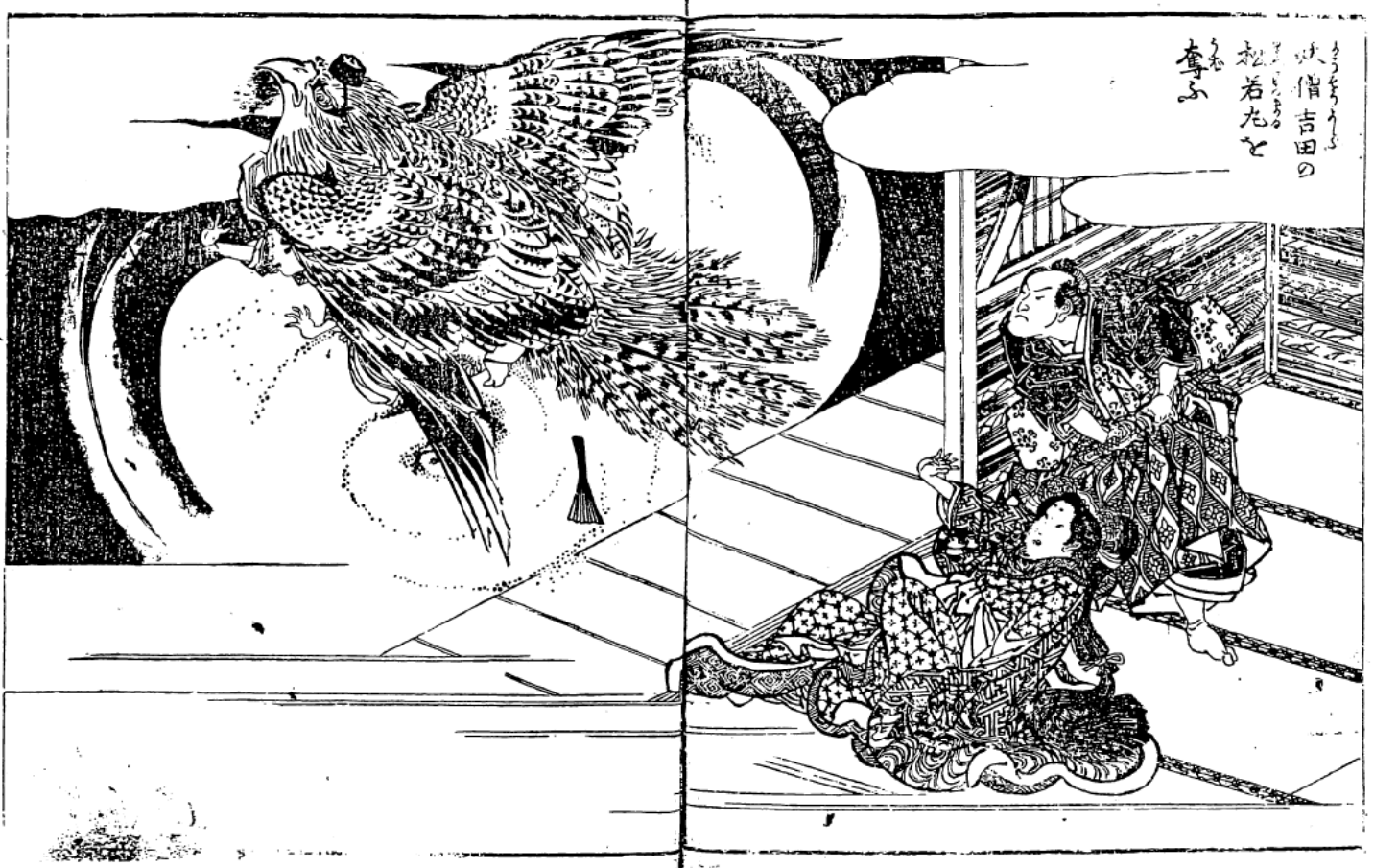
『都鳥妻恋笛』
巻1の3挿絵



『梅若丸一代記』の同じ箇所挿絵



『梅花柳水』の同じ箇所の挿絵



初版の『都鳥妻恋笛』では、吹笛上人が吉田少将の妻になった班女（はんじょ）に横恋慕してくどくシーンが右半分にあり、左側に出る天狗の顔つきもやや鼻が高い程度にすぎない。その下に立ち騒ぐ家来たちの姿も描かれているため、全体としてはかなりごたごたした感じを受ける。いずれも本文に書かれている要素なので、挿絵としては本文にきわめて忠実であるといえるが、絵としてのおもしろみは全く感じられないといってよい。

これが、『梅若丸一代記』になると、さらわれていく松若と天狗がくつきりと描かれ、呆然と見送る班女の姿も印象的である。さらに、『梅花柳水』（『梅若一代記図絵』も同じ）になると、天狗は化鳥のような姿の非常に精細な図柄になり、班女や家老の山田三郎の着物の柄も手の込んだものになっている。

もうひとつの例は、松若を救うため班女が遊女になって吹笛上人をおびきよせるところ（本文巻5の1）である。

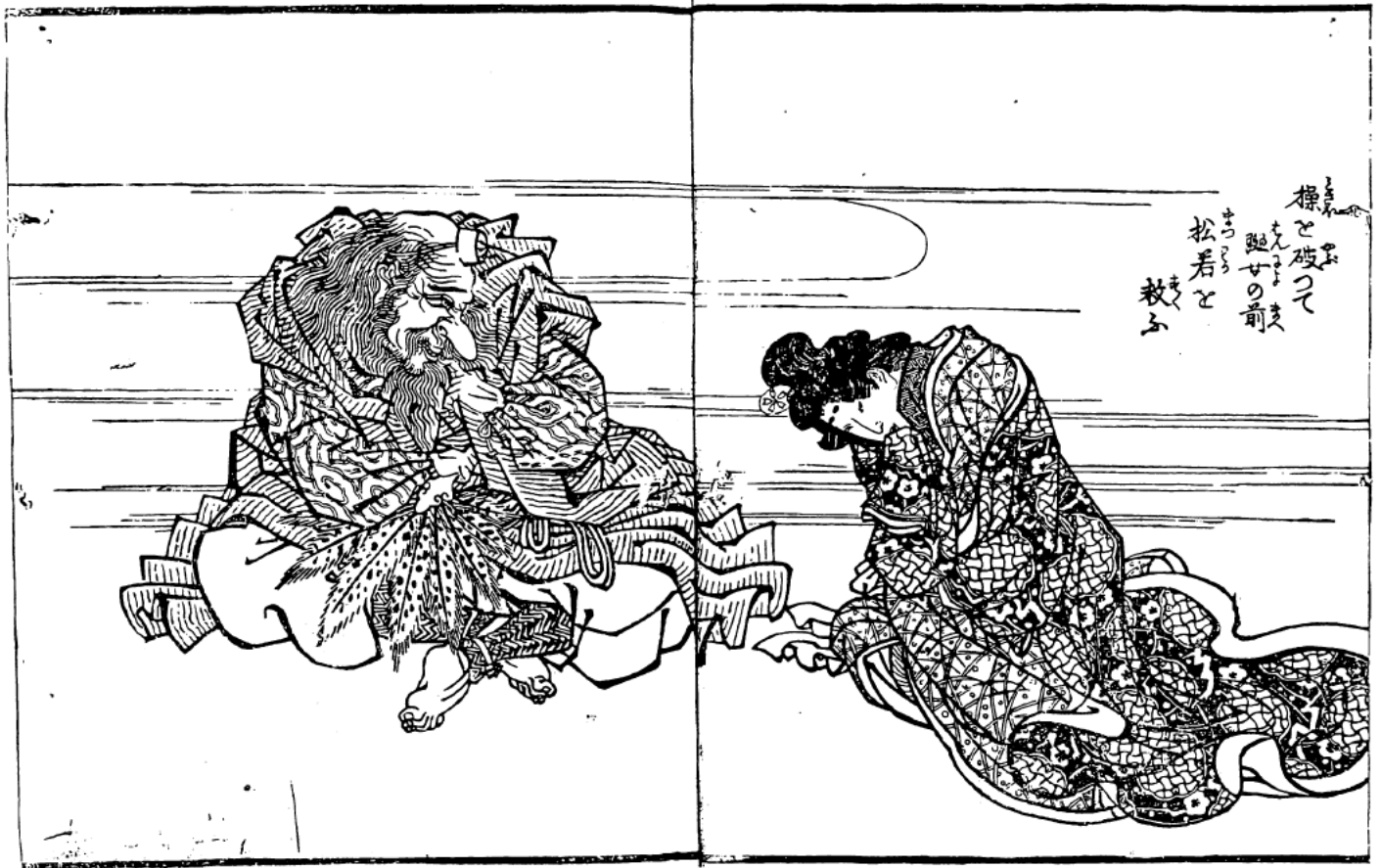
『都鳥妻恋笛』
巻5の1の挿絵



『梅若丸一代記』の同じ箇所の挿絵



『梅花柳水』の同じ箇所挿絵



『都鳥妻恋笛』では挿絵の下半分に班女が遊女になったことを示す図柄があり、上半分は山伏姿になって班女に会いに来た吹笛上人を尼になった班女が迎える図である。『梅若丸一代記』では、班女に言いよる天狗とそのすきに逃げ出す松若丸の姿が対照的に描かれており、『梅花柳水』では、松若丸の姿も消えて、班女と天狗二人の図になる。こちらでは、天狗のいやらしい目つきが特に印象的である。

これらの挿絵は、いうまでもなく本文に対する手引きであるわけだが、初版のものは、1話の内容を見開きのなかに均等に盛り込むことに主眼が置かれているため、結果的にはごたごたした情報伝達性を欠いた絵柄になり、全くおもしろみのない挿絵になっている。これに対し、『梅若丸一代記』になると、内容的に興味深い部分や視覚的にもおもしろい要素だけが選り出され、他は捨てられ、絵としての独立性も高くなる。その傾向は『梅花柳水』になるといっそうはっきりしており、絵としても洗練されたものになっているので、これだけでも十分に鑑賞に値するものになっている。

こういうふうに二箇所の挿絵を対比していくだけでも、三者の違いははっきりしている。こうした視覚面での変化が、この作品の長い寿命の大きな要因であったろうことはまず疑いのないところである。

ただ、そうはいっても、この長い作品のなかには、挿絵として全く取り上げられない要素ももちろん存在する。その代表が、土中から吹笛上人が掘り出されるシーン（本文巻1の2）や、尼になった班女を見て上人の肉体が消え去るシーン（本文巻5の1）である。かつて考証したように、これらの場面には先行の怪異小説『金玉ねぢぶくさ』（元禄17年刊、章花堂）が利用されているのであるが（注3）、その本文は、

天狗房班女の姿のかはり果たる体を見て、忽ち染着せし愛念去ると、はつといふ声の下より、肉身朽て霜の消るごとく、四大分散して只一連の白骨と成る。残る物は頭巾すゞかけ衣装ばかり。執心こりかたまつて、その念にて是迄具足してありし形、愛着の念消るとともに、仮の五体も消え失せり。誠に一念五百生繋念無量劫、恐るべく慎むべきは愛着の道と、をのをの肝をぞつぶしけり。

とある。『雨月物語』（安永5年刊）「青頭巾」にも利用されていて、その意味では有名な部分なのであるが、しかし、これらのシーンは初版以来絵にされることは全くないのである。おそらく、こういう伝奇的な趣向は、目で楽しむよりも文章を通して楽しむべきであるという共通理解ができあがっていたのであろう。

そして、（わずらわしいのでもはやいちいち例証はしないが）、挿絵の構図として一貫して変わっていない最大の例が、隅田川土手の柳の木の下に笛を吹きつつ姿をあらわした梅若丸と班女の姿（本文巻4の3）である。中世の謡曲「隅田川」以来受け継がれてきた隅田川物には欠くことのできない場面であるわけだが、すでに死んでいる梅若丸をどう扱うかがそれぞれ作者の腕の見せ所であったといえる。

謡曲では、行方不明のわが子を追ってきた母親が隅田川のほとりの塚の中から聞こえる我が子梅若丸の声にさそわれて一瞬の幻影を見る、という詞章になっているが、実際の上演にあたってはいろいろの型があったようである。また、近松の『双生隅田川』（享保5年初演）では、救い出された松若丸を梅若丸の身代りのようにして登場させるという趣向を設けている。が、本作においては、梅若丸の亡霊を登場させ班女との対面の場面を設けたうえに（このシーンの下敷になったのが浅井了意の『伽婢子』巻八の四「幽霊出て僧にまみゆ」であったことも（注3）の拙稿で指摘した）、夢の中ではあるが梅若丸の亡霊に長々と前生を語らせているのである。そのようにして、作者は、子を失った母親の悲しみに同化し、それを共有し、なぐさめようとしているのである。

本作の最大の魅力がここに存することを、私はここで何度も強調しておきたいと思う。そして、それゆえにこそ、巻5において松若を奪い返すための計略に班女が加担していくという展開が自然なものになっているのである。

その意味では、子を失った母親の悲しみという、隅田川ものが本来有しているテーマを、本作品は非常にくっきりしたかたちで描き出しているといえる。それを中心に置きつつ、お家騒動という近世長編小説に通有の骨格をからませ入定僧の破戒と天狗への変貌という伝奇的趣向とそれにからんだ色模様等等が非常にうまく融合してできあがっている世界なのである。その意味で、本作は、近世長編小説の基本的な要素を過不足なく備えた作品と評してよいと思われ、おそらく、そうした点が、江戸の後半期、120年以上にもわたって本作が読み継がれた最大の要因であると考えられるのである。

- 注1 Drevel Institute Technology については未詳。ただし、Drevel は Drexel かもしれない。もしそうであるならば、フィラデルフィアの Drexel Univesity と関係があるか？
- 注2 ちなみにいえば、1996 年に『八文字屋本全集・第 12 巻』が刊行されるまで、『都鳥妻恋笛』の唯一の活字版として流布していたのは『帝国文庫 珍本全集・上』（博文館、明治 31 年（1898）刊）所収のものであったが、その底本になったのがこの改題本である。そういうこともあってか、『日本文学大辞典』（新潮社、初版は昭和 11 年）は、『梅若丸一代記』を初版本とし『都鳥妻恋笛』を再版時の書名とするような誤りを犯しており、無用の混乱を生んでいた。
- 注3 拙稿「八文字屋本時代物と怪異小説—『都鳥妻恋笛』の場合—」『近世文藝』68 号 1998 年 6 月

『勸進能舞台桜』注釈

【はじめに】

本注釈は、一九九八年十一月～一九九九年八月にかけて時代物浮世草子研究会においておこなった輪読会の成果を、木越治の責任においてとりまとめたものである。

時代物浮世草子研究会は、平成七年（一九九五）秋より開始した主として八文字屋全集を輪読することを目的としたあつまりで、恒常的な参加者は、木越治（金沢大学）・高橋明彦（金沢美術工芸大学）・高島要（石川工業高等専門学校）・木越秀子（北陸古典研究会会員）の四名である。この他に、杉本紀子（東京学芸大学付属大泉高校）・村戸弥生（韓国釜山大学）・穴倉玉日（金沢大学大学院博士課程在学、以上いずれも所属は二〇〇四年三月末現在のもの）らも参加していた。

最初に取り上げたのは、『八文字屋全集』第八巻所収の『風流宇治頼政』（享保五年刊）で、以後、ほぼ月二回、一年で一作を読了するというペースで研究会を開いてきた。ただし、ここ一、二年は諸般の事情でそのペースが落ちてきている。

これまでに読みあげた浮世草子作品は、『風流宇治頼政』（享保五年刊）、『都鳥妻恋笛』（享保十九年刊、全集十二巻所収）、『龍都俵系図』（元文五年刊、同十五巻）、『勅進能舞台桜』（延享三年刊、同十八巻）、『花柳巖流島』（『花柳巖柳嶋』（元文四年刊、同巻）の計五編である。

このうち、『龍都俵系図』の注釈は、高橋明彦氏がとりまとめた責任者となり『北

陸古典研究』第14号（一九九九年10月）～第18号（二〇〇三年10月）に掲載され完結した。また、『風流宇治頼政』の注釈は、高島要氏がとりまとめ、『石川工業高等専門学校』第34号（二〇〇二年3月）以降に継続して連載中である。

この『勅進能舞台桜』は、木越治の責任で『金沢大学文学部論集』第21号（二〇〇一年3月）～第24号（二〇〇四年3月）に分載し完結したもので、今回の報告書のために改訂増補し合本としたものである。

輪読会での注釈の成果をなんらかのかたちで発表したいということは当初から考えていたが、なにぶん、分量が多いため、発表できる媒体は限られてしまう。それで、枚数制限のそれほど厳しくない参加者の勤務先の紀要等にそれぞれの責任で発表することにしたものである。発表時は時代物浮世草子研究会ないし参加者の連名で、それ以後の改訂増補等は発表責任者の名においてする、という了解のもとにこの合冊版は作成されたものである。ここにその経緯を記し、参加者に心から謝意を表するものである。

『勸進能舞台校』について

延享三年（一七四六）正月八文字屋刊行の浮世草子『勸進能舞台校』（全五巻）は、序文の署名こそ「八文字自笑・同其笑」となっているものの、実作者は多田南嶺であるというのが現在の通説である。中村幸彦氏は「多田南嶺の小説」（『中村幸彦著述集 第六巻』所収、初出は昭和15年）において、本作品を「構成才能を縦横に働かせ、警句地口の機知を極度に発揮した作品」と評し、「南嶺において、当時他の作者に求め得ないもの」と述べたうえで、具体的な文例を示しつつ「南嶺の代表作の一つ」と結論づけている。これをうけて長谷川強氏も『浮世草子の研究』（昭和44年）において、前年刊行の『阿漕浦三巴』同様浄瑠璃の『播州皿屋舗』（寛保七年七月十五日、為永太郎兵衛・浅田一鳥作、豊竹座上演）に拠るほか、歌舞伎の「若緑初面箱」（寛保三年十一月、京蛭子屋座願見世）に想を得た部分もあることをなど指摘している。

【凡 例】

- 一 『勸進能舞台校』の底本は、長谷川強他編『八文字屋全集 第十八卷』（汲古書院、一九九七年刊）に拠った。詳細な書誌情報等はすべてこちらを参照されたい。
- 二 通説の便のため、八文字屋全集に基づく校訂本文を掲げた。正確な翻刻本文が存在することに鑑み、この校訂本文は、できるだけ読みやすくなるような本文づくりをめざしたものである。その具体的な作成方針は以下のとおりである。
 - 1 漢字は可能な限り現行の字体に直す。
 - 2 底本の句読点はすべて「。」で区切られているが、適宜「、」「。」「」を区別する。
 - 3 底本にない箇所でも、意味を取りやすいと思われる場合には、適宜「、」「。」「」を補う。
 - 4 人物の発言や心中思惟の部分には「」を付す。
 - 5 底本のルビはすべて生かすが、それ以外にもルビがあった方が読みやすいと思われる箇所には適宜補う。
- 三 助詞の「共」、形式名詞の「事」等、仮名に開いたものがある。
- 四 全体として、日本古典文学を学ぶ海外からの留学生が、本文を読むことに關して抵抗を感じないような本文づくりをめざした。
- 五 注釈は簡潔をむねとし、できるだけ近い時代・近いジャンルの用例を掲げるように努めた。
- 六 用例本文は通行の字体を基本とし、ルビは必要と思われるもののみ（一）に入れて掲げた。
- 七 用例の典拠表示は、（近松・宵庚申）（秋成・菱形氣）など作者名を掲げるもの、（咄本・喜美賀桑寿（安永六年刊））のようにジャンルと刊年を示すものなど一貫して定めていないが、あえて統一することはしていない。
- 八 各章の冒頭に、梗概を掲げた。

序

とうくたりあがりちりやたらり、あがり所千代までおはしませ。われらも千秋さふらはふ。鶴と龜とのよはひにて、心に任する筆のすさび、浄瑠璃に擬て、鳴るはたきの水のたためことばをいひながす五巻のとちめを五番の能にくみたて、いづれも様の御目(め)にかけゑぼしの紐(ひも)も永き春駒(はるこま)、しやんこくといさみにいさんで、売(う)ひろ

めんとは、あゝらやうがましや。サアラバ鈴(すず)をまいらせうと、うやまつて申す。

延享三つ

とらの

年始

八文字

鈴

自笑 [印]

作者

同

三番更 其笑 [印]

◆とうくたり……鶴と龜とのよはひにて心に任する。ここまで、謡曲「翁」の詞章を丸取りしている。

◆心に任する筆のすさび。筆のおもむくままに書いたもの。序文特有の謙辞であるが、「かへす」たのみ置きて、はかなき筆のすさびにもかき残し「芭蕉・芭蕉を移す詞」のごとくいくらか雅びな趣のある用語といえる。

◆浄瑠璃に擬て。解説でふれたように寛保七年七月十五日京都豊竹座上演の浄瑠璃の『播州血屋舗』(為永太郎兵衛・浅田一鳥作)に拠ったことをいう。

◆文句取り。
◆五巻のとちめ。本来は、五巻の書物をとじた結び目の意。ここは、五巻全体をさす。
◆五番の能。能の上演形式の一つで、一日の番組を脇能物(神能)、修羅物、雙物(女能)、雜物(物狂能)、切能物(鬼能)の順に上演するもの。能ではこれを正式のものとして神・男・女・狂・鬼にそれぞれ割り当てる。
◆いづれも様。皆様。「いづれも様への立分」(近松・心中宵庚申・上)「いづれも様のお志浅い深いもあらざれば」(秋成・世間菱形氣・二・三)

◆御目にかけゑぼし。「お目にかける」の「かける」に「掛鳥帽子」をかけたもの。「掛鳥帽子」は掛緒(かけお)を用いなくて頭に押し入れて、うしろの針だけでとめておく折鳥帽子。「(C) 日本が式典とか祝祭日とかに着用する、ある種の布製の帽子」(日葡辞書)
◆紐も永き春駒。ゑぼしの紐が長いのと日が長いとを掛け、さらに日の長い春と続けて「春駒」を導き出している。「心のいさむ春駒乗て来る仕合の時津風」(其磧・風流宇治頼政・五・三目録)
◆しやんこくと。馬の鈴の音を表す

語。「くつはの音はしやんこく」。馬かたは思ひくうたをうたひ」(咄本・喜美賀楽寿(安永六年刊)・序)
◆あゝらやうがましや。サアラハ鈴をまいらせう。これも「翁」の末尾三番更の舞の「あら様がましや候。さあらば鈴をまいらせう」による。
◆延享三つとらの年始。西暦一七四六年。丙寅。桜町天皇。九代將軍家重の治世。八文字屋はこの年他に『曾根崎情話』を刊行している。前年の十一月十一日には初代八文字自笑が亡くなっているが、この年には『賢女心化粧』『今昔出世扇』『阿漕浦三巴』などが刊行された。

目 録

高砂 狂言 入間川

第一 陽春の徳を備へし契情の姿

然れども此大夫は其気色取が第一にて

花葉時をわかぬ家老職の諫言

◆高砂 謡曲。脇能物。世阿弥作。肥後国阿蘇の宮の神主友成が都に上る途中、高砂の浦で景色をながめていると、老人夫婦がやってきて松の木陰を掃き清める。そして、友成に高砂のと住吉の二本の松を相生の松といういわれや松のめでたいことなどを語って、舟に乗って沖に去る。友成が住吉に行くときと明神が現われ、御代を祝って神舞を舞う。祝言曲として、結婚式などの祝儀の席でもよくうたわれる。

◆入間川 狂言。入間川にさしかかった大名が、物事を反対にいう入間詞を聞いておもしろがり、衣服や太刀などを与えるが、最後に、その入間詞であざむき、持物を取り返す。

◆陽春の徳を備へし 「陽春の徳を備へ

て南枝花始めて開く」(高砂)による。

◆契情 「傾城」に同じ。南嶺には多い用字。「契情狂ひに身を持崩し。勘当せられて」(南嶺・今昔出世扇・二・三)等。

◆然れ共……花葉時をわかぬ 「然れ共此松は、その気色としなへにして花葉時を分かず」(高砂)による。松は花の時期、葉の時期という区別がなくいつも緑の葉をつけている、という原典の意を転じて、いつもかわらず忠義を尽す家老、と続けたもの。

◆気色取 きげんをとること。「能おちつき気色(けしき)どり、いやあまり気色どるもわるし」(談義本・当世花街談義(宝暦四年刊)・二・品三)

◆鳴尾の沖 兵庫県西宮市東部。「波の

第二 遠く鳴尾の沖漕だ大尽

夜の鼓の拍子を揃たる末社がすゝめ
あらはれ出し身のさび落て行紙子一重

第三 入間詞は老人客のあしらい

にくいとはいとしきのあまりにて
賣ふとは賣まいとの古入道が恋路

淡路の島影や。遠く鳴尾の沖すぎてはや
住の江に着きにけり」(高砂)

◆沖漕だ 「おきこぐ」は、芸芸などがきわめてすぐれた境地に達すること。

◆夜の鼓拍子を揃たる 「夜の鼓の拍子を揃へて」(高砂)による。

◆末社 「客」を「大尽」というのを「大神」に言いかけ、それを取りまく「末社」の意でいう遊里で客の取り持ちをする者。太鼓持。幫間。「買手を大神といい、太鼓を末社と名付け」(都の錦・元禄太平記・一・二)

◆身のさび 自分の責任。みずからが負わねばならないとが。「不慮の悪縁の。身の錆刀、夫の手で刃にかゝる」(近松・堀川波鼓・中)

◆紙子 紙で作った衣。和紙をコンニヤ

ク糊ではり合わせ、これをよくもんで柔らかにし、これに柿渋を塗って仕上げたもの。「御覧の如くやふれ紙子一重の境界」(其蹟・都鳥妻恋笛・二・一)

◆入間詞 反対言葉。さかさ言葉。狂言「入間川」で有名。「総じて入間ことばには、さかさことばを使ふにより、此所を深いといふは、浅いといふこと、上へまはれといふは、ここをわたれといふことと、心へて」(狂言記・入間川)

◆にくいとはいとしきのあまりにて ことわざ。「憎い憎いは可愛の裏」などともいう。口で憎いというのは愛するあまりのことだ、ということ。入間詞の例としてあげたもの。

○巻一之一

○陽春の徳を備し契情の姿

【梗概】

室町幕府の名家で播磨の国を治める赤松家の跡取り息子友仲が、なじみの都の大夫吉野の一行（かぶろの籠、引船の綱手、やり手のまん、幫間の才八・尺助ら）を引き連れて、別邸として新たに用意した桜屋敷で花見をしている。尺助の提案により、家代々の宝である珊瑚珠の盃で酒をくみかわそうということになり、皿を保管している家老・鶴間三郎左衛門のところに使いを出す。が、やってきた三郎左は皿のかわりに父友成の位牌を出し、友仲の遊蕩をいさめる。父友成は友仲が六歳の時に死去し、成人するまで家督は伯父の有馬岡山が預かっているのだが、友仲の不行跡をいいことに、二十一歳になった現在においても全く返す気配がないどころか、かえって自分の子の蔵人に継がせてお家を買取つてしまおうとしているのである。三郎左や同役の加古川右近は友仲のためにこの事態を非常に心配しているのであった。それとわかるだけに友仲は反論できない。

その後、三郎左は高使屋敷に京から高使が到着するので、友仲にもあとから来るように告げながら、出迎えるために出ていった。

今をはじめの旅羽織く、日もいとど猶ゆたけき。

「抑、是は播州日頃の大のら、遊びずきの大將友仲とは我事なり。我いまだ太夫と手を引いて遠がけ致さず候ふ程に、此たび思ひたち、領分の浜めぐりと出かけ候。又太夫を入をく桜屋敷、普請が出来たと申し候ふほどに、出がけに立より一見致さばやと存じ候」

と、紫のくすり頭巾、黒羽二重の三つがさね、無紋の羽織、大小の長からぬに粹と

は見え、びかくする衣装をうれしがりし、たれほにまさき時代の恋しりと各別の出たち、銀ぎせるの長張もたする様な、高のしれた物ずきにあらねば、小姓組お手まはりはいふに及ばず、底いたりなる風俗、末はるくの都路もおよばず、いざしら雲のはるか段のちがふたる全盛。

桜屋敷に着給へば、高砂の松の春風も爪くはへるばかり、生身の松のくらゐ、都より引ぬかれて下りしよし野といふ太夫、かぶろの籠にたばこぼんさげさせ、引船の綱手、やり手のまん、太鼓持の寸八・尺助などいふおかし仲間まで一所に召かへられて、太夫さまの御伽奉公。よし野の名にめで、桜づくしの大庭、いろくの花もよし野にはけおされ、色なきがごとくにぞ見えける。太夫はうはぎゆりかけ、

「今日よりお下の浜ぐつれて御出との慰み、又あつた物ではござんすまい。まづさゝひとつ」

と青琅玕の酸鍋。いたりづくしの取ざかなは、身もちのよひ美人にひとしく、うまみはうすけれども、さしあたつてさはやかなる座敷に、引船が、

「太夫さまの樹の帆かげより、おあひ申し上げん」

と出れば、やり手が

「どふでも、けふは大酒」

と心の石づきをすへて、しやべる折こそあれ、さかりのさくら花、さそふ春風に吹まがひはらくとちりかゝりけるが、大尽友仲殿のもたせ給へる盃へうかびければ、人々、刈萱道心の故事を思ひ出し、

「大尽のめいつた心にともならせられては」

と案じけるに、おもひの外、大尽御機けんよく、

「見よや、皆の者ども、花一時といへども、無常の風は夕辺をまたず。何時死のふもしれぬは人の命。一寸先はやみの夜。又とむまれて来にくる此界。たのしまひで何とせふ。長からぬ世に物おしみするは愚く。ソレ牽頭どもに物とらせよ」

「うけ給はる」

とお側出頭の尾上弥文太、蜀紅の大財布よりみだけ小判つかみ出してまきちらせしは、はや山吹も咲そへしかと、縁側庭の飛石まで黄金世界とぞ見えにける。

大尽仰せ出さるゝは、

「太夫ことは此地にちか付きなく、たれをかもしる人にせん高砂のまつ身あればこそはるゝとたよりに下りし。何がな馳走に」

とおことばにすがりて、京からつひてくだりし牽頭の尺助、

「おそれながら、こゝは太夫さま御所望なされて、御家の重宝、都までもかくれなき、珊瑚珠の皿、盃にて、あつかんにして引きかけて見たいもの」

と、すゝめられ、見たひ様な顔付。国も山も取てゆけの若鳥大尽なれば、右の皿預り飭間三郎左衛門長能方へ

「名物の珊瑚の皿、早々持参すべし」

と、しきなみの御使。まつ間久しと又はじまる。

「酒もろともにいきた松を、ながめてくらすおもしろさ。それも久しき名所かな」と、やり手が鼻のひくいを「興さゝめく最中取く」に

「御家老飭間三郎左衛門出仕」

との披露。いふてやつたはやつたれども、かたくななる家老殿には大尽もちとよはりめ見へ、

「是はく三郎左、子どもになりともたせば」

とお詞。

「有がたし」

とおそばちかくよりければ、牽頭ども

「コリヤだん那め、うきくされ、わつく」

と指のまたひろげてそゝのかすれば、三郎左衛門にがくしき顔色、

「个様なる乱心者ども召かゝへられての御用はいかゞ」

といはれ、蛭に塩辛くふて酒のまぬ心地し、みなくまじめに見えにける。

「おそれながら、御家の重宝さんこの皿持参仕る様に仰下され候ふゆへ、持参仕たる」

と、高藤絵の箱雲足の台にのせてさし出せば、

「いふてはやつたれども、小事いふて持ては見えまいと案じたるに、太夫への外聞なんと身がはゞを見やつたか」

と、いはれぬ所へ潜上がはりてうれしがらるれば、三郎左衛門つゝしんで箱をひらき、三重の巾物内匣の覆をとれば、珊瑚の皿はこれなくて、「春林院東風大禅定門」と書付たる位牌を取出し、台にすへ、手にさゝげて、三郎左衛門上座になをれば、父の戒名、若殿友仲おぼえず首をさげ給へば、三郎左衛門位牌をさゝげながら、

「コレ若殿、三郎左衛門が申すことではござらぬ。御はてなされた大殿友成様、御戒

名は春林院殿の御意。

ヤアこなたはノウ、なさけなや。此赤松の御家は尊氏公御開国のみぎり、格別の勲功によりて播州一円に下しをかれ、その上当家は村上源氏の嫡々、御先祖具平親王へ父帝村上天皇より下しをかれし珊瑚の皿と申すは、わたり八寸ふかさ三寸の円皿。かゝる大の珊瑚珠、呂宋・阿羅漢にも聞えよばず。そのうへ是にひとつの不思議ありて、此皿を海へむかひうつふけて影をうつせば、三拾町四方は立どころに干潟と成り、あふのけてかげをうつせば、其干潟たちまち潮みち来れり。故に干珠満珠の玉皿と名づく。是のかみ神功皇后三韓賁の時、宇佐の神の靈夢によりて、龍宮より献ぜし宝物なれば、尊氏公も御所望有て拝見なされしにも、吉日良辰を撰給ひ、三日御深齋あり。

其上赤松代々の継めは、此玉の皿を証に上京いたすべく旨仰せ出され、其のち御代々の御つぎ目は、此玉皿を以て相すむ程の宝物。今更申さいでも御存知の御事。

此位牌春林院殿御死去のみぎりは、こなたには未六歳。此播磨国は西国のおさへなればとて、京都よりも大切に思召、伯父御有馬入道円山様に看抱のうしろみ仰せ付けられ、家の重宝玉の皿は、家古き家老の内へ預り、何事も円山と家老とも相談づくにて國務をとり、友仲成人に及びなば、家督願ひ申すべしとの御指図を以て治め来る所に、はや廿一歳に御なりなさるれども、御身持取じめなく、忍びての京がよい。不行跡者と有りて、円山様より御家督の願ひ仰せ上げられず。

コレ、よふ御合点なされい。此一国はこなたの物。御家督御相統の上は、ハテ御大名じや物、お心まかせの御なぐさみは、世上へもれぬ様にいたしかたも有べし。伯父御

円山様の日頃の御心入れ、よく知つて御座りながら外のきこえもはかり給はぬ此桜屋敷。その上、御代々の御重宝を、どこのうしの骨やら馬のほねやらしれぬやつらが慰み酒の盃にとは、天命につきさつしやれたか。

大殿の臨終まで、わたくしと相役加古川右近とをめされ、『過來し世々のしら雪と、きゆる命はおしからずとも、老の鶴のねぐらに残すおさな子、世に立てくれよ』との御遺言。草木心なしとは申せども、花実の時をたがへず。子として親の心をつがざるは、草木にもおとりし御心。大殿の直の御異見と思し召して、賣てわたくしが申すことの葉ぐさの露の玉、お心をみがくたねともなして下されかし。

と、涙をながしいさめければ、友仲なみだにくれられしが、わけとて、とかく太夫引舟に外聞きのどく、

「身が女房にもと思ふてよびむかへし太夫を、馬の骨牛の骨とのあてこと、主人へ対して無礼の一言」

と、そりを打つていからるれば、

「サア、御心まかせにあそばせ。コゝあそばせ。所詮そのお心では此一国は伯父御円山殿の御子息有馬蔵人殿の物となるは目の前。いきておもしろからぬ世界、サア、あそばせ」

とくび筋なであげすりよれば、友仲あとへもさきへもゆかず、無念がり給ふを、太夫は

「ア、聞てはおまへの御ため、わしが爰に居ては御身のあたとなること。御いとま下されませい」

とあれば、三郎左衛門おさへて、

「イヤ、若殿の御心のかかりし御自分、それほどのことは拙者が工夫して、伯父御様のお耳にいらぬ様にはからふべし。末社とやら末寺とやらんいふ者どもは、是より都へ帰るべし。金子は拙者がよき程にくれて上さん。」

今日は京都より高使何事の御用かはしらず、案内なしに御着との御事。円山様はは

◆今をはじめの旅羽織く、日もいと猶ゆたけき「今を始の旅衣、今を始の旅衣、日も行末ぞ久しき。」(高砂)に

◆旅羽織 旅行をする時、塵よけのために着る羽織。「越前の国気比の浦へと旅ををり」(近松・傾城反魂香・上)

◆抑 是は播州日頃の大のら、遊びずきの大將友伸とは我事なり「抑、是は九州肥後國、阿蘇の宮の神主友成とは我事也」(高砂)のもじり。

◆大のら 大変なまけもの。「エエ勤兵衛の大のらめ、何をしてけつかるぞ」(浄瑠璃・双蝶蝶曲輪日記・四)

◆我いまだ……致さず候程に。此たび思ひたち……出かけ候「我未都を見ず候程に、此度思ひ立都に上り候」(高砂)のもじり。

◆大夫 遊女の最高位を示す階級名。京都島原で使い始めたといわれる。かむろ、新造らの専属部下がつく。

◆遠がけ 遠方まで歩きまわること。「遠がけて鷹がなりなど、出働くこと毎度」(庭鐘・繁野話・九)

◆領分 江戸幕府において、一万石以上の大名の領地の称。目見え以上の領地を知行、目見え以下の領地を給地といったのに対する。「それがし領分の内三枝山

といふに磁石あり」(南嶺・教訓私儲育・四・二)

◆又太夫を入をく……立より一見致さばやと存候「又よき次なれば、播州高砂の浦をも一見せばやと存候」(高砂)のもじり。

◆桜屋敷 桜の木をたくさん植えてある屋敷をこう称したものの。

◆くより頭巾 頭の形にあわせてまるく作り、ふちをくくった頭巾。多く老人、隠居などが用いる。「上座に二つぶとんしかせて、くより頭巾めされしは」(南嶺・忠盛祇園桜・一・一)

◆黒羽二重 黒色に染めた羽二重。江戸時代、礼服や晴着として用いられた。「見れば当世仕立の男、黒羽二重の小袖に」(其磧・傾城禁短氣・四・三)

◆無紋 衣服、用具などに紋が入っていないこと。「うへには無紋の小袖、目にたずしてなを心にき物ぞかし」(西鶴・好色五人女・五・三)

◆びかくする つやがあつて、いやみなほど光っているさま。びかびか。「是はマアくけつかうな。びかくした鉄物(かなもの)のきる物めさつしやいた中へ」(南嶺・魁對金・四・一)

◆恋しり 恋愛の情趣を解すること。遊

女との恋のかけひきなどに通じた人。「百とせにいとせたらぬとよみて枕をかさはんしたを世の恋しりとはいふではないかへ」(秋成・諸道聴耳世間猿・三・三)

◆各別 異なっている。「懸意の与八郎使者でござる。余人とは各別。こゝをあけて様子を」(南嶺・忠盛祇園桜・四・一)

◆銀ぎせる 江戸時代は、ぜいたく品の代表で、道楽息子を象徴する持ち物として使われる。「髪は本多に銀ぎせる、青簪ほ肩うすげしやう、自ら大通の氣どりにて」(咄本・春笑一刻(安永七年刊))

◆長張 未詳。銀ぎせるの長いものか？

◆高のしれた たかがしれた。たいしたことのない。「公に出たりとも、高のしれたる給金也」(風来山人・根無草・後)

◆小姓組 主君の側近に仕える小姓の総称。「居たる小姓組。近習組。並みし女中諸とも」(南嶺・丹波与作無間鐘・一・三)

◆お手まはり いつも身近に仕えて主人の雑用にあたる者。

◆底いたり 表面に出ないところが念入りにできており、精巧なこと。「それもあまり当世過る。ヤハリ空色にすみる茶のうらの底至りがよい」(咄本・うぐひす笛(天明頃刊))

や高使屋敷へ御出むかひなるに、若殿へ御しらせなきもがてんゆかず。早々御拵なされて高使屋敷へ御出なさるべし。私はお先へ参り、あれにてまち申さん」

と、御いとま申し、門前につながせしめなる駒にうち乗て、むち風にまかせつゝ、高使屋敷へ行にけりや。

◆末はるの都路もおよばず。いざしら雲のはるか……着給へば「末遥々の都路を、末遥々の都路を、けふ思ひたつ浦の浪、船路のどけき春風も、幾日来ぬらん跡末も、いざしら雲の還々と、さしも思ひし播磨湯、高砂の浦に着にけり、高砂の浦に着にけり」(高砂)のもじり。

◆高砂の松の春風も爪くはへるばかり「高砂の、松の春風吹くれて」(高砂)のもじり。

◆爪くはへる 恥ずかしがるさま。「五寸ほど有指の爪を咬へて辱しがる風情」(二風・新色五卷書・四・一)

◆生身 元来は仏語。ここでは、生きてゐる、というほどの意。「謡曲石橋に、定基法師、天台山に登り生身の文珠を拝せんと石橋に詣る」(劇書・秀鶴草子)

◆松のくらしい 遊女の最上位である大夫の位。秦の始皇帝が雨宿りした松の木に大夫の位(五位)を受けた故事にちなむ。「上品(じやうばん)女郎の松の位」(其磧・傾城禁短氣・五・四)

◆かぶろ 江戸時代の遊郭における少女の職名。七八歳で遊郭に入り、十三、四歳まで太夫らの専従となった。

◆引船 江戸時代、上方の遊里で、太夫

は杉折の雲足・蝶がた・州崎形」(浄瑠璃・傾城酒呑童子・四)「時服台三位以上は雲足なり」(随筆・幕朝故事談)「くもあし 雲脚の台は禁中院中へ捧る物の台也」(和訓栞)

◆小事 叱ること。意見。「弟子のうたひかたに。小事いふたぐひとひとしく」(南嶺・大系図蝦夷漸・二・二)

◆太夫への外聞など身がはゞを見やうたか 太夫に対して羽振りよく見えるようにはからつてくれたか。「はゞ」は羽振りに同じ。「すこしすしに見えて、幅のなき男はおそれあふ事希也」(西鶴・好色一代男・六・一)

◆いはれぬ所へ潜上がはりて 特に言わなかつたところまで先走つて氣を配つてくれたので。「潜上」は、臣下・使用人などがさした行ないをすることをいう。

◆巾物 袱紗に包んだもの。袱紗包みにしたもの。「うすむらさきの服紗物より瞿麦(なでしこ)の紋所ありし爪出して」(西鶴・好色一代男・三・一)

◆春林院東風大禪定門 「春の林の、東風に動き」(高砂)による。この部分は長能の詩句によつた部分。

◆大殿友成様 友成の名は、「抑是は九州肥後國、阿蘇の宮の神主友成とは我事也」(高砂)とあるのを生かしたもの。

◆赤松の御家 鎌倉・室町時代、播磨一帯を治めていた武將。

◆尊氏公御開國のみぎり、格別の勲功によりて播州一円に下しをかれ 南北朝期、足利尊氏によつて赤松則村が播磨・範資が摂津の守護職に任ぜられたことをさす。さらに則祐の代に備前、明徳の乱後義則が美作の守護職を得、義則、満祐は侍所所司として幕府の中樞に参加、強力な守護大名となつた。

◆尊氏公 足利尊氏。室町幕府初代將軍。

建武五年(一一三八)八月將軍となるが、南北朝に分かれて国内は治まらず、直義、直冬らの争いが続いた。嘉元三(一一三〇五)延文三年(一一三五八)

◆御開國 はじめて國を造ること。建國。

◆村上源氏 村上天皇の子具平親王より出た賜姓源氏。師房以下、長く公家社会にとどまつて栄えた。堀川・久我・土御門・中院、さらに久我家からわかれた六条・岩倉・千種、中院家からわかれた北畠の諸家がこの系統に属する。

◆具平親王 正しくは「ともひらしんのう」。平安中期の文人・歌人として著名。後中書王と称される。和歌は『拾遺集』以下の勅撰集に、詩文は『本朝文粹』などに見える。

◆村上天皇 第六二代天皇。父は醍醐天皇。華やかな後宮を背景に宮廷文化が栄え、その治世は、後代「天曆の治」とたたえられた。

◆呂宋 フイリビンの古称。「呂宋・ルソン」(続無明抄・下)「呂宋・ルソン」(書言字考)

◆阿瑪漢 ポルトガル領マカオの古称。室町時代、ポルトガル人がここで貿易をはじめ、長崎と交通した。「阿瑪漢 マカハ」(書言字考)

◆千珠満珠 以下に引く『太平記』の他、『八幡愚童訓』などに詳しい。「やがてこれを御使にて、龍宮城に宝とする千珠(かんじゆ)・満珠(まんじゆ)を借り召さる。……戦ひ半ばにして雄雄いまだ決せざる時、皇后まづ千珠を海中に投げ給ひしかば、潮(うしほ)にはかに退いて海中陸地(ろくち)に成りにけり。三韓の兵共、天我に利を与へたりと悦びて、皆舟より下り、徒立(かちだち)に成つてぞ戦ひける。この時にまた皇后満珠を取て投げ給ひしかば、潮(うしほ)十方より漲(みなぎ)り来つて、数万人の夷

(えびす)ども一人も残らず浪に溺れて亡びにけり」(太平記・三十九・神功皇后新羅を攻め給ふ事)。なお、「浪は霞の磯隠れ」(音こそ塩の満干なれ) (高砂)などある。

◆吉日良辰 日がらのよい日。特に仏教で、星宿の法により仏事を修すると、広大な福德善根を得るという日。「吉日良辰をえらび、奥入のことぶき三々九度も」(南嶺・教訓私儀・三・三)

◆難め 家督を相続すべき人。また、そのための証拠となるもの。「行房の病体明日も知ねば、とかく難目(づきめ)が大車なれば」(其磧・都鳥妻恋笛・二・三)

◆有馬入道円山 有馬は神戸市兵庫区の温泉町。六甲山の北面にあり、古くから知られた山紫水明の地。

◆看抱のうしろみ 監督者。後見人。「勘七善三郎などかみぼうのうへは、いかなる人の思女にてもよびかめる事有まじけれ共」(浮世草子・御前義経記・七・三)

◆国務 藩の政治向きのこと全般。「加賀守にぞなされける。国務ををこなふ間」(平家物語・一・東宮立)

◆取じめなく しまりがなく。「無理まじりに歌の三味線の只やかましくなつて、取じめなく」(西鶴・好色一代男・三・二)「されどもお橋が取じめもなき栄耀(ゑよう)氣ずいはい日増夜増にて二秋成・世間妻形氣・四・二)

◆不行跡者 素行がよくない者。「此坊主は母の弟にして、我為には正しき伯父なれども、不行跡者にて親兄弟諸一家因を切て、勘当せし法師なれば」(其磧・都鳥妻恋笛・一・三)

◆お心まかせの御なぐさみは、世上へもれぬ様にいたしかたも有べし (家督を継いで大名になつてしまえば) 好きなように遊んで世間に知られないようにする

方法はいくらもある。

◆心入れ 性格。考え。「其の娘御の心入れは知らねども」(近松・国性爺合戦・三)

◆天命につきさつしやれたか 天からも見放されたか。「いづれ天命にもつきらるべき行跡」(其磧・風流宇治頼政・二・三)

◆相役 自分と同じ役目の人。同役。「天下の大老たる御方と、相役に仰付らるるを」(近松・曾我五人兄弟・一)

◆加古川 兵庫県南部、加古川の形成する三角州上に発達した都市。古代には山陽道の賀古駅が置かれていた。現在の市街地は加古川左岸の渡船場として栄えた鎌倉時代以降に発達したもので、江戸時代には本陣が設けられ、宿場町、河港として重要であつた。

◆過來し世々のしら雪と、きゆる命はおしからずとも、老の鶴のねぐらに残すおさな子……草木心なしとは申せども、花実の時をたがへず。……ことの葉ぐさの露の玉、お心をみがくたねともなしていずれも「過來し代々は白雪の」「積もり積もり老の鶴の、時に残る有明の」「夫草木心なしとは申せ共、花実の時を違へず」「言の葉草の露の玉、心を磨く種となりて」(高砂)の文句取り。

◆わかけ 若氣。年若い人の血氣にはやる氣持。若者の無分別な氣持。「若氣のいたりにて。十ヶ年以前浪人いたし」(南嶺・魁對盔・三・二)

◆あてこと いやみ。皮肉。「恥かしやなどあてことの言の葉ぞ面目なくも思ひけるかな」(仮名草子・仁勢物語・下・四九)

◆そりを打て 刀の鞘に手をかけてすぐ抜けるように身構え。「是は近比迷惑といはせせぬにおあては一寸も頼らせぬがと刀に反を打ば」(西鶴・武道伝來記

・八・三

◆サア、御心まかせにあそばせ。コゝあそばせ 自分の諫めが気に入らないなら、どうぞすぐに首を討ってください、と居直り詰め寄る様。

◆あとへもさきへもゆかづ どうにもならないさま。

◆御自分 ここは二人称。ム、御自分

○卷一之一

○遠く鳴尾の沖漕だ大尽

【梗概】

京からの高使住吉左京大夫（足利家の高家）を出迎えたのは、当国のうしろ見有馬入道円山と家老の饒間三郎左衛門・明石梅軒・加古川左近であった。住吉左京大夫の娘と友仲はいいなづけであったが、友仲不行跡の報告が円山より届いたため、婚礼はあきらめ、友仲を京に連れてくるように命令する。さらに、この間円山父子を国主同前に扱うことと、家宝の皿を京都へ持参するようにとも言いつく。左近・三郎左は友仲の身を守るため高使と対面のため邸に來た友仲を難波に落ち延びさせた。

我見ても久しくなりぬ、住吉左京大夫といふは、足利家の高家にして、此度にはかの高使を承り、はるく播州にくだり給ひ、御馳走屋敷掃除はひかりかゝやくばかり。玉もかるなる岸陰の御殿にてさまぐの饗応。当国のうしろ見有馬入道円山、家老饒間三郎左衛門長能、明石梅軒、加古川右近をはじめ、「高使の旨いかゞ」と相詰ける。

は班女の実父なるとや」「（其嶺・都鳥妻恋笛・二・一）

◆末寺 本山の支配下にある寺のことだが、ここは、「末社」からの連想による。

◆高使 公使に同じだが、幕府の高家が使いとして来ることも含めて用いたものか。

◆御着 御到着。「大将の先達で御着の

よししらせ申やうに」「（南嶺・魁對盃・二・二）

◆拵 服装。「身の廻りの拵に大分金銀

入ゆへに」「（其嶺・都鳥妻恋笛・二・二）

◆私はお先へ参りあれにてまち申さんと……駒にうち乗て。むち風にまかせつゝ、高使屋敷へ行にけりやゝゝ」「住吉に先行て、あれにて待申さんと、夕浪の汀な

住吉左京大夫申出さるゝは、

「故友成殿国政正しく、近国迄手本とも呼れし跡なるに、只今の友仲、わかげとは

申ながら、不行跡のふるまひ、『何卒』と異見いたされても領掌これなく、日々に超過し、此間は京都より契情を請出し、さくら屋敷と名付、世間へもはゞからぬ身持。伯父

としても力におよばぬに付、伺ひ奉る」と、円山殿より数度のうかつひ。仁木細川のともがらも、何程かきのどくに思はれぬれども、是非なく高聞に達しける所。某儀

は故友成殿存生の内より内約いたし、友成殿死去の節は、手前娘は三才なれども、倅

がよめにとの所望。上へも申上てきはめ置たれば、友仲殿は手前が花むこ、娘和哥

のまへ事も、当年はや年よはながら十八公の松のみさほかへぬ心。当事には御相談申

て婚礼をも取結び申たき心にて罷在所に、此間君よりめされ、『播州赤松の惣領友仲

不行跡に付て、後見円山入道より度々の内、親。赤松の家は各別の勲功もあれば、御

つぶしなさるゝ事は成がたきによりて、友仲事いまだ婚礼はせずとも、縁者によりて

其方へ預る間、直に罷下り、籠乗物にしつらひ召つれ上るべし。其上円山入道は家

をも国をも大切にぞんじ内、窺いたす所に、家古き家老ども諫言をもちたさざるや。

それにて改めずば、ナゼ言上は致さざるや。急度仰付らるべけれども、此たびは

る、海士の小舟に打乗て、追風にまかせつゝ、沖の方に出にけりや、沖の方に出にけりや」「（高砂）のもじり。

◆さめ 毛の白い馬。「黄糸の鎧に筋兜、

黒き母衣かけ、さめなる馬に乗つたる武者は誰やらん」「（浄瑠璃・頼光跡目論・三）

御ゆるさるゝ間、向後万事は円山入道下知に随ひ、重て仰出さるゝ迄は、円山の父子を国主同意にかしづき申べし。扱又円山父子は近日御指図次第。当家の重宝玉の皿を京都へ持参致さるべし。其うへにていか様とも仰付らるべき」

よし、殿儀に申渡さるれば、円山はぞくぞく悦び、「もはや、してやつた物」と、心の内にあみをなせども、

「甥友仲儀、何とぞ御威光を以て行跡もあらたまる様にと存じ、内々うかゞひ奉りし所、存よらず私父子へ国主同前との儀いたみ入」

と作りきのどく。

「其上、倅藏人儀は此間病氣に付、私領摂州有馬へ入湯仕り罷あれば、此老人一分にて御受申上るも至極憚入奉る」

と、おとなしげにいへば、家老明石梅軒すゝみ出て、

「これ、申し、円山様。わか殿友仲様の身持、やかねば直らぬくさり物。御家が大事で御座ります。御先祖への孝行をおぼし召し御請仰上られよ」

と、内証はぐるの佞人が腰おすを、加古川右近・饒間三郎左衛門ことばを揃へ、

「若殿の御身持京都へ仰つかはさるゝ程の儀、何として私共へは御沙汰下されざりしや。尤御わかげにて御遊興ないとは申されねども、国の政にさへる程の儀はかつて是なし」

とせけば、高使住吉太夫、

「イヤ、是く家老中、もはやかへらぬ事でおじやる。友仲を是へまねかれよ」

と、用意の籠のり物かき入さすれば、三郎左衛門も右近もむねをせめ、「全く是は円

山が仕わざにて、藏人を世にたてんとしたくみなれば、高使住吉殿とても油断はならず。わが娘をよびむかへず、契情を受出せし意趣に、円山と内くは一味かもしれず」とはおもへども、さし当つて高使とて京都の仰をうけ給はりし人に対し、慮外も成難く、胸をさするばかりなり。

三郎左衛門、右近に向ひ、

「合点か」

といへば、右近うなづき、

「高はしれてあれども」

といふ一言に万物のこもる心あり。「おのれ、いか程にたくむとも、友仲様を世にいださずばをくまひ」と、兩人がむねと胸に示し合す。げにも忠臣は異国にも本朝にも万民是を賞讃するもことばなり。

かくともしらず、わか殿友仲は上下あらため、供廻り美々敷高使へ対面のため来か

りしが、三郎左衛門右近がしらせにて、三郎左衛門若党、高使屋敷の門にひかへ、

「とかく此所へ御入なされてはよろしからず。是より難波へ忍びて立のかせ給ふべし。

あらましかやうく」

と、立のかるゝ当分のあてどまで申上れば、友仲おどろかせ給ひ、

「三郎左・右近などがいさめを用ひず、我儘にはたらし身のはて。とかく兩人がさしづにまかせん」

との給ふ所へ、又々内より若党立出、

「右近申上ます。お立のきなされたと申事がしましたらば、出口くへ追手がか

り、むつかしき御ざりませふ程に、是を召れて人もつれず、物まぎれ候て御のきなされよ」

と、いかゞして才覚しけんや、拾紙子に古あみがさをわたせば、小袖羽おりぬぎすと、是を着かへ、

「かくなりはてゝも、太夫が事気づかはし。皆の者ども、たのむ」

と、出ゆくを、小姓たちの侍ども、

「せめて御供」

とすがるを、

「それでは三郎左・右近が心入れもかなはじ。エゝ両人が異見を只今用る様に、マア

◆我見ても久しくなりぬ 「われ見ても久しくなりぬ住吉の岸の姫松幾世経ぬらん」(謡曲・高砂)による。もとは伊勢物語一一七段・古今集九〇五番などに

◆住吉左京太夫 住吉は摂津国の古郡名。住吉大社がある。

◆高家 表面的には足利家に仕える名家の意で用いられているが、江戸幕府において、吉良・島山・織田・武田などの足利以来の名家が任じられた身分兼職名をさかせている。

◆御馳走屋敷 使者をもてなすための屋敷。そのために特に屋敷がもうけられていたわけではあるまい。

◆玉もかるなる岸陰の 「玉藻刈るなる岸陰の。松根によつて腰をすれば」(謡曲・高砂)による。

◆明石梅軒 「明石」は兵庫県南部の市。また淡路島を経て四国への連絡路として

古くからの要地であり、江戸時代は小笠原氏十萬石の城下町として栄えた。

◆領掌 了承すること。「又(リヤウジャウ)うけがうこと」(日葡辞書)「有がたとしと領掌申し、祇園の石檀筋を上へと急ぐも」(南嶺・忠盛祇園桜・一・二)

◆超過 度が過ぎること。「入道殿悪行超過し。閻浮第一の大仏を。焼きほろぼし給ふ咎によつて」(近松・平家女護島・四)

◆伺ひ奉る どうしたらよいかお教えください。

◆仁木・細川 いずれも足利家に仕える名家。

◆高聞に達し 將軍の耳にはいり。「かうぶん 高聞」(書言字考)

◆上 將軍。

◆きはめ置たれば きめておいたので。

◆年よは 若いこと。

◆十八公 松の異名。「松」という漢字

四五十日はやふ用ゆれば、かうはならぬ物を」

と涙を流せば、御小姓組の尾上弥文太さゝやく様に、

「云てもお大名の門出じや」

と小声になり、

「誠なり。松の葉の散うせずして色は猶、正木のかづらながき世をまつて御らんなされませい」

と、飄々然きことやらおいさめ申せば、

「氣遣すな。追付帰参の盃をさすかい難波でしんぼうし、両家老が智慧を以て悪魔を払ひ治るを、松風の声もろともにわかれつゝ、立のき給ふぞいたはしき。」

を分解したところからの文字遊び。「中にも此松は。万木に勝れて。十八公のよそほひ。」(謡曲・高砂)による。

◆内窺 うちうちの相談。

◆勲功 幕府に対する功績。

◆籠乗物 ルビは「のりもの」だけだが、「ろうのりもの」の意で、罪人を乗せて運ぶ籠輦のこと。唐丸籠。「新九郎義切腹仰せ付けられ、皆指をさし、籠乗物(らうのりもの)に押入らるる面影を笑ひぬ」(西鶴・武家義理物語・六・一)。

◆急度 きびしく。嚴重に。「女中方をも急度吟味仰付らるべし」(其磧・都鳥妻恋笛・二・二)。

◆国主 戦国時代から江戸時代にかけて、一國以上を領有していた大名をいう(実際には一國以上を領有していなくてもその格を与えられたものもあり、十八家・二十家・十四家などと変遷があった)。「国主の艶妾」(西鶴・好色一代女・一

・三)「くくしゅ 国主」(書言字考)

◆同意 同じとみなすこと。同然。「強弩(きやうど)の勢ひも、放したる末にては、魯結(ろかう)の薄きを通さぬと同意」(庭鐘・繁野話・四)

◆かしづき 主人として大事に仕え。

◆厳儀に おごそかに。

◆ぞく／＼ 嬉しさに心がうきたつさまを表す。「いで打出んと御悦び。兼任ぞくぞく小踊りし」(浄瑠璃・源平布引籠・五)「通路が嬉しさ。兄弟もあれほどちがひのある物かと。ぞく／＼すれば」(南嶺・魁対盃・三・二)

◆してやつた物 思い通りにうまく片付いたこと。首尾よくやりおこせる。「してやつたり」の形で感動詞的に用いることもある。「なんでも衣類や銀は、新はなし(元禄十四年刊)」

◆同前 前出の「同意」に同じ。同然。

「我君頼朝公の御為には。伯父も同前」
 ◆南嶺・魁對盃・一・三
 ◆作りきのどく 気の毒なふうを装うこと。
 ◆私領 幕府直轄の天領に対して、大小名の領地。
 ◆おとなしげに 穏やかに。落着いて。
 ◆くさり物 性根が腐っているもの。
 ◆ぐる 示し合せてたくらみをなす仲間。「目代になる此の乳母はぐる也」(近松・鐘の権三重帷子・上)
 ◆腰おす 他人に力を添えること。悪いことにいうことが多い。「悪性があつたらば此の姑が怪気の腰押」(近松・鐘の権三重帷子・上)
 ◆さへる 妨げる。邪魔する。
 ◆かつて (否定を伴つて) 全くない。
 ◆せけば 意気込んで反論したところ。「井の内にも死がいあると。車にてつりあげさせよみれば。出石文九郎たれが打て立のいたとめつたにせけども」(南嶺・丹波与作無間鐘・四・三)「せ・せる音。せはし、せがむ、せちがふ、せつなし、せむる、せく。関をせきと云もせきとむる心也。せふる川の瀬もせる処を云ふ。背の方は腹の様にゆたかならず。」(南嶺・伊呂波声母伝)

◆おじやる 補助動詞「ある」の丁寧語。ござる。「お出である」の変化した語という。中世末から近世期にかけて用いられた。「丹波の家の法でおじやるかといへば」(南嶺・忠盛祇園桜・五・一)
 ◆世にたてん 一人前の人間にする。こは、赤松家の後継とすること。「かれらを世に立てんと思ひて」(曾我物語・三)
 ◆意趣 「意趣がへし」のこと。仕返し。恨みに報いること。「昨日の意趣に一番参るか」(源内・神靈矢口渡・一)
 ◆慮外 無礼なこと。札を失するふるまい。「身にたいしての慮外かんにんせぬと。抜打に切てかゝるを」(南嶺・忠盛祇園桜・五・一)
 ◆一味 仲間。味方。「真先にすゝむは。城崎弾正。つゞいて城崎一味のともがら」(南嶺・丹波与作無間鐘・五・三)
 ◆胸をさする 怒りをおさえる。「随分むねをさすつて堪忍して」(其碩・風流風流宇治頼政・四・三)
 ◆高はしれてあれども 陰謀の底は割れているのだが(いまはどうにもできない)。
 ◆忠臣は異国にも本朝にも万民是を賞翫するもことほりなり 「千秋の縁を為し

て。古今の色を見ず。始皇の御爵に。あづかるほどの木なりとて異国にも。本朝にも万民これを賞翫す。」(謡曲・高砂)による。
 ◆美々敷 豪華に。立派に。「出立の日熨斗目(のしめ)大小立派に伴廻り美々敷」(秋成・諸道聴耳世間猿・一・一)
 ◆あてどめ あてた。心当り。「どうじや。貴さまも追出されたか。是からどつちへ行ぞい。いやも、どつちといふて、あてどはない」(咄本・新断庚申講(寛政九年刊)・一)
 ◆若党 江戸時代、武家で足輕よりも上位にあつた小身の従者。「是を手本にして流行出せば。四枚肩に若党美々敷」(南嶺・今昔出世扇・五・三)
 ◆拾紙子 裏地のついた紙衣。「誠の正体見給へと。小袖くると脱ぎければ肌を拾(あはせ)の破(やれ)紙子」(近松・夕霧阿波鳴門・上)
 ◆小姓あがり 小姓から立立てられた者。小姓あがり。「源三位頼政の小姓立猪俣太一(近松・雪女五枚羽子板・もんさく系図)」
 ◆云てもお大名の門出じや 忍んで落ち延びるとはいっても大名の出立であることに変わりはない。

◆松の葉の散うせずして色は蒼。正木のかづらながき世をまつて。「眺かけて。霜はおけども松が枝の。葉色は同じ深緑立ちよる蔭の朝夕に。かけども落葉の尽きせぬは。真なり松の葉の散り失せずして色はなほまさきのかづら長き世の。たとへなりける常盤木の中にも名は高砂の。末代のためしにも相生の松ぞめでたき」(高砂)による。こは、門出を祝して実際に「高砂」を謡っているところ。
 ◆掃参の盃 無事帰国できたときの祝いの盃。
 ◆さすかい難波で 「盃をさす」に「さす腕(かいな)」を掛け、「難波」と続けたもので、次項に引く高砂の「さす腕(かいな)」には……をさかせたもの。「さすかいなには悪魔をはらひ。おさむる手には。寿福をいさ」(南嶺・忠盛祇園桜・五・二)
 ◆悪魔を払ひ治るを松風の声もろ共にわかれつゝ。立のき給ふぞいたはしき「さて万歳の。小忌衣。さす腕には。悪魔を払ひ。をさむる手には。寿福を抱き。千秋桑は民を撫で。万歳桑には命を延ぶ。相生の松風囁々の声ぞたのしむ。く」(高砂)による。ここの「松風」には「待つ」が掛かっている。

○入間詞は老人客のあしらい

【梗概】

左京大夫は友仲が挨拶にあらわれないことに対して不満を述べるが、左近・三郎左は時間稼ぎをしている。そこへ、梅軒の息子明石貫左衛門武冬らが大夫の吉野とその一行に縄をかけてあらわれ、友仲は行方不明であることを伝える。円山は大夫らの詮議をはじめ、吉野の美しさのとりことなってしまう。吉野も円山が自分に恋した様子を見て取り、やさしい言葉をかけて取り入ったので、自分ひとり吉野を再度吟味するという口実で自分の隠居屋敷へ連れていくことになった。三郎左・右近も円山に忠誠を誓うと言う入間詞であざむき、円山の口から高使左京大夫にのちほど友仲と家宝の皿をいっしょに京へ持参するので、ひとまず先に京へ帰ってもらうようにと言わせることに成功し、ひとまずこの場はおさまった。

「かくれもない大名が高使としてか様に都より下りしに、何とて友仲には是へ出られぬぞ。はやく出らるゝ様にいたさるべし」

と、住吉左京太夫機けん損じければ、円山入道

「御尤千万」

と、三人の家老に申渡せば、中にも明石梅軒罷立て、若殿友仲殿を引立てまいるべしといへば、右近三郎左衛門ことばをそろへ、

「仮令高使住吉様御預りとあればこそなれ。相もおとらぬ大名と大名。追付御出も有べし。貴殿お迎ひに参らるゝには及ぶまじき儀」

と一刻も若殿をおとしまいらする為に隙をとらんとすれば、梅軒かぶりをふりて、

「住吉様の仰は京都の御下知ならずや。是非引立て御渡し申が、御家のため」

とあらそふ所に、梅軒が伴明石貫左衛門武冬、広間の方よりすゝみ来りて、

「ア、是くおやち様、あらそひ給ふな。最前『わか殿を取にがすな』と内証から若党をつかはされ「し」ゆへ、桜屋敷へ参りたれば、『こゝもとへ御出』との事。ぼつ付きたれどもはや跡を見せず、かけ落されたはよくく身にわるひ事の覚えありてと見えたり。若殿の行衛は此たびよびくだし召れた契情めが知つておらうと存。縄をかけさせ、其座にありあふやつばら、一くめしとりきたりし、御せんぎもがな」

といへば、円山梅軒

「出来たく。かけおちしたことは、自業自得。只今御聞なさるゝ通で御座れば、契情めを吟味致し、友仲ありかを聞出す迄は、高使住吉公には先あれなる一間へ御入下さるべし」

といへば、

「しからば、身はあれにて休めいたさん。上よりおあづけとの友仲、かけ落と有ては身もたゝず、各も難義たるべし。急度吟味せらるべし」

とて、高使は奥にぞ入給ふ。

円山入道ははや一國を丸のみの心に成て、

「契情是へ引出せ」

とあるに、あらけなくも縄目つよく、引舟・やり手・牽頭・料理人の八兵衛まで、一所に白砂へ引すゆれば、右近、三郎左衛門縁がわへ出て、

「コリヤく、よくく合点せい。そち達は此辺いまだ見物せざるによりて、自分の慰

に罷下り、桜のおほひ屋敷と見て、あんないなしはいつてゐたものであらふな。
しからばわか殿様とは近付でもあるまい。ちかづきでなければどちへ御ざつたやら、
コリヤしらぬ事はナ、よもやしるまい。板ひしぎになり、水ぜめにあふても、人はこゝひとつじや」

と、むねをおしへて問かくるを、太夫はさすが粹の道とてのみ込うなづくを、梅軒つゝと出て、

「ハテ扱、御両人は、せんぎはなされいで、後生ぎらひなおやちに念仏すゝむる様なあいさつ。それではまいるまい。ヤア侍衆。天稗賣の用意く」

と、かさからかゝつてきめつくれば、太夫は、

「ハテ、どなたかは存やせぬが、しらぬ事は問れてもすゝしひわいな。きぬぐのわかれに、客さんがたのむりいはんすも、又来る為の手くだのことはと、さきぐりをしつとめて来た身。てんぴんとやらいふげびた賣より、水賣とやらの水な問かた。おやかたのせつかんに井戸へつられし事はかぶろのむかし、さいく覚えのありし事」と、ぴんとした返答に、円山入道ゆらくとすゝみ出て、

「につくい女めがほだばね、木馬賣」

といかられしが、見れば見る程うつくしいおもさし。「若天人ではないか」と眉毛ぬらして見ても、心のぼんのうさかに成て、俄にほれくとなりしは、恋はくせものとぞ聞えし。

「何と梅軒賣左衛門、女をせめとふとて、縄かけしとはあまりの無骨」

といはるゝ目づかひからが色をもたせて、勾鼻に黒皺よせ、細眼に成て見とれしは、

下手の細工の仕上せぬ、象のかしらにさも似たり。本粹中粹田舎の粹、粹自慢粹、かし引まろめて仕て来た道しり。「さてはわが身に來た目つき」と、

「申し、一たんかゝりし此縄、いかにお情ぶかひおまへの御ことばでも、筋がたゝねば解れてのうへのちじよく。皆の衆そうじやないか」

といへば、やり手のまんがつき出したやうなどつてう声して、

「それで御さんすとも。くるわへかへりてもしはられ出じやといふてつとめはなるまい。わけがたゝずばとかれなさんな」

と、しばられてゐる縄を下紐あしらいにいへば、引舟のつなでは、

「人をつなぎ付たるくせ有て太勢よつて御さんすとの達の中で、ちとおとしはゆきたれども、アノ縄かけたは能ない事と、情のまじりし御隠居様を、厚襲にしてもみうらが着せまして見たいナア」

と太夫にさゝやくもきけがしの中音。円山はなひもせぬあたまを手をやり、鬢なでる心の内、にはかに頭巾取出し、ひたいにておりこみ、ゑもんつくろふぞうたてけれ。

太夫はいた眼つきして、

「いかにも、わか殿さんは御在番の節は折くのなじみなれども、見物がてらおしかけて下たを見かけて、はづさんす。かけおちとやらんは、初心なふり様、惣じて若とりのつばさのかるいきやくより、年の功のある殿たちこそ、しつほりとして達心がよけれ」

と、もたせふりにいふに、円山入道はそぞろ心になり、

「しかれば、今では友仲ことは思ひきる心か」

と、根をおせば、

「いかにも。いとしかつたれども仕様がわるさに、にくふてく」

さりとは、いとしかはいゝあまりの心を、詞にさかさまにいふてさとられじとする女郎のいるま詞ぞ奥ふかし。

明石梅軒父子は、

「申し、円山様。急にせめとはいでは住吉殿への申わけがおそなはりませふが」

とあせれば、円山は色にほだされ十方にくれて、

「いかにもく、なめ過た女めがいゝぶん。あまりにくき程に、縄付のまゝ、身が隠居屋敷へ引たてゝ賣べし。つきぐの縄付どもは、其方屋敷へ引たてらるべし。あの女がいふ所では、友仲をそしり口なれば、あいづでおとしたも見えず。扱くく、につくいめらうめ」

とにらむ様で、片眼は塩の目。「かはゆひぞや」といひたい詞も、人目あれば、是も入間様にやつて心をもだつかせば、梅軒父子も、日頃円山が色深ひに氣がつき、「扱は又例のほの字」とは思へども、親と子の中にて指合くり、

「おやじ様、コリヤ円山様の仰次第になされて」

といへば、

「身もそふ思ふ」

といふにいきみて、円山はほたくゝゑみ。

「ソレ、何かなしに契情を身が隠居屋敷へ引たてよ」

との詞の下、かしこまりしと縄取ども皆く引立行にけり。

右近・三郎左衛門はさしうつむひて聞てゐたりしが、本より若殿の行衛太夫がしるべき様もなく、そのうへ此契情円山にくどきおとさるれば、若殿のやまひぬけと云もの。又円山をいやがらばその内犬を入れて、円山が手だてどもを開出す梯子、これにまさる物はあるまじと、

「コリヤ、円山様の御せんぎ御尤千万。白状してもせいでも此様子を外へはなしては御国の外聞なれば、御隠居屋敷をそとへ御出しなされず、末はいか様とおぼし召まかせが、よかりさうに存まする」

ともつてまいれば、

「そなた衆両人の心をはかりかねて居申た。いかにも一代身が所より外へ出さぬ工夫あり」

と、図にのつたあいさつ。

「したが、住吉殿へ、友仲行衛の事はいかゞ申べき」

とあれば、右近は存の外ゑがほを作り、

「今日只今より御主人と申は円山様。とても尋出してからが上向のすまね若殿。ナント三郎左、こゝは思案所では有まひか。代々の知行にはなれふより、円山様次第に成て御加増でもいたゞくが上分別といふもの」

といへば、

「アゝ、いかにもそふじや。あやまつた。物事を堅いふはむかし細工で、当世にあはぬ。妻子けんぞくをかへりみぬは智慧なの沙汰。身共も円山様の仰らるゝ事は、たとへんにやくで竹の根をほれと仰られても、そむかぬ心にきはめた」

といふに、円山大に安堵して、

「梅軒父子の中では申にくけれども、何をかくさふぞ。悪縁でがなあらん。あの太夫とやらにほれてく心で心をせいしても中くとまらぬ。こゝはよき様に思案たのむ」とあれば、三郎左衛門追取、

「いやと申さば、ぶちころしておしまひなされませい。命にかへていやと申さぬがつとめのはかなさ」と、かうばりをかふにぞ、

「したらば、住吉殿へは何と申さふ」

「ハテかうがよからふ」

といづれも耳と耳、さゝやき合て鈴をならせば、住吉左京太夫立出給ひ、

「友仲ゆく衛はしれ申たか」

◆かくれもない 広く世間に知れわたっている。有名である。狂言の冒頭にある自己紹介中における常套文句である。「是は入間に隠れもない何某でござる」(「狂言記・入間川」等)。

◆御尤千万 千万は接尾語。もつとも至極。まことに当然。「是はお奴様のが御尤万なれ共」(「南嶺・大系図蝦夷断・三・三」)。

◆仮令高使住吉様御預りとあればこそなれ たとえ(友仲殿が)高使住吉様お預かりの身になったといつても。「仮令(ケリヤウ)先のお客 旦那ほどに存ぜねばこそ、仕負せて参れ」(「其嶺・傾城禁短気・二・三」)。

◆相もおとらぬ 対等な関係である。「あ

とあれば、

「京都へまかりのぼりしよし、契情が白状なれば、一先御帰京下さるべし。おつつけ円山宝の珠血持参いたし申べし」と聞て、

「しからば、身は早く上京すべし。友仲にをつつきめしとらへつれ帰らん。御苦勞千万、さらばく」とたちいでたまへば、御供の行列常とはちがひ、友仲にをつつかんと、のり物はあとよりと馬ひきよせてゆらりと、

「いづれもつづけ。友仲はかち路なるべし」と、一鞭くれて、やるまいぞく。

◆都鳥妻恋笛・五・三

◆ぼつ付きたれども 追つていったが。「山鳥の……いまだ片生(かたいき)にしてかけ廻りをあなたこなたにぼつ付」(「西鶴・武道伝来記・八・四」)。

◆かけ落 行方をくらますこと。逐電。出奔。「そなたも我も主君につかへて断なく出れば欠落(カケオチ)同然」(「御前義経記・三・二」)。「かけ落したる段定めて」(「南嶺・大系図蝦夷断・四・三」)。

◆ありあふ そくに居あわせた。「ひき子が共、むこの児玉党など、ありあいたる者は皆うたれにけり」(「愚管抄・六・順徳」)。

◆やつばら 「奴僕・奴原」(「ばら」は複数を表わす接尾語)やつら。連中。「我

が弓の力は、龍あらばふと射殺して、頭の玉は取りてむ、遅く来るやつばらを待たじ」(「竹取物語」)。

◆もがな 願望を表わす終助詞。「我は又、女のなき国もがな」(「西鶴・好色一代女・一・一」)。

◆出来たく (相手の成果をほめて感動詞的に用いる)うまくやつた。でかした。「死骸をふまへ突つ立ば雑式を始として、元信其外門弟等出来た出来た、あつぱれあつぱれ御分別後覺也といさみをなす」(「近松・傾城反魂香・中」)。

◆自業自得 自業自得によつてまねいた果報、結果。「刀でうぬが首。ころりと落すは自業自得果」(「浄瑠璃・ひらかな盛衰記・二」)。

◆身 自称の代名詞。中・近世において、目上の人が目下に対して用いた。「それを身が知ることか。旦那坊主にお問いなされ」(近松・心中天網島・上)

◆たゞず 面目がそこなわれる。「あなか者にし負けては此の与兵衛がたたぬ」(近松・女殺油地獄・上)

◆丸のみ ことごとくのみ込むこと。全部乗っ取ること。「吉田の家を丸のみにしたいとて、させうか」(近松・双生隅田川・三)

◆あらけなくも 荒々しく。「ふみ殺すぞと。あらけなくいへば。その勘当忝いと内へかけ入て」(南嶺・忠盛祇園桜・五・一)

◆引すゆれば すわらせると。うずくまると。本来は「ひきすう」でわ行に活用したが、室町時代頃からや行にも活用するようになった。「花のやうなる上臈たちを、三条の河原へひきすゆる」(恨の介・上)

◆合点せい 事情を理解せよ。「天狗といふものは、めいよ人の心におもふ事を其まに合点(がつてん)をする物ぞかし」(西鶴・諸国はなし・四・三)

◆ナ 間投助詞。文節末にあつて調子を整えたり、軽く詠嘆の意を添える。「四部の弟子はよな、比丘よりは比丘尼に劣り、比丘尼より優婆塞は劣り、優婆塞より優婆塞は劣れり」(徒然草・一〇六)

◆板ひしぎ 板で体をはさんで、押しつぶす拷問の一種。

◆水ぜめ 昔の拷問の一種。仰向けに寝かせて、顔面に絶えず水を注ぎかけ、または絶えず水を飲ませるなどして苦しめるもの。「水ぜめ、火責の拷問にあふても」(浄瑠璃・傾城島原蛙合戦・三)

◆むねをおしへて 「むね」は「旨」で、事の意味・趣旨。

◆粋の道 いきなやり方。事情を察した

方法。

◆後生ぎらひ 仏法や信心を嫌うこと。「伏見にかくれなき後生嫌ひ」(西鶴・日本永代蔵・三・三目録)

◆天秤賣 両腕を伸ばして背で天秤棒にしばりつけ、身体の自由を奪つて賣める方法。「何賣がよからうな。木馬(きうま)に乗せうか、水をくれうか、火焚(ひのし)賣か」(浄瑠璃・仏御前扇車・二)

◆かさからかゝつて 「かさから出る」「かさにかかる」に同じ。相手を威圧する態度に出る。高飛車に出る。

◆きめつけば しゃかりつけると。叱責すると。「いふことあらばサア問ふ」と、にがにがしくきめ付けられ」(近松・冥途の飛脚・上)

◆すゞしひわいな 何も困ることはない。

◆さきぐりをして 本来は邪推する意だが、ここは、逆で、いのように解釈すること。

◆げびた いやしい。下品な。「難波屋の家に疵付るか、げびた奴めと叱られてかぶりふり」(近松・寿の門松・上)「下卑(げび)」「(書言字考)」

◆さいく くりかえし。何度も。「湯風呂といふ物もさいくいればくたびれが参つてよはる道理」(南嶺・教訓私儘育・四・一)

◆びんとした しつかりとした様子で。「大かと思ふても見てくださったせと。びんとしたうけねば」(南嶺・忠盛祇園桜・二・二)

◆ゆらくと ゆつくりと。ゆつたりと。「風に乗るが如く、糸もて空より吊りたるやと、ゆらくとして台上」(庭鐘・莠句冊・五)

◆ほだばね 未詳

◆木馬賣 昔の拷問の一つ。背のところがた木の馬に罪人をまたがらせ、両足に石

をつり下げるもの。きうまぜめ。「大坂にて水ぜめ木馬ぜめ、さまざまのせめにあひ候へ共、おち不申候由」(月堂見聞集・一〇)

◆眉毛めらして見ても (欺かれないように) まゆに唾をつけて見ても。「ばかされることではないぞ。まずまゆげをぬらさふ」(狂言記・狐塚)「そろく狐の側へゆけば、狐は眉毛をぬらして居る」(咄本・管巻(安永六年刊))

◆ほれくど深く心を引かれ。「内入よきにお次もほれられ」(浄瑠璃・夏祭浪花鑑・六)

◆恋はくせもの 恋のためには心も乱れ、思ひかけないことをしかすというたとえ。「樽屋を見て、扇子拍子をとりにて『戀はくせもの皆人の』と曾我の道行をかたり出す」(西鶴・好色五人女・二・三)

◆無骨 無作法かつ不風流。「山家(やまが)に育たる無骨者」(浄瑠璃・ひらかな盛衰記・一)

◆目づかひからが 目くばりからして。目つきを見るだけでも。「すべて女郎と申すは偽をいふて御客をのぼせなづまぬ客にもいてある目づかひに。啞をうるのが商売と。はやり歌にさへ強ひますに」(南嶺・教訓私儘育・二・一)

◆色眼をたせて 色気でせまる様子で。「細眼 ほそくひらいた目。『急げや』と片頬に皺面片頬に細目」(浄瑠璃・本朝二十四孝・四)

◆下手の細工の仕上げせぬ。象のかしらへたな細工師の作った仕上げもきちんとしていない象の頭のようなもの。みにくいさま。

◆本粋 ほんとうの粋の道にかなった人。「両色里の太鞍本透(ホンスイ)になされ」(西鶴・日本永代蔵・二・三)

◆中粋 自分では粋人と思っているが、

実は素人の域を出ない者。「此人(ハル小六)の所作……立派にないなどいふ説は、素人の内にも生粋(なまき)の者に取にたらず」(評判記・古今役者大全・四)

◆粋自慢 粋であることを自慢していること。またその人。「亭主の粋自慢、そなたの井手の蛙に負けぬ物あり。色里に心をはこぶ者のたしなみを見せ申さんと」(好色万金丹・四・四)

◆粋こかし 粋人とおだてあげて自分の都合のよいように事を運んでしまうこと。「あの先生、あら粋じやと粋こかしのことはり」(秋成・諸道聴耳世間猿・二・三)

◆引まろめて いっしょくたにして。「ひとつ／＼いふまでもなし。世界の色をひんまろめた艶顔」(南嶺・教訓私儘育・五・一)

◆道しり 男女の道をよくわきまえている人。ここは大夫吉野のこと。

◆わが身に來た目つき 自分に惚れたがための目つき。

◆筋がたゝねば解れてのうへへちじよく 道理にかなわなければ、いくら縄を解いてもらつても私の恥になる。

◆つき出したやうな 威勢のいい。

◆どつてう声 怒張声。怒つたりどなつたりする声。「きりきり行けと伝八が。どつちやう声にびつくりし」(浄瑠璃・夏祭浪花鑑・四)

◆しばられ出 縄につながれていた身。

◆わけがたゝずば 理屈が立たなければ。「かふした訳故統けて振つて、真の枕を交さなんだとある。分(わけ)の立つ術を仰聞かされて」(其磧・傾城禁短氣・五・三)

◆とかれなさんな 縄を解いてもらうな。

◆下紐あしらいにいへば 下紐は下着の

紐。(縄を解くことを) 下着の紐を解く
のと同じように言う。

◆つなぎ付たるくせ 人を縛ることに慣
れている

◆おとしはゆきたれど 年はとっている

◆厚髪 髪形の一。頭の中央から額へか
けて髪をせまくそり落し、左右にふさふ
さと結び分け、髪を高く結った髪。昔、
神主などが結った髪形で、上品、温雅
なものとされた。「今は残らず喰込て何
をすべきたよりもなく、むかしの厚髪も
うすく、仁体おかしげなれば」(西鶴・
日本永代蔵・二・二)

◆もみうら 紅色で無地に染めた絹布。
和服の袖裏や胴裏などに使う。

◆黒羽二重の大ふり袖に、梧銀杏のなら
べ紋、紅(もみ)うらを山道のすそ取。
わけらしき小袖の仕立」(西鶴・好色五
人女・四・一)

◆きけがしの 聞けと言わんばかりの。
「父には願ひ夫には聞け、きけがしも恋
のかせ」(浄瑠璃・伽羅先代萩・八)

◆中音 高くも低くもない、中くらいの
声。「燈火の影を少し背きて、源氏・伊
勢物語を中音(ちうおん)に読みあてて
外へは心をうつさず」(其磧・風流曲三
味線・一・一)

◆なひもせぬあたま ちよんまげを結つ
てもいらない頭。円山は入道姿。

◆ぬもんつくろふ ここはすがたかたち
を整えようとする様。「見向きもせず、
衣紋繕ひ立帰る」(浄瑠璃・仮名手本忠
臣蔵・一)

◆いた眼つきして かしこまった様子に
なり。「むかし伽羅の油にいたため付た
る頭も、白き烏丸通に」(浮世親仁形氣
・二・二)

◆在番 江戸時代、幕府の役人が、京都
の二条城などの警備のために赴任するこ

とを念頭においた言い方。「丹波の国の
大名悠樹左衛門大夫。在番ゆへ召出され」

◆南嶺・丹波と作無間鐘・一・一

◆下た 逃げていった

◆はづさんす なじみ客からははずしま
した。

◆初心なふり様 色の道に慣れていない
初心者をする遊女のふり方。

◆若とりのつばさのかるいきやくより、
年の功のある殿たちこそ、しつほりとし
て達心がよけれ 若くてすぐどこかへ行
つてしまふような客よりも、年をとった
客の方が落ち着いていて、相手をしてい
ても気持ちがいい。

◆もたせふり 相手の気を引くような思
わせふりな言動。「文をやりても、返事
なし。さだめしこれはみづからにもたせ
ぶりにて有らん」(近松・世継曾我・二)

◆そぞろ心 そろそろして浮ついた状
態。「まめやかに、昔あやしきそぞろ
心のつきて、」(うつほ物語・国譲・中)

◆根をおせば 念を入れて尋ねると。物
ごとのきはまりを知待ることをば、底を
尽して知るといふはよろしう待るを、か
たつ田舎人は、根ををしるなど云り」(か
た言・五)「いやならん返事ならば、達
たまふかと、根を押し(をし)てとへば」
(西鶴・好色二代男・三・二)

◆仕様がわるさに やり方が悪いので。

◆おそなはりませふ おそくなりましよ
う。「あしたにみゆふべのをそなはる
ほどだに紅のなみだを落すに」(うつほ
物語・俊隆)「去年は木の芽峠の大雪に
ささえられ、当年迄おそなはつては御ざ
れども」(狂言・餅酒)

◆十方にくれて 「途方にくれて」と同
じ。「式部十方にくれて、暫く思案しす
まして」(西鶴・武家義理物語・一・五)

◆斑女は十方にくれて 「其磧・都鳥妻
恋笛・三・三)「何とせふぞと十方にく

れて」(南嶺・今昔出世扇・三・二) な
どこの表記例は多い。

◆なめ過た あまりに馬鹿にした。「い
や、なめすぎたやつらかな」(浄瑠璃・
根元曾我・二)

◆縄付 縄でしばったまま。「此のおめ
でたい道中に縄附などは見ぬものと」(近
松・丹波と作・中)

◆其方 対称。対等もしくは下位の相手
に対し武士・僧侶などが用いる。町人が
用いるときは莊重な表現となる。

◆そしり口 わるくち。「心かだまし
く、口をふるまふとて」(秋成・世間妻形氣
・一・一)

◆めらうめ 女をのしつていう語。「ど
つかとすはりとがり声、めらう下にけつ
からふ」(近松・心中天網島・中)

◆塩の目 目許を細めたあいきようのあ
る月つき。「目を細めておかしい目付き
が気に入らぬ、四十、五十に余つて、し
ほのめの時分かいの」(浄瑠璃・当流小
栗判官・四)

◆入間様 入間言葉に同じ。「むかし山
崎の宗鑑法しと云しえせもの、かしまし
や此さとすぎよ郭公(ほととぎす)みや
このうつけさこそ待らんと説侍しは、い
とことさめてにくきやうなれど、是はい
るまやうとて、狂歌狂句の本体とこそ承
はれ」(かた言・五)「入間様、又入間詞
といふも同じ逆詞なり。是に二種あり」

「一は意を逆にいふとは、花散れ、月
くもれなどの類なり。詞を逆にすると、
花の雲といふべきを、雲の花といひ、月
の鏡を鏡の月といふ類なり。余は准じて
知るべし」(柳亭筆記・三)

◆もだつかせば じれったがつている
と。「床などの事思ひもよらぬに、太夫
方からもだつて来て屏風立てさせ」(其

磧・傾城禁短氣・四・一)

◆色深ひ 色けが多い。また、色欲が強
い。「その比(ころ)都に隠れもなく、
色深(ふか)き男どもあり」(仮名草子
・恨の介・上)

◆ほの字 ほれること。「そもじにたん
とほのじやと、嬉しいか」(浄瑠璃・
平家女護島・三)

◆指合くり 気を遣つて。元來は、俳諧
の席で、差合の有無を調べたり、そのこ
とについて相談することをいう。

◆仰せ次第になされて おっしゃる通り
になさつて。「御心やすく思召御ともさ
せ参らせん。それがし次第になされよと
ちこのすがたにつくりなし」(浄瑠璃・
凱陣八島・二)

◆ほたゝゝゑみ 機嫌のよい笑い。「其
五十両渡すと悦んで戴き、ほたほたいふ
て戻られたは」(浄瑠璃・仮名手本忠臣
蔵・六)

◆何かなしに つべこべ言わずに。「何
角(なにが)なしに、乗うつりて、皆こ
ころやすきつき合」(西鶴・好色一代男
・五・七)

◆隠居屋敷 隠居所。「大分の田地、海
山迄ほでんごうにしろしなひ皆人の物
になし、漸(やうやう)と残つたあん居
やしき」(近松・天神記・三)

◆縄取ども 大夫らの縄を持つてゐる家
来たち。「はつと答へる縄(ナハ)取に、
引立てられて」(浄瑠璃・鎌倉三代配・六)

◆やまひぬけ やつかいなる事からうけだ
すこと。「源五兵衛様があの様に言つて
下さんしたので、三五兵衛様の方は病脱
(やまいぬけ)がしたワイなア」(歌舞
伎・五大力恋蔵・一幕返し)

◆大 探偵。スパイ。「こなたのことで
此の在所(ざいしよ)は、大坂からいぬ
が入」(近松・冥途の飛脚・下)

◆梯子 手がかり。大夫から円山にお家

乗っ取りの計画を話させ、それをスパイが聞き取って悪事の証拠にしようという計画。

◆外聞なれば ここでは、外聞が悪い、あるいは外聞にかかわるの意。

◆一代 生きている間ずっと。「一代の外聞ほうばい衆へも歪事、いとまこひも訳よふしてゆるりと出して下さんぜ」(近松・冥途飛脚・中)

◆図にのつた 調子に乗った。「強そろへを言立つれば山伏も図に乗って、強ふ見せんと拳(こぶし)をにぎりひちを張」(浄瑠璃・ひらかな盛衰記・四)

◆したが けれども。「殺したやつもまだ知れず気のどく千万。したが追付(おつつけ)知れましょと」(近松・女殺油地獄・下)

◆存の外 意外にも。「利徳存(ぞん)

の外に取こみ、俄長者となりしも」(西鶴・懷硯・四・一)

◆上向のすまぬ お上に対しての言い訳が立たない。「上(かみ)向きだに済み候事ならば、市郎右衛門方へ宿替の事相談に及び」(耳袋・一)

◆上分別 最も的確な判断。最もよい考え。「ただ沙汰なしに取り置くが上分別(じやうふんべつ)成べし」(其磧・傾城禁短氣・四・四)

◆むかし細工 古風。

◆こんにやくで竹の根をほれ 「蒟蒻で石垣を築く」「蒟蒻で岩かく」等と同じく不可能なことをいうことわざ。

◆悪縁 離れにくい間柄。大夫に対する愛情をいう。「いかにじゅんのたがへばとて、あくゑんはむすばれず」(浄瑠璃・凱陣八島・一)

◆がな (疑問の係助詞「か」に詠嘆の終助詞「な」の付いてできたもの) 漠然と例示する意。「いやそれは私寝言がな申たか。ただしお前が病(や)みほふけて空耳でかなござりましょ」(近松・重井筒・中)

◆追取 相手の言葉をすぐにひきとって。「皆の者もお近付になつてお札申てくれ」とあれば、彌七おっ取て申上るは」(其磧・傾城禁短氣・五・一二)

◆ぶちころして なぐり殺して。「そいつ共にぶちころせ」(近松・用明天皇職人鑑・三)

◆かうばりをかふにぞ。あと押しをするのに対して。「かうばり」はつつかい棒のこと。「あんまり母があいだてない、かうばりが強ふて、いよいよ心が直らぬと、さぞ憎まるるは必定」(近松・女殺

油地獄・下)

◆をつつかん あとから追いつくだろう。「をつつく」は「おいつく(追付)」の変化した語。「いまだ遠くはおん出で候ふまし、それがし追っ付き留め申さう」(謡曲・鉢木)

◆かち路 徒歩。「後には三枚屑をやめて歩行路(かちぢ)に家質(かぢち)置いて其銀会所よりすぐに道頓堀に沈みける」(浮世草子・杢久二世・上・銀にならざる笹の浮世)

◆やるまいぞく 狂言末尾の常套文句。「やいくたらしめ、どこへやることでないぞ、やるまいぞくく」(狂言記・入間川・末尾) など。

目録

藤戸 狂言 清水

第一 取て引よせ二刀さしづめの偽

そのまゝ井戸に沈め切た思案の底
あのほとりぞと夕浪の深ひおはまり

第二 実や人の親の心は三十計の井堀

白化に似せをわたすは希代の例なれば
此血をかくす程の札に切とは奇異の思ひ

第三 七つ過れば出る怪物より上の工夫

鬼の面よりおそろしい大夫が手管に
のせられた刀の迷惑は貫左衛門が命

◆藤戸 卷二の下敷になつてゐるのは、能の「藤戸」と狂言の「清水」であるが、「藤戸」の詞章の利用は特に二の二においてにはない。二の三は例によつて狂言から趣向をとつたものであり、二の一は浄瑠璃『播州血屋鋪』（寛保七年七月十五日、為永太郎兵衛・浅田一鳥作、豊竹座上演、なお、注釈中における本文の引用は『日本音曲全集第十巻義太夫全集（下巻）』（昭和二年刊）所収の翻刻（青山館）の段のみ収録によつた）によるところが大きい。「藤戸」は四番目物能。作者不明。前ジテは漁夫の母。後ジテは漁夫の怨霊。ワキである佐々木盛綱が藤戸先陣の功によつて賜つた備前の児島で、年たけた女（前ジテ）から息子を失つた恨みを聞き、隠しきれなくなつた盛綱は、浅瀬を教えてくれた漁夫を殺して海に沈めたいさつを物語り、弔いをする。

やがて、漁夫の怨霊（後ジテ）がやせ衰えた姿で現れ、殺されたときの苦痛を述べて盛綱に襲いかかろうとするが、結局は弔いの功德で成仏するという内容である。なお、藤戸は地名で岡山県児島藩の西で水島灘に通じていた狭い水道にあつた渡し場。現在は陸地となり、倉敷市内の一地域となつてゐる。

◆清水 鬼山伏狂言。『狂言記』では「鬼清水」、「天正狂言本」・天理本では「野中の清水」。主が太郎冠者に水を汲んで来いと命ずるが、冠者は清水に鬼が出たと称し、主の秘蔵の手桶を捨てて帰る。主は桶を借しんで清水へ行く。困つた冠者は風流の面（武悪）を着けて主をおどし、冠者の待遇改善を要求する。本當の鬼が出たと思つて恐しがつて帰つた主が鬼に出会つた時の様子を冠者に聞くと冠者は大声でその場を再現する。主は鬼と

冠者の声が同じことに気付きまた清水へ行く。冠者はまた面を着けて主をおどすが、面をとられ追い込まれる、という内容。

◆取て引よせ二刀さしづめの偽、そのまゝ井戸に沈め切た思案の底 「不便には存じしかども、とつて引き寄せ二刀刺し、そのまゝ海に沈めて帰りが」（謡曲・藤戸）による。「藤戸」では浦の男が刺されるが、本作でそれに相当するものが腰元のふじという女である。なお、『播州血屋鋪』にも「取つて引寄せ蘇活の術、うんと気のつく鉄山が」とある。

◆二刀さす 刀で二度刺すこと。卷二の一本文には「取て引よせひざの下に引しき、あまりにくさのまゝ左のかいなをぶちおとしくるしませて、又右のかいなをきり」とある。謡曲「藤戸」の、刺された浦の男の亡霊の回想の場面で「あれな

る。浮洲の岩の上に我を連れて行く水の。氷の如くなる刃を抜いて。胸のあたりを刺し通し。刺し通さるれば肝魂も、消えくとなる所を」とある箇所では、両手をひろげ、太刀で左脇を二度刺す演出が行なわれている。

◆あのほとりぞと夕浪の深ひ 「あのほとりぞと夕浪の、夜の事にてありしほどに」（謡曲・藤戸）による。

◆おはまり 井戸にはまる意と策略にひつかかるの意がかかつてゐる。「おかかる殿は六条参をさせましよと我物にして行は久七がはまり也」（西鶴・五人女・二・三二）

◆人の親の心は三十 「げにや人の親の、心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ知られたれ」（謡曲・藤戸）による。典拠は「人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道にまどひぬ

るかな(藤原兼輔)」「(後撰集・維一・一〇三)。
◆三十 陰曆で、月の三十日は闇夜であるところから三、三〇、あるいは三〇〇をいう馬方、駕籠かきなどの符丁。ここは三十才の年齢を掛けたもの。「今いふ通りだから、三百(ヤミ)で能かア遺ま

すべい」(滑稽本・狂言田舎衆・上)。
◆白化 しらばくれること。しらん振りをすること。「若旦那へおめ見へいたされと、白化に出らるれば、源之丞はかほをあらめ」(其蹟・風流宇治頼政・三・一)。
◆希代の例なれば 「昔より今に至るま

○卷二之一

○取て引よせ二刀さしづめの偽

【梗概】

播磨国小嶋の餅間三郎左衛門の屋敷では、三郎左が病氣になり、あんなものかにも腰をもませている。彼の病氣は腰元を斬つたためであり、屋敷には夜な夜な幽霊が出るとうわさされている。そこへ、明石梅軒と加古川右近が家宝の皿を受け取るためにやつてくる。三郎左は、先代の命令で家宝と同じ皿を十枚作つてあつたこと、しかし、そのうちの一枚を藤元という腰元が割つたため斬り殺したこと、その割れた一枚の皿が本物であることなどを語る。とりあえず、偽物の皿を京都に持参して継目の参内をすませばよいといううち、に九つの鐘が鳴り、それにあわせて井戸から女の幽霊があらわれ、三郎左もそのたたりか苦しみ始める。その様子を見て梅軒は恐ろしくなり、九枚の皿を持って円山のもとへ向かつた。

春の湊の行末や。藤戸をわたりし恩賞に賜りし児嶋といふは備前の国。引くらべて見れば、すり鉢と紙子程ちがふ播磨の内に小嶋の郷といふ所は、餅間三郎左衛門長能が知行にて、屋敷もありけるが、此頃は病氣常ならず、養生の願ひかなひ、在所へ引て人にはあはず医薬祈禱日夜おこたらねども、病氣いさゝかも快気見えず。そのう

で、馬にて海を渡すこと、希代の例なればとて」(謡曲・藤戸)による。
◆七つ いまの午後四時頃。狂言「清水」に「七つ下がつて清水へ参れば、元興寺(がこじ)とやらが出ると申しまするによつて」とあるのによる。元興寺は鬼の異名。

◆怪物 「抑(そもそも)おん身は何処の人にて、這(この)怪物(はげもの)等に捉(と)られしぞ」(馬琴・美少年・三・一)。
◆貫左衛門 明石貫左衛門。家老明石梅軒の息子。一の三に既出。

へあやしき取沙汰はびこり、「三郎左衛門は故なき事にて腰元の女を手討にせしゆへ、その幽霊あらはれて、怪きことどもあり」と、たれいふともなく国中にひろがり、きのどくにこそきこえける。

表の方より案内して、「有馬円山様の御名代として、明石梅軒殿、加古川右近殿御出」とあれば、三郎左衛門此中より出入さする按摩取の老女かるといふに足ひねらせていたりしが、はち巻しながら枕刀取り直し脇息にかゝり、按摩のかゝを次へたゝせ、兩人を請じ入れければ、梅軒詞を出し、

「円山様仰せ出さるゝは、『三郎左衛門此間病氣とて塾居心もとなくおぼしめすに、世上にては様々の異説やみがたき故、今日も京都への御用かたぐ取りこみたれども、夜に入り、見まひ申す様に』との御意。それに付き『御先代より御預の玉の皿、三郎左衛門万一の事もありてはと御念入れ、我々兩人に請取まいる様に』との御儀」といふに、右近も同く

「此間さまへあやしき沙汰あるによりて、京都へ異説のひろがらぬ内に皿をさし上げらるゝ様にとの事」とあれば、三郎左衛門

「是はく夜中と申し御念入たる御意ども有がたく存じ奉る。拙者病氣かやうに致し罷れば、なにのかはりたる事もなく候へども、夜半に及ぶといなや、身ぶるひ立、それより性根をうしなひ申す事もこれあり。何ともがてんのまいらぬ病、症と無念に存る」

よしを申せば、兩人は「とかく玉の皿御渡しなされよ」と云に、「いかにも相渡し申すべし」

といふ内に、はや中の口の時計四つ半をしらせければ、

「ふるひつくも程有るまじ。さらば玉のさらをわたし申さん」

と病中ながら我居間のうしろのふすま引きあくれば、七重の壇をかまへ七五三繩うやくしく、方巻尺ばかりの箱その員拾をならべたり。

「病氣すね心に任せず。御兩人是をおろし給はれ」

といふ故、拾箱ながらおろしてふたとれば九箱に九枚の玉皿、今一箱をひらけば珊瑚珠みちんにくだけ、皿の形はかけもなくて、たゞ鉄槌などにて打ちくきたる様に見えける時、右近ふしんさふに

「御預の玉皿は一枚なるに、コハいかなる事ぞ」

ととへば、

「さればく是にこそ子細のある事。大殿様の御在世のみぎり仰せわたさるゝは、『天下無双の宝物なれば、いかなる者が忍び入りてぬすむまじき物でもなし。おなじ皿を九枚似せさせ置所を九所にわち置くべし。をのくしめを引き、まことの皿も一所におなじ格にしてをかば、しのび入るべきものも心どぎつき、残らず取らんとす

る内には見出されぬ事はあるべからず』と、深き御工夫。もつとも『この事、その方より外へは妻子とてもどれがまことのたからか、しれぬ様にしてをくべし』との儀にて、家内拾ヶ所にうやまひ置きたる事なり。此にせの皿は鯨の牡丹骨を雪点草にて煮れば、糸といひ色といひ珊瑚にまがはずといへども、真の珊瑚珠よりは軽ひばかりなれども、下地手に取て真の玉さらを見ぬ眼で見わけられぬ細工。この九枚は贋物にて、まことの一枚は此くだけし一箱」

と聞て兩人びつくりし、「其まことの宝物がくだけては」といふを、三郎左衛門

「さればその事で御座るは。病中氣づかひに存じ、残らず是なるたなへ上をかと召つかふ侍どもにもかくさんため、身共はすねこし立ぬ煩ひゆへ、こしもとの女どもにはこぼせしに、情なや是非もなや、九枚のにせ物は別条なく、真の宝を入れたるはこそ、藤といへる女、小庭の土蔵よりあれなる飛石をこしぎまに、小石につまづきどうどたをれし拍子に箱の紐きれて、内なる玉皿石にあたり、ソレその如くみちんにくだけ、おどろひたと申さふか、肝がつぶれると申さふか、あまりの腹立にくだんの腰元をひざもとへ招き、九枚の皿を出し、かさねさせて『サア御主人より預りし拾枚の皿、をのがぶちわつたるで九枚になり此皿をかぞへて見よ』ときめかゝれば、『龜相な事故しました』となみだをながししりこみするを『イヤサ数をよんで見よ』といふ時、ぜひなく一つ二つ三つとよみ九つとよみおはる時、『今一枚のかはりに』と取りて引きよせひざの下に引しき、あまりにくさのまゝ左のかいなをぶちおとしくるしませて、又右のかいなをきり、其後いまだ息のあるを、あのむかふなる井戸は自然の底なし、おちたる物のあがりたるためしなき名水ゆへ仲間どもに申し付けて、

さかさまにしてつきはめさせしに『エゝきこえませぬ。龜相とは申しながら、ころさつしやれようも有るべきに、なぶりころしとはあまりむごひ。此一念ほかへはまいらじ』と、それはくおそろしひ黄なる声ともろとも、あれなるすゝきのすこしこなたの井戸のふかみに死骸をふかくかくせしなり」

とかれたれば、兩人は、「扱は人の申すも少もたがはざりけり。去ながらその分では兩人まかりこし、此くだけたるは血のくだけやらおじめを多くあつめてくださし物やら証拠なし」とがてんせねば、三郎左衛門

「さればく身共も切腹とは存たれども、此血くだけたる故、三郎左衛門が腹切たるとあつては、円山様麻人様のつぎめのしるしも立ちがたければ、何とぞ此にせ物の内にて御つぎめをすませ、其後は御さしづ次第に切腹も仕らんと、円山様を大切にぞんじて見合せまかりある」

とあれば、右近も

「いか様、今更まことの血がくだけたと有ては、円山様の御望のさまたげとなるべし」

と、似せ物を白にかづかするとりもち口。梅軒もつぎめの妨といふに気が付き、「いかにも」といひたけれども、

「万々一真の宝物の血がかくしてなどあつてはいかに」

と手をこまぬひて思索する内、又打ちかくる時計のしらせは九つと指おり、三郎左衛門は夜半になりしが

「アッラくるしや」ともだへくるしみ、さまぐに身をものがけば頻に家鳴し、庭の井

の内ばつともゆる火はまぼろし。女の声にて

「一二二三つ四つ五つ六つ七つ八つ九つハアかなしやナウ」

と泣く声あはれにすさまじく、其こゑを聞きて三郎左衛門はうつゝのごとく、刀をつ取り

「をのれになやまさるゝが口おしや、むねんや」

とりきめどもあせれども、まなこすはりかたちすくみて

「アッラくるしやく」

と七顧八倒終にたへいり、汗をながして目を見詰るをくひしければ、兩人さまぐ介抱しそらおそろしく、

「さては三郎左が申すにちがひなく、血をわりし女がたましゐ、井戸にのこりてわざはひをなすよな」

と梅軒こはく庭において猶見届んと井筒によれば、右近も引そひ立よる時、あんせうくさきけふりと共にくはつともえる。火の底より尾上菊五郎が様な女声にて

「エゝ聞へませぬぞへ。なぜひと思ひにはころさつしやれぬぞ。くるしやノウ。一つ

二つ九つハア」

といふ声の首筋もとへこたへて、さしもの梅軒「南無あみだ仏く」とあともどりすれば、右近は

「是く梅軒殿、とくと中をのぞひて吟味すまいか」

といへば、

「ばけ物にうでだてはふぐを丸焼にして喰も同前御無用く」

と得心して

「ぶちわつたは不届なれども、この一念が円山様へまでかゝつてはきのどくじやほどに彼者の跡をも弔ひ、又はその一類もあらば世に立てやらせ給へ。九枚のにせ物のうちよひのを目利して円山様とも御相談申し、真の皿のわれたる噂外へはもれぬ様

に致すべし。貴殿切腹ありてはお為にならず」と、あの方から相對づくにて似せ物を受取帰しなにも、よくくさいせん井の内の声が氣味わるかりしにや、梅軒立もどり「これ三郎左殿、ころされたは取かへしのならぬ事。せめてはとむらはせ給へや。あととむらはせ給へや」

◆春の湊の行末や。藤戸をわたりし恩賞に賜りし児嶋。「春の湊の行末や、春の湊の行末や、藤戸の渡りなるらん。これは佐々木の三郎盛綱にて候。さても今度藤戸の先陣を仕りたる恩賞に、児嶋を賜つて候。」(謡曲・藤戸・冒頭)による。

◆児嶋 岡山県岡山市。古くは海濱を隔てた離島であつたが、藤戸水道が陸地となつたので、現在は倉敷市と隣接する児島半島となつている。

◆すり鉢 すり鉢は備前の名産。「すり鉢は備前の土を最上とす」(俳諧・本朝文選拾遺・すり鉢摺小木の弁)「備前焼物之事(略)すり鉢等何品も多し。○按ずるに、備前国に於て製する播盆は、其質堅実にして容易に破損せず。其刻せる線条も、亦磨滅せずして久しきに耐ゆと云々」(万宝全書・八)。

◆紙子 紙子の産地としては仙台が有名だが、「其の外紙子の名物、肥後八代紙子、播磨紙子、紀州花井紙子、美濃十文字、大坂松下一閑紙子」(日本山海名物図会・四)などあるように播磨でも名産であつた。

◆播磨の内に小嶋の郷 播磨の「こじま」は管見に入らない。例えば吉田東伍『大日本地名辞書』によれば、「小島郷」は武蔵・美濃に、「児島郷」は備前に見えるのみ。あえて架空の地名を用いたものであろう。

◆快氣 病氣が回復すること。「たとへいかやうなる大病にても。此住寺の祈禱にて快氣せぬといふ事なし」(浮世草子・新色五巻書・五・二)

◆取沙汰 世間のうわさ。世上の評判。Torisuta トリサタ 世間に流布する話。Torisuta suru (取沙汰する) 世間に流布していることなどについて語る。あるいは、話題にする。「(日葡辞書)「さりとてはしらぬ事ながら、人はそれとはいはじ。おくれたるやうに取沙汰(トリサタ)も口惜」(西鶴・五人女・四・五)

◆按摩取 ここは按摩の術を行なう人。あんま。「都にしたられたる末社、按摩取」(西鶴・胸算用・三・一)「あんまとりいびきをきくと手ぬきをし」(雑俳・柳多留・二)

◆老女かるも 「海士の刈る藻」(謡曲・藤戸)をもじつて「按摩のかるも」としたもので、ここではじめて登場する人物。謡曲藤戸の前シテ「浦の男の母」に相当する。

◆はち巻 この姿は、病氣であることを示す。「としはたちばかりのかねつたる男わつらひ、はちまきして打ふし」(咄本・私可多咄)

◆枕刀 護身のために枕元に置いておく刀。枕太刀。「小藤次二言なくむくとおきあがり。帯取て引しめ。枕刀ぼつ込おみのが小がいな取てねぢあげ」(南嶺・

龍都儀系図・二・一)

◆詞を出し 話すこと。「Cotobanagi, Ijisan. (言葉を出し、または、出だす) 話す」(日葡辞書)

◆蟄居 家の中にじこもつて外へ出ないこと。また、田舎にじりぞいてのこと。「我はしばらく禁裏をさけ、いづれへなりと蟄居せん」(浄瑠璃・妹背山婦女庭訓・一)

◆異説 ここは怪しげなうわさ。変なうわさ。「何事も珍しき事を求め、異説を好むは、浅才の人の必ずある事なりとぞ」(徒然草・二一六)

◆万一の事 ここは病死すること。「只憐べきは孫女。もし万一の事あらば、吾儕が血脈忽絶へて」(咄本・塩梅余史(馬翠撰、寛政十一年序))

◆御念 お心づかい。ご配慮。また、ねころななこと。からかいの気持で用いることもある。「おつれはないかひととり身か、この処が聞いた迄、ヲヲいかにもよい御念、つれは女一人」(浄瑠璃・松風村雨東帯鑑・三)

◆御意 お考え。おぼしめし。「御意意なる御意の」(南嶺・教訓私儔育・四・二)

◆性根 正氣。「お松自害いたし。おも手ゆへ性根つき申さぬを。外療内療のかげで。漸と心つき只今物申すと聞て。」(南嶺・忠盛祇園桜・四・二)

◆及ぶといなや ……と同時に。……とすぐに。ただちに。「大晦日の朝めし過るといなや羽織脇ざしきして」(西鶴・胸算用・二・二)

◆身ふるひ 寒氣や恐怖、また、激しい感動や怒りなどのために、からだがふるえうごくこと。戦慄。「身ふるひして、世のからき事を語る」(西鶴・一代男・六・三)

◆病症 病氣の症状。病状。「是は何とも合点のまいらぬ病症」(咄本・輕口出宝台(享保四年刊))

◆中の口 中口。中央にある入口。なかのくち。「中口の明ずの門、辟けてのけと扉をたたき」(近松・傾城反魂香・上)

◆時計 明治以前の時計は、不定時法に合わせるため基本的な機構は西洋のものを模倣しながら独自に工夫を加えたもので、独創的な機構をもつものも多くあり、工芸的に見てもきわめて優美なものが多かった。

◆四つ半 午後十一時ごろ。

◆ふるひつく ふるえがおこる。身体がふるふる震える。「首引きぬいても今取る」と、いはれしを聞かれましたから、亭主は震(ふるひ)つかれました、今に枕あがりませぬ」(西鶴・永代蔵・五・二)

子有り。誕生も程有るまじ」(近松・国性爺合戦・一)

◆七五三縄 注連縄などとも書く。一定の界域中へ入らせない様に張りめぐらす縄。その形式について『貞丈雑記』一六には「しめ縄の事 わらにて左縄になふ也。なひながら所々に七五三のわらを下る也。三筋下て間を置て五筋さげ、又間を置て七筋下げ、又間を置て三五七三とさげる也。縄の両端を切そろふ事なし。其のまゝ置也。是取つくるはず直なる姿也。七五三のわらの間々にはゆふしでを下る也」とある。「このたきの上に七五三縄(しめなわ)を張(はり)」(歌舞伎・鳴神)

◆方老尺 一尺四方。「左右には方九尺なる、茅葺の仏堂の、二座並びて建りける」(馬琴・八大伝・九〇回)

◆員 数に同じ。「死をいたすもの員(かず)をしらす」(南嶺・龍都侯系図・三・三)

◆病氣すね心に任せず のちに出る「すねこし立ぬ」と同義であろう。病氣のため足腰が思うままに動かない。

◆珊瑚珠 珊瑚を加工、細工して装飾用に作った玉。ここは(皿が)珊瑚珠のように細かくくだけて、の意。「珠数にかずし」(西鶴・一代男・二・六)

◆鉄槌 「かなづち 鉄椎・鉄槌」(書言字考)雷でも鉄槌(かなづち)でも「馬琴・高尾千字文」

◆天下無双 この世で唯一。比べるものがないこと。「我等下人に天下無双のうつけものあり」(咄本・寒川入道筆記)

◆しめを引 注連縄をひきわたすこと。「御祭の御清めするなりとて、しめ引きめくして」(宇治拾遺・一〇・六)「堅く門戸を開けて、七重に七五三(しめ)を引四門に十二人の番衆を居(すゑ)て、

毎夜宿直(とのゐ)暮目をぞ射させける」(太平記・三二・直冬上洛事)

◆格 同じような仕方。流儀。手段。「今のまんざいの格で、栗うりの柴うりの丹波から東へ出る老は多し」(近松・大経師昔暦・下)

◆どぎつき 不安で心が動揺する。胸がどきどきする、むなさわぎする「まちあたる心とはかくべつにちがひ、むねもどきつき」(浮世草子・薄紅葉・一)

◆鯨の牡丹骨 未詳。

◆雪点草にて煮れば 未詳。

◆下地 本来の。もともと。ここは本物の意。「庭さきには。下地よりある沼池をしつらひ」(南嶺・忠盛祇園桜・四・一)

◆すねこし 臍(すね)と腰。足腰。主として、立居・歩行の意のままにならぬさまをいう文脈に用いられる。「長五郎がこはふて出ぬか、脚腰(すねこし)が立ぬか出をらぬか」(昔米万石通・上)「臍腰(すねこし)が立たぬ」(警喻尽)

◆是非もなや どうしようもないことに。「思へば腹も立つ、憎い女め、エ、是非(ぜひ)もなやと」(近松・出世景清・二)

◆藤といへる女 初登場。かるもの娘。

◆小庭 小さい庭。狭い庭。「一間隔てて近習の人々鷹匠犬引勢子(せこ)足輕、玄關の小庭に居余り」(近松・宵庚申・上)

◆飛石 庭園の通路に、少しづつ間隔をおいて配置された敷石。平たい自然石や切石を用い、また古い石臼を用いることもある。露地(ろち)の通路に配置された渡り石は、露地の中で最も重要な景物とされる。「何かは白州の飛石を、下より噴々(むくむく)刎返せば」(播州皿屋鋪)

◆どうど 大きな重い物が落ちたり倒れたりして強く当たる音、また、物を強く当てる音や、そのさまを表わす語。「我を忘れてどうど坐し」(播州皿屋鋪)「板二三枚引のけてどうど落るは、石部の八蔵わねと胸板つき通し」(南嶺・丹波与作無間鐘・三・三)

◆ぶちわつたるで たたき割ったので。「ぶちわる」は「うちわる」の転。「荷の中にある大ざらを一ツとりだし、さんく」にぶちわりければ「咄本・輕へそ順礼(延享三年刊)、「で」は格助詞に由来する接続助詞で、原因、理由を表わす。…ので。近世に現われる。「お暇が出たで去にまする」(浄瑠璃・心中二腹帯・三)

◆きめかゝれば しっかりつけたところ。強く責めたところ。「此うへにいちむちいはず。その方ともに土だんへ直すがときめかゝれば」(南嶺・私儲育・四・二)

◆龜相な事 あやまち。失敗。しくじり。「下男おかしがりて、手まへの龜相でござる。かんにんして」(南嶺・私儲育・四・三)

◆一つ二つ三つとよみ九つとよみおはる時 このあたり「鉄山是にて数取すると、床几にどつかと腰打ち掛、サア読め。アイ、一ツ。二ツ。三ツ。三ツ。三ツ。四ツ。五ツ。五ツ。六ツ。六ツ。七ツ。七ツ。八ツ。八ツ。九ツ。九ツ。何(ど)うじやもうないか。テモめんえうな。幾度読んでも同じ事。皿が足らねば汝がそつ首討放すに、サ誰が点の打ち手がある」(播州皿屋鋪)を生かしている。

◆取て引き寄せ、弓手の肋骨ぐつと突き込みにと刺り、うんと仰氣(のつけ)に七転八倒」(播州皿屋鋪)

◆引しき 「引(ひく)しき」は「ひきし(引敷)」の変化した語。「仇も敵も一つ悲願南無阿彌陀仏と言はせも敢へず取

て引つ敷」(近松・女殺油地獄・下)

◆ぶちおとし 「うちおとし」の転。「せんぎするに及ぬやつと、首ぶちおとし、死がいは川へつきはめたり」(南嶺・忠盛祇園桜・三・三)

◆自然の底なし 「じ」「ねん」は、それぞれ「自」「然」の呉音。もともと。人為の加わっていない。「われも欲せざるより自然(じねん)に其事たへたるなり」(庭鐘・繁野話・五)なお死骸を井戸に捨てるのは、「末期の水は勝手に食へど、傍の井戸へ死骸を打込み」(播州皿屋鋪)とあるのを生かしている。

◆名水 名高い清水。茶の湯などに適する良質のいずみ。[Meiji] メイスイ(名水)。[Meiji] (名ある水)非常に良い水」(日葡辞書)「是ぞ日本に七所の名水(めいすい)と、干してむすびあげ」(西鶴・俗つれづれ二・一)。狂言「清水」では、主人が冠者に近日茶の湯をするので、「野中の清水」の水を汲んでこいと命じている。

◆つきはめさせ 突き落とさせ。突いて投げ入れ。「綾小路にて、夜中に殺され、死がいは井戸につきはめたり」(南嶺・魁對盃・四・三)

◆なぶりころし もてあそびながら殺すこと。「わしゆへ死んだ人々の恨の念もはる為なぶりころしにして下さんせ」(浄瑠璃・津国女夫池・二)

◆きこえませぬ 理不尽である。「やあら聞(きこ)えぬ旦那殿」(近松・曾根崎心中)

◆一念 ひたすらに思いこんだ気持。執心。執念。「御なげきも深かるべし、されども一念かけし、彌兵次をうたでは置まじ」(西鶴・諸国はなし・三・七)

◆黄なる声 高く鋭いこゝろ。「おもいもよらず、尻ツへたを、わんとかまれ、かの男黄色な声」(咄本・再成餅(安永

二年刊)

◆すゝきのすこしこなたの井戸のふかみに死骸をふかくかくせしなり この前後「藤戸」の「あれに見えたる浮き洲の岩の、すこしこなたの水の深みに、死骸を深く隠ししなり」をふまえる。

◆おじめ 穴に口ひもを通し、袋、巾着、印籠などの口を締めるもの。多く球形で玉、石、つ、の、象牙、金属、さんごなどで作る。緒止め。「取出したは青玉の対の緒」(ラジメ)「談義本・古朽木・三」◆つぎめのしるし 継ぎ目の参内の際に、家督相続権者であることを保証する家重代の宝物など。

◆見合せ 実施を中止して、しばらく様子を見ること。時機を待って実行をしばらく取り止めること。「一銭もなければ腰かけを見あはせ」(西鶴・永代蔵・二・三)「緒言は折々見合にすべき物なり」(浮世草子・元禄大平記・五・四)

◆いか様 いかにも。そのとおり。相手の意見を肯定して感動的に応答することば「定て汝が行くであらう」「いか様、誰彼といふて外に人も御ざらぬに依て、定て私が参るでは御ざらうが」(虎寛本狂言・素袍落)

◆白にかづかすとりもち口 「白」はとほけていつわること。知らん顔をして口裏をあわせること。

◆手をこまぬひて 漢語「拱手」(キョウシュ)から。「拱手」はもと両手を胸の前で重ね合わせて行う礼。転じて、手を動かさず、何もしていないでいる。事の処理や対応ができず、考え込んだり、困惑した

り、断念したりするときなどのさまをいう。「実盛始終手を拱(こまぬき)、人々の愁歎に涙とうかむ」(浄瑠璃・源平布引瀧・三)

◆打かくる時計のしらせは九つ 「九つ」は夜半の正刻(子の刻)。深夜〇時。

◆家鳴し 家屋が鳴り動くこと。また、その音。「家鳴り震動空揺曇り、俄に降来る雨の脚。何所へ逃げんも真の闇」(播州血屋舖)

◆庭の井の内ばつともゆる火はまぼろし。女の声にて「時に怪しや、梢に風荒れ勢動して、釣瓶の上に燃上る氤氲(あいうん)たる心火の光り、井筒の中よりお菊が声……掻き消す如く井筒の上に、くはつと燃え立つ猛火の煙」(播州血屋舖)

◆りきめども からだに力を入れても。心は目でつかふ、手は胴にてつかふ、扇子は、手、足ひとつなり、腰すはらねば、よはく見ゆる、心をいれると云を、息こみとおもふゆへ、りきむ」(わらんべ草・二)

◆まなこすはり 目が据わり。じつと一点を見つめて目の玉が動かなくなる。酒に酔ったり怒ったりしたさま。「眼据(す)はり思さし荒く、美しき姿はななく、凄まじき舐相」(其磧・傾城紫短氣・一・四)

◆かたちすくみて 顔がこわばって。「五体すくみたるやうに取しめられ、まつひに御免あやまり入しといふに」(南嶺・花柳流島・四・三)

◆七顛八倒 苦しがつて転げ回るさま。

「ア、かはるやと。ぐつと突く。うんと手足の七顛八倒(しつてんぱつたう)」「浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・五」「弓手の肋骨ぐつと突き込み」と判り、うんと仰氣(のつけ)に七顛八倒」(播州血屋舖)

◆たへいり 氣絶して。氣を失って。「われは、さは、のどかはきて、絶(たえ)いりたりけるにこそありけれ」(宇治拾遺・七・五)

◆井筒 木や石などでつくった井戸の地上の囲い。円形、方形がある。井戸側。化粧側。井桁(いげた)。「筒井つらぬづにかけしまるがたけ過ぎにけらしな妹見ざるまに」(伊勢物語・二三)「内井戸、石の井筒(あづ)に取りかへ、人の物からるゝ程は取りこみ」(西鶴・永代蔵・六・四)

◆あんせう 漢字は「煙硝・焰硝・塩硝」などをあてる。硝酸カリウム。その鉱石を硝石といい、針状をなすものを芒硝という。炭・硫黄と混じて、火薬を作る。「硝嘆(あんしやうくさ)い鉄炮(てつぽう)の罪障(ざいしやう)生滅申是は俗名論(かぎ)やのおつめ」(浄瑠璃・鎌倉三代記・八)

◆尾上菊五郎 初代。江戸時代中期立役の名優。幼名竹太郎。享保二年(一七一七)京都で生まれた。父は都万太夫座の出方音羽屋半平。若女方尾上左門の弟子となり、同十五年十一月、京都柳山座で初舞台をふむ。はじめ若衆方、のち若女方にかわり、「鳴神」の雲の絶間姫などに好評を得た。宝暦二年(一七五二)さら

に立役に転じ、以後、江戸・上方の舞台を歴勤、「忠臣蔵」の大星由良之助のような実事を得意として、天明元年(一七八一)には極上上吉と評価されるに至った。同三年十二月二十九日、大坂で没。六十七歳。生玉寺町浄蓮寺に葬られる。

◆ばけ物にうでだてはふぐを丸焼にして喰も同前 「うでだて」は腕力自慢。腕力をたのんで争うこと。化け物に腕力で対抗しようとするのは、フグを丸焼きにして食うのと同様、きわめて危険である、ということ。「Vedateno sutu」(腕立てをする)腕力の非常に強いことを誇つたり、人前に示したりする。「(日葡辞書)

◆御無用 無駄である。やめたほうがよい。狂言「清水」に何度もある語。「いかに狂言なればとて。色事をさきたて。見物衆をそのかす様な芸は御無用とがめ」(南嶺・教訓私儲育・一・二)

◆得心 納得。「あの高綱殿にてなきて得心。いよく心をかせりける」(南嶺・魁對盃・五・一)

◆跡をも引ひ 謡曲・藤戸の「なかなかにその有様を現はして、跡をも引ひまたは世に、生き残りたる母が身をも、訪ひ慰めて賜ひ給はば、すこしの恨みも晴るべきに」をふまえたもの。

◆一類 一族。「一家一類皆く袖をぬらし」(其磧・都鳥妻恋笛・三・二)

◆相対づく 互いに合意のうで。相談づく。納得づく。「親の敵を討つまでと、相対づくの離別ならずや」(近松・煙山姥・二)

○実や人の親の心は三十ばかりの井堀

【梗概】

あんまのかるもは実は腰元ふじの母親なのであった。三郎左の話を立ち聞き、娘が殺されたと知るや娘を返せとせまったので、真実を告げることもできない三郎左はやむなく長櫃に押込んでおいた。そのあと、井戸へ行くと、井戸の中から女形の姿をした井戸堀り人夫の藤次があらわれる。うまくやると三郎左はほめ、約束の金子三百両を渡すと見せかけて藤次を斬り殺してしまう。その口から秘密が洩れないようにするためである。藤次は浪人伏見関路右衛門の子であり、妹がいることを語って死んでいく。そのあと、かるもは縁の下に隠されていた娘のふじと対面するが、彼等も秘密を守るため当分のまま縁の下にさせることになり、女中たちに知れないように食事を運ばせた。翌日、円山らが井戸を検分に来たが、藤次の死骸をふじのものと思い込み、にせの血をもって参内することに決まった。しかし、どうやら本当の血は三郎左が隠しており、若殿出世のために使うつもりらしい。

悪事千里をゆけども、子をば忘れぬあんまのかるもは、最前よりさし足してふすまのかげに立聞してあたりけるが、「氷のごとくなる刀をぬひて、わが娘の胸のあたりを、さし通しさとをされし時は、さぞ肝魂もきえくとなる所を、其まゝ井戸におし入れし」との物がたり。「娘が靈魂井戸の水底の悪龍の水神ともなりて、恨をなさんと思ふ事は、いかにもそのはづ。世間での噂いっはりならず。『むすめ藤にあはせて下され』と人をおこせば、『つかへがおこつて寝てゐる』とてあはさず。がてんゆかずとこの様にあんま取に成て忍び入り、様子をうかがふ所に、娘はかげも見

せず。いよくがてんゆかざりしに、最前からの物語、死んだ娘より、あとにのこりし此母がむねははりさける様な」と、おぼえずわつとなき出しけるを、三郎左衛門きゝとがめ、「何ものなればそれに忍びある」と声掛られ、もはやかくす所でないひと、「今は何にか命の露をかけてまし。ありがひもあらばこそ、とてももの思ひ出なる物を、なき子とおなじ道になしてたばせ給へ」

と、人めも知らず三郎左衛門が前へふしまろび、「わが子かへさせ給へや」と、うつなきありさま。見るめあはれに思へども、三郎左衛門十面つくりて、

「ころせし女は扱は汝が子にて有りけるよな。よし／＼何事も前世の事とおもひ、此金を命代と思ひ、恨をはれ候へ」

とて、百両ばかりつゝみし金子なげ出せば、

「わかきを先立てつれなくのこる老鶴の金を受て何にせん。かり初に奉公させ、やぶ入りをもちどをに思ひしに、又いつの世にあふべき」

と、金子をなげすてたはひなきを、「アゝをと高し」。何と心得たりけん、懷中より縄取出し、取てふせていたまぬ程にくゝり、そばなる長櫃へおしこみ、鎖をおろし手をたゝけば、こしもとども返事して茶もつていづるを、

「もはやぬる程に、用があらば手をたゝかん。いつもの通り四間も五間もへだてゝ、恥の間よりこちらへは人をいるゝな」

といふも此中藤をころせしに、こりはてたる腰元どもなれば、「アイ／＼」もふるひまじりにて皆／＼かつてへ引にける。腰のたゝぬといひし三郎左衛門四方を見合せ立上り、刀をつ取手燭へ火をうつし、駒下駄はいて井筒へ立ちよれば、井筒の内より

も三十四五なる男、籠に硫黄多んせう、火道具いれしをわきにかゝへ、すそは水にぬれながらによつとあがりて、

「ナントよふ御ざりませふがな」

といへば

「大出来く。別して尾上菊五郎でうらめしいといふた段は、おれさへぞつとした。

その方は井戸堀に似あはぬ役者物真似の名人、先日この井戸の底側をいれかへるとて、その方どもに三人の井戸堀が水をさらへるとて、あるひは淨瑠璃踊くどきあだくち

ぐの中に、その方が役者物まね別して女形が得手ときひて、身は障子ごしに聞き

とれ、それより思ひ付きてころしもせぬ腰元をころした分にして、その方をひそかに招

き、星の内はアレなる長櫃へかくし、身共がくひ物を与へ、夜に入れば、井筒へいれ

てゑんせうの火をもやさせ、女形の物まねで『一二二九つ、ハアかなしや』と毎夜

くいはせし故、家内から自然と取沙汰つよく、此事加古川右近へは拙者より内通し置

たれば、円山殿をすゝめ、梅軒を同道して宝の皿うけ取りに來たりしなり。『宝の皿

わたせよ』と、円山殿より申こさるゝはづと右近よりしらせし故に、此ばかりことを

こしらへをき、むかしより悪人をだまして似せ物をわたすためしはあれども、相對つ

くにて似せものをつかます事希代のためし。是ひとへにその方がはたらきゆへ、真

の宝をわたさざる様になりたり」

と悦べば、井戸堀藤次かしこまり、

「此御恩賞には御約束の金子を下されませい」。

「いかにも心得た」と懷中より三百両包の金子取出し、「是うけとれ」「恭し」とよ

る手をとらへ、ふびんながら取てひきよせ、刀ぬくやいなやぐつとゑぐれば、

「コリヤ三郎左衛門様、御ほうびがおしさにころさつしやるゝか」

とくるしめば、

「金子は十万両でもおしまねども、をのれ下臈なれば此はかりことを人にかたらんと
思ひての儀。ねんごろにあとをとふらひ得さすべし。一国のお為に死ぬる命じやあ
りがたひと思へ」

といへば、

「わたくし腹の内からの井戸堀でも御座らぬ。父は伏見關路右衛門といふて子細ある
浪人者、拙者は十五妹は十三のとし、父關路右衛門相果、妹は譜代の家來が介抱に
て都へのぼりしが、其後たよりをきかず。私は世におちて井戸ほりの世渡。父が
ゆづりは兄弟の者に残せし金目貫、水仙に雪輪はおやちが定紋。をのれ立身して妹
にもめぐりあはんと、道ならぬ事の様には思ひしかども、似せ幽霊の物まねをせしに、
それとあかして仰せられたらば、いはぬといふは武士の子じやもの」

となげくを、隙どりてはいかゞとどめをさし、刀をぬぐひ上へあがり、さいぜん
の長びつよりあんなまの老女を引出し、表着をぬがせてまたしぼり、「是見よ。おたば
ねたてるとあの通り」

と、くだんの小袖を井戸堀にきせて足を取てさかしまに、井筒の中へどんぶりのこゑ
も八つの鐘ふけて、空おそろしき手わざなれ。くだんの老女が口を手拭にしめあげ、

「あはするものあり」と我寝所のふとんたゝみをかきあぐれば、下より出るこしもと
の藤にも俄にさるぐつわ。母はそれととびたつばかり、三郎左衛門をふしおがみ、

物言ひたふてふもおし鳥の初ておどろくばかりなれ。

「ヲ、道理く此様子申しきかすもがてんなれども、うれしさに声たてゝは大事のさまたげ。此一埒すむ迄は母とても帰しがたし。太義ながらこの下にしのぶべし。食物は身が心得にて飢渴させじ」

と、兩人がさるぐつわ取て下へしのばせ、畳を敷て庭の血を砂にまぎらし、又思案して

「にはかにばけ物がやめに成てもすまぬ道理」

と、しきりにたゞく手を聞きつけ、腰元ども「アイ」と、「侍どもをよべ」との詞に若党中小姓、「御用で御座りまするか」と来るに

「ア、ラ苦しや。藤がおんねん井戸をはなれ、身に取りつひたか無念やな」と、あるひはいかり或はなげき、

「ヨウむたいにころしやったノウ。一つ二つ三つ四つ五つ六つ七つ八つ九つハアかなしやノウ」

と、もだへくるしみ「茶漬くはふ」といへば、俄にこしらへて持てくると物くふ内へ、「こしもと老人の外は次へしりぞけ」と、食つき共にのこさせ「茶がぬるひ、わ

かさせい」と、腰元も追やり、其間に畳おしあげ、食次を下へ通はせ「早うあけて」と取あげて畳をしく所へ、「お茶があつふなりました」ともつて来れば、「食取てこひ」となげだす食次、こしもとは見てびつくりすれば

「ア、ラくるしや、ゑんぶ恋しや、せうねつの苦しみ故いかふ腹がへつた。ア、ラひだるしや苦しや」

とためいきつけば、腰元もうなづき、「おひとり身とはちがふ。そのはづく」

と懐胎な者同前のあいさつして、後には箸さへ二膳づゝすへて、又此取りざたに世上のはなしのたねぞ増ける。

夜あくれば念の爲とて、有馬田山入道明石梅軒同貫左衛門を連れて井戸あらために来たり。「亭主は物怪におかざるゝ由、対面に及ばず」と井戸ある所へつゝと通りのぞひて見て、「ふびんや、うたがふ段ではない。女小袖さか様にはめたと見えて両足が見ゆる。頓てかくれはなき跡を見分したればおちついた。三郎左衛門に別心なし」と打ちつれ皆くかへられける。

三郎左衛門は方寸の謀にてあぶなき所をのがれて、願ひのまゝにやすくと彼皿をかくしくて、かのさらをかくしくて、若殿立身の種となしぬ、若殿立身の種とぞなしにける

◆悪事千里をゆけども、子をば忘れぬ
「悪事千里を行けども、子をば忘れぬ親なるに」(謡曲・藤戸)による。「悪事千里」は『北夢瑣言』の「好事不出門、悪事行千里」による。悪いことはたちまち世間に知れるということ。

◆氷のごとくなる刀をぬひて、わが娘の胸のあたりを、さし通しさとをされし時は、さぞ肝魂もきえぬと成る所を、其まゝ井戸におし入れし。「氷のごとくなる、刀を抜いて胸のあたりを、刺し通し刺し通さるれば、肝魂も、消え消えとなるところを、そのまま海に押し入れられて」(謡曲・藤戸)による。

◆井戸の底の悪龍の水神ともなりて、恨をなさんと思ふ事は「藤戸」の底の、悪龍の水神となつて、恨みをなさんと思ひしに「謡曲・藤戸」による。

◆つかへ「支・問・障・店」などの漢字をあてる。胸にさしこみの発作が起る病氣。しやく。「病 ツカへ」(活法)「氣結而下通也」(書言字考)「おなじみの池田や小さの。急につかへか発りました」(南嶺・丹波与作無間鐘・四・一)

◆今は何にか命の露をかけてまし。ありがひもあらばこそ、とても思ひ出なる物を、なき子とおなじ道になしてたばせ給へと、人めも知らず三郎左衛門が前へふしまるび、わが子かへさせ給へやと、うつなきありさま。見るめあはれに思へども「いまはなににか、命の露をかけてまし、ありがひもあらばこそ、とても思ひ出なるものを、亡き子と同じ道に、なして賜はせ給へと、人目も知らず伏し転び、わが子返させ給へやと、現なき有様を、見るこそあはれなりけれ(今はなにをたよりにはない命をつなごうぞ。生きてゐる甲斐ももはやないのだ。どうせ生きていてもつらいことばかりのこの身なのだから、亡き子と同じように

いつそ殺して下され、と人目もはばからず付しまろびつつわが子を返してくれと、正氣を失つてゐる様子は見るのもあわれなほどであった」(謡曲・藤戸)による。

◆十面 洪面に同じ。不愉快そうなのにがにがしい顔。しかめづら。洪面顔。「海老の高き事を申せば、親父十面(じふめん)つくりて」(西鶴・胸算用・一・三)

◆ころせし女は扱は汝が子にて有りけるよな。よし何事も前世の事とおもひ、此金を命代と思ひ、恨をはれ候へ。「さては汝が子にてありけるよな、よしよしなにごとも前世のことと思ひ、今は恨みを晴れ候へ」(謡曲・藤戸)による。

◆わかきを先立てつれなくのころ老鶴の金を受けて何にせん。かり初に奉公させ、やぶ入りをもまちどをに思ひしに、又いつの世にあふべき「若きを先立て、つれなく親老鶴の、眠りの中なれや、夢とぞ思ふ親と子の、二十余りの年並み、かりそめに立ち離れしをも、待ち遠に思ひしに、またいつの世に逢ふべき」(謡曲・藤戸)による。「老鶴」は老人が茫然として過ぐすさまを表現した『和漢朗詠集』の都良香の詩句による表現。

◆やぶ人 正月と盆の一日、あるいはその前後に、奉公人が主人から暇をもらつて実家に帰ること。また、その日。その頃。特に正月のものをさし、七月のものは後の数入りということが多い。宿入り。宿おり。宿さがり。「長吉が親里へ五年ぶりのやぶ人」(咄本・歳旦話(天明三年刊))

◆たはひなき 正氣がない様子。思慮分別をなくした状態。「氣はつけ共うつとひりよんと成てたはひなく、ころりとこけてねいれ」(南嶺・大系図蝦夷噺・四・三)

◆アををとし。何と「ああ音高しな

にとなにとのう」(謡曲・藤戸)による。

◆取てふせ 取り押さえて。「もう叶はぬと抜てかゝるを。かいくどつて取てふせ」(南嶺・丹波与作無間鐘・四・三)

◆いたまぬ程に 傷を付けないように。「借屋中のかゝさま達にまかせます程に、何とぞいたまぬやうに」(西鶴・織留・四・一)

◆四間も五間もへだてゝ、扇の間より扇には「あふ」がかかる。

◆此中 ある期間のなか。この間。「此中(このちゆう)の銀子(ぎんす)を、今濟(すま)してくだされい」(西鶴・織留・四・二)

◆こりはてたる すっかり懲りている。「遠国の傾城の曾而(かつて) おかしからぬにこりはてゝ」(西鶴・一代男・五・七)

◆かつて 勝手。台所。「勝手は煙立つづき、亭主は置炬燵を仕掛、女房は濃茶立て」(西鶴・織留・一・一)。

◆手燭 燈火器の一種。燭台に柄をつけて持ち歩きに便利にしたもの。手燈台。てとばし。てそく。「Tabor テシヨク(手燭 Teodai(手灯台)と同じ。Tabor テシヨク テトウダイ(手灯台)手で持つ燭台」(日葡辞書)。

◆駒下駄 男女の履物の一種。台、齒ともに一つの木材から割(く)つてつくつたもの。もとの割り方が駒爪形であつたところからいう。桐、杉などでつくられ、台に管をつけたものや、木地を塗つたものなどがある。下駄。「お菊が見廻ふ駒下駄に飛石伝ふ足音の。サア是ぢやと飛立つばかり」(近松・寿の門松・中)

◆硫黄 黄色、無臭のもろい結晶体で、熱すると溶解し、点火すると青い炎を出して燃える。火山地帯に多く産し、火薬、マッチ、薬剤として用いる。「嶺より硫黄の燃え出づるを」(近松・平家女護島

・二)

◆ゑんせう 二の一に既出。「積累ねたる薪には、硫黄(ゆわう)・焰硝(ゑんせう)をまじへたれば」(馬琴・美少年録・一・二)

◆火道具 鉄砲などの火を発する道具。

◆ナント 軽い呼びかけの言葉。「なんと徳兵衛痛みはよいかと。こつこつ咳(せ)いて来る」(近松・重井筒・中)

◆大出来く 上出来。よくやった。「これはみなさま、大出来く。めで度一ツませふ」(咄本・俳諧百の種(文政八年刊))

◆別して 特に。「別して禁すべきは親子兄弟、あるひは篤実なる人の並居る中でさし合咄」(咄本・軽口五色帯(安永三年刊))

◆役者物真似 役者の声色をまねするもの。地物真似と対。「道の間を暫(しば)らくも口只(ただ)置くは恥らしく。役者(やくしや)物真似(まね)地物の物真似。小歌浄瑠璃口でんがう」(近松・油地獄・下)

◆浄瑠璃 平曲・謡曲などを源流とする音曲語り物の一つ。室町時代の末に、広く民衆に迎えられた琵琶や扇拍子を用いた新音曲の中、牛若丸と浄瑠璃姫との恋物語を内容とする「浄瑠璃物語(十二段草子)」が流行したところから、この種の語り物の名となつたもの。のちに、三味線の伝来とともにこれに合せて語るようになり、江戸初期には人形あやつりと結んで人形芝居が成立した。

◆踊どき 盆踊りに用いられる歌で、歌詞が物語になつてゐるもの。戦国時代の木遣口説から生まれた。「躍口説(ラドリクドキ) 舟歌とかはり、上手下手さまたまある事なり。をどりのくどきといふ事、むかしとかはり、中比よりは殊の外高上になりにたり。此くどきの詞に、

儒道を先だて仏教をしめし、又神道をあらはす。詩歌の心をふくませ、且和漢の古事を引き出すことおほかり。詞さへおぼゆれば、確もいふべき事なめれど、音声・息継・拍子合に上手下手ありて、品品わかつて「色道大鏡・八」

◆あだぐち「あだぐち」は、むだぐち。「されば世上の仇口（あだぐち）にも。奴（やつこ）々何するべい。お山に抱れて」（浄瑠璃・鎌倉三代記・三）

◆分・飯にそうしておくこと。浮・風流三味線・「我は此世にない分にして隠るを」（其磧・曲三味線・一・五）

◆一つ二つ九つ、ハアかなしや 前章でも引いたように、『播州血屋鋪』のお菊の幽霊があらわれるときの決まり文句。

◆むかしより悪人をだまして似せ物をわたすためしはあれども、相対づくにて似せものをつかます事希代のためし「昔より今に至るまで、馬にて海を渡すこと、希代の例なれば」（謡曲・藤戸）をふまえたもの。

◆井戸堀藤次、いわゆる「芋掘長者」の昔話は、長者説話の一つで、貧しく愚かな男が毎日芋を掘って暮らしているが、そこへ押しかけ嫁がきて山中の石ころ（実は金塊）の価値を教え、長者になるというもの。その主人公を「芋掘り藤五郎」とするもののほか、炭焼き小五郎、炭焼き藤太、金売り吉次等の同型の話が色々ある。「芋掘藤次」という例は確認し得ていないが、そのもじりとみるべき

か。

◆ふびんながら取てひきよせ 「不便には存じしかども、取つて引き寄せふた刀刺し」（謡曲・藤戸）による。

◆をのれ下膳なれば此はかりことを人にかたらんと思ひての儀。ねんごろにあとをとふらひ得さすべし「下郎は筋なき者にて、またもや人に語らんと思ひ」かの者の跡をも弔ひ」（謡曲・藤戸）による。

◆腹の内から 生まれつき

◆伏見閑路右衛門 こののみに出る名前。

◆介抱 世話。保護。「おことは一先づ御妹を介抱（かいほう）し。海登（かいどう）の湊（みなと）をさして落ちよ」（近松・国性爺合戦・一）

◆世におちて 落ちぶれて。「もとは浪人ものゝよしなれども、世におちて此山にとどまり、山中の功者ぶんとなりけるが」（南嶺・大系図蝦夷断・五・一）

◆ゆづり 譲り受けたもの。相続したもの。「親のゆづりをうけず、其身才覚にかせぎ出し」（西鶴・永代蔵・一・一）

◆金目貫 金製の刀の目貫。こがねのめめき。「仕合（しあはせ）と猿の口より金目貫」（西鶴・織留・二・一「目録」）

◆水仙 紋所の名。水仙の花と葉を種々にかたどつたもの。水仙の丸、抱き水仙などがある。

◆雪輪 紋所の名。雪片の六角形をまるくかたどつて図案化したもの。

◆定紋 家々できまつている紋。それぞれの家で：いる紋。また、その人がきまつて用いる紋。家紋。「羽二重もまぜて郡内のしまつて着ぬ浅黄裏。くろはぶたえへの一張羅定紋丸に萬の葉の」（近松・天の網島・中）

◆武士の子じやもの 「我も武士の子成ものをと、これを名残の一言にして」（西鶴・武家義理・四・四）

◆おたばねたてる 前回巻一の三で未詳とした「ほだばね」（二につくい女めがほだばね、木馬賣）と同じ語か。おだ（＝勝手なことを得意になつていうこと）と同義か。

◆どんぶり どんぶ。あつたら西瓜を、井戸の中へどんぶりと落した」（咄本・うぐひす笛（天明頃刊））

◆八つの鐘 今の午前二時頃（丑八つ）。

◆おし鳥 「鶯」と「唾」が掛かつている。

◆一埒 「埒」は物事の区切り。ひとくざり。

◆飢渴 うえること。「五穀みのらず、万民飢渴（きかつ）に及びし刻（きざみ）」（近松・国性爺合戦・一）

◆食つぎ 飯櫃。めしわんにつぐ飯を入れておく器。飯鉢。めしびつ。「雪の日、風の立つ時は食つぎを包みをき」（西鶴・五人女・二・四）

◆ゑんぶ恋しや 「ゑんぶ」は閻浮提。もとインドの地を想定したもので、のちに人間世界、現世を意味するようになって

た。「座敷の内は暗（くら）きより暗（くら）きに迷ふ枕元。あら閻浮（ゑんぶ）恋（こひ）しや懷（なつ）かしの御僧や。我は是（これ）過ぎつる菊月に世を取り失ないし。大吉屋の松右衛門が霊魂（浮世草子・新色五卷書・五・一）の例からもわかるように、「ゑんぶ恋しや」は幽霊の常套句。

◆ひだるし 飢えてひもじいさま。「今といふ今、喰はねばひだるいといふ事を知つて」（其磧・禁短氣・四・四）

◆懐胎 このまま「かいたい」と音読する例が多い。馬琴は「みごもる」と訓を付している。三年の間（あはひ）には、かならず懐胎（みごもり）給ひて」（馬琴・弓張月・三七回）

◆別心 相手を裏切るような心。そむこうとする気持。ふたごころ。異心。「是を別心なき申わけのしるしにせん」（南嶺・龍都倭系図・五・一）

◆方寸の謀 「方寸」は心。心は胸中方一寸の間にあるとするとところから。心中ひそかに企てた計略。「軍中の機密は。将の方寸にあつて。他にもらさぬを良策といはずや」（南嶺・魁對盃・二・一）

◆願ひのまゝにやすくと彼血をかくし「て、かのさらをかくし」て、若殿立身の種となしぬ、若殿立身の種とぞなしける「願ひのごとくに易々と、かの岸に至り至りて、かの岸に至り至りて、成仏得脱の身となりぬ、成仏の身とぞなりける」（謡曲・藤戸）のもじり。

○卷二之三

○七つ過れば出る怪物より上の工夫

【梗概】

家老加古川右近の所に最近雇われた仲間の太郎助が餅間三郎左衛門の屋敷へ書状を届けるように命じられる。ばけものが出るといううわさの屋敷なのでいやがるが、命令なので出かけていく途中、円山入道と明石梅軒父子一行に出会い、書状の中味を読まれてしまう。その内容は、京都一文字屋の遊女吉野から明石貫左衛門にあてたもので、貫左衛門と言いつた関係者を清算し、円山に従うことを告げるものであった。太郎助の機転により、円山はすっかりその手紙の内容を信じ込み、飼犬に手を噛まれたという怒りで、貫左衛門をその場で斬り殺してしまう。父親の梅軒も、ちょうど馬で来合わせた右近に身柄をあずけられることになった。

「是は此御家中に住居いたす者で御座る。ヤイ／＼太郎助あるかやい」「ハア」「あるか」「ハア」「あたか」「おまへにおりまする」。

「ム／＼ねんなふはやかつた。汝をよび出す事余の義でない。夜前ひそかに申しふくめし通にして、此状を餅間三郎左衛門のかたへ持てゆけ」

「エ／＼今からで御ざりまするか」「ハテしれた事」

「申し／＼、あの三郎左衛門様の御屋敷にはばけ物がでると申して、そとがはの通り手さへも御ざりませぬ。此御使は御ゆるされて下されませい」

「ハア扱おく病な事をぬかす。ばけものと豆腐の骨はな物じや。急ひでゆけ」「ハア」

「エイ」「ハア」と罷りたち

「扱も／＼おそろしい事かな。ゆかずばその分ではおかれまい。よひ／＼思ひ切てゆかふ」

と、右近仲間太郎助こは／＼清水繩手を通りける所へ、先供権高に払ひ来るは円山入道・明石梅軒父子也。「はつ」とつゝみの片唄へおりてうづくまれば、貫左衛門見とがめ

「その方が持て居る状箱に餅間三郎左衛門様と附札がてんゆかず。此節は円山様御うたがひの義あるゆへ、三郎左方への通達は仲間同志申しあはさねば人もやらす使もうけぬ申し合せなるに、此方どもへの相談もなく、状通とは何ものよりぞ。のみこまぬ」

といへば、円山うなづき

「いかにも是は貫左衛門申す通りじや。其状箱はへ渡せ」

とあれば、太郎助ぎやうてんして

「主人急用とてわたせし一通、おまへがたへあげてはわたくしめが、首と胸のわかれをいたしまする」

と迷惑がれば、貫左衛門とびかゝつて引たくるを、仲間ながらぬきあはせてよせつけぬを、梅軒下知して大勢立かゝり、刃物扣きおとし、堤のかたわきなる松の木にしぱり付けて、状箱の封をきれば、女の髪一ふさに、あてななしの白封の状あり。ひらいて見るに文字はなく、「やるぞしらかみ文とよめ」といふ事かと、人／＼興をさまざま。中にも梅軒は物事功者にて

「酒にて文をかき日にほせば白紙のごとし。是を火にてあぶれば酒にて書たる文字出

と、楠軍法重宝記といふ書に出てある儀」

と、燈こち／＼いさせて松葉ひろいあつめあふぎたて、ふすばりながらもゆる火に、こげぬ様と用心してあぶりければ、案にたがはずあり／＼と文字あらはれけり。円山は大に感じ「さすが老功のかんがへ」と、さしよりよみて見れば、おもひがけなき女筆のちらしがきにて、

「御文はいしまいらせ候。まことに此はりまへくだりしは、わか殿様といふはかこつけ、まことはそもじ様と都にて申かはせしゆへ、此よあの世かけてちぎり候はんと、くだりまいらせたれども、円山さまの御ざる内はおまへの望みもかなはぬまゝ態としばられてつれて出たらば、色ふかき円山さまなれば、思ひつかるゝはしれた事なるべし。其上入こみて首尾を見あはせ、円山さまのねくびをかけとの御頼み。そのうへはおまへとわたくし夫婦になり、此国をおさめんと仰もだしがたく、円山さまのかたへは入こみたれども、おまへより外にとかぬ心の下ひもなれば、円山様にくだかれてもがてんせぬゆへ御心ゆるされず。其うへ御ねがほを見れば何とやらん御いとをしぐ心にまかせず候。円山様の御心のあまり忝き品／＼に候へば、わが身事は是までとおぼしめし切り下され候べく候。さりとて又御たのみの事人にもらし申すまじく候へども、円山様をころして一國をとらふとおぼしめしても、右近殿三郎左衛門殿など申す人が御ざ候へば御ためにはあしく候はんまゝ、ふつ／＼おぼし召しとまり候べく候。是までのえんとおぼし召し下され候ため、わがくろかみを切ておくりまいらせ候。此後は円山さま御心にしたがひ候とも、御うらみ下されまじく候。又此つかひの者は物見の格子よりそとを通るものを、金子をやりたのみつかはしまいらせ候。かし／＼」

ととめたり。

円山急にせいてきて、きつは廻し油断せぬ様。梅軒も大におどろき詞なければ、貫左衛門めいわくがり、「是はあまりむ／＼い仕様」とあたまをかけば、しばらくあつてゐる仲間、

「私は京の嶋原より備前の岡山迄飛脚にまいるものなるが、此御家中を通りしに格子よりよびよせられ、『此文をひそかに明石貫左衛門殿と尋ねてはかくれない屋敷じや程に、ぢきにあふてとゞけてもらいたい』と、一歩ふたつ包んで『是を賃に』と出ししなに『見しつた男ゆへたのむ』と仰られしは、たしか一文字屋のよし野さまかと、おろせ商売のわたくし目ばやくのみ込、お文箱うけ取て見れば、『あて名がちがふて御ざりまするが』と申したれば、『此へんで貫さまのお名のたゝぬため。そのうへけふはしかま三郎左衛門どのへいて御ざるほどに、ひそかに三郎左衛門殿へゆきてよび出してわたしてくれよ』とある義。かやうに難儀いたす事とも存ぜず、ひよんな物うけ取ました」

といへば

「コリヤその貫左衛門といふは身が事じや。身に覚えもなひ事、うぬどうでもがてんのゆかぬやつ」

とはなさねば

「ハテ扱わるひおのみこみな。わたくしはわけを存せぬ通りがりのたのまれ使。がてんのゆかぬ事もゆく事もそのふみの通りなれば、おまへのむねにある事」

と一ほんさゝれて、あとへもさきへもゆかぬいひわけ、笑止なりけるありさまなり。

ここに加古川右近は、「新参者の太郎助器量あるやつと見立て使にやりしが、この外におそひ参りて様子を見ようと存する」と、供廻り大勢召連騎馬にて来かり、馬より飛でおり

「是は〱円山公で御ざりまするか。今日は三郎左衛門方へ御出でとうけ給りました
が、あまりおそく心もとなく御迎ひに参りました」

といへば、円山大に悦氣あつて、

「よひ所へ来めされた。忠臣といふはその方と三郎左衛門にきはまった。皮ひとへ下の心はしれぬ物でおじやる。明石梅軒貴左衛門おや子は身が手足のごとく思ひしに、
は見やれ」

とくだんの文を見すれば、右近よこ手を打、「侍ども、梅軒貴左衛門に縄かけよ」
といへば、貴左衛門はらたて「是には段々様子」といへども、

「いやさ様子所ではおりなひ。忝くも円山様はどなたとおもはるゝぞ。只今では播州
一国のあるじ。その御主人をころせとは天命しらずめ」

と縄たぐり掛てすゝめば、円山こらへかねてぬくかと思えしが、刀のひかりと共に
貴左衛門が首はまへにぞ落にける。梅軒びつくりして「こは情なし」とよる所を、

◆「是は此御家中に住居いたす者で御座る。ヤイ〱太郎助あるかやい」「ハア」
「あるか」「ハア」「ぬたか」「おまへに
おりまする。ム〱ねんなふはやかつた。
汝をよび出す事余の義でない 狂言の冒
頭によくある形式。『清水』では、『こ
れはこのあたりに住まい致す者でござ
る。……まず太郎冠者を呼び出だいて談

合致そう。ヤイヤイ太郎冠者、あるかや
い。『ハア』『いたか』『お前におり
まする』『念無（ねんの）う早かつた、
汝を呼び出だすは別なることでもない」
（古典大系本による）というふうにはじ
まっている。太郎助は太郎冠者のもしり。
「ねんなふ」は思いがけず。意外に。
◆申し〱、あの三郎左衛門様の御屋敷

うしろより右近引たをして、

「わが君円山様へちかよるは、逆心まぎれなし」

と無理無たいに取て引ふせ、高小手にしばりて仲間どもにひかせ我屋敷へおくらせ
ければ、円山きげんなゝめならず。

「養飼猫に手をくはるゝとはきやつ等が事。それなる飛脚の者にはとがなし。追放し
つかはせよ」

とあれば、右近きいて

「いや〱外一まいり此沙汰いたすも心もとなし。縄をとひて世間のしづまる迄は、
わたくし方に召置べし」。

「いかにもそれも尤と、円山は立ちかへれば、途中が心もとなし。身が者どもは皆御供
してゆけ」と、馬にのせまいらせのこらず送らせつかはし、あとにはひきやくの者と只
二人のこりしが、四方を見あはせ「その方新参者にて人の見しらぬだけに狂言うま
ふいた。太儀であつた。ゐてやすめ」「ハア」「エゝイ」「ハア」と、つれてわが家に
かへりける

にはばけ物がでると申して、そとがはの
通りでさへも御ざりませぬ。此御使は御
ゆるされて下されませい 狂言「清水」
では、「七つ下がつて清水へ参れば、元
興寺（がこじ）『狂言記』では「鬼」
とやらが出ると申しまするによつて、こ
れは御免なされて下されい」といつてこ
とわろうとしている。

◆ばけものと豆腐の骨はない物じや 似
たような表現としては、「傾城の誠と卵
の四角なはない」「（譬喩盡）「仙人のはな
しと鶏卵（たまご）の四角なはない」〔南
嶺・大系図蝦夷断・一・一目録〕等があ
る。
◆その分 そのまま。「実父の死がい。
その分に捨置んは不忠の第一」〔南嶺・

◆丹波与作無間鐘・四・三
◆縄手 田んぼのあぜ道。また、長く続くまっすぐな道。

◆先供 行列で先頭に立つて供をする人。「旦那のお帰、先供走る黒羽織」(近松・夕霧阿波鳴戸・中)。「町人の葬札に(略)編笠先供の事を嘲り給ふが」(談義本・当世辻談義・三)

◆権高 気位が高い様子。傲岸な態度をとる様。「評判の高松ほどあつて、強氣にけん高な女郎ぢやの」(歌舞妓・時桔梗出世請状・二)

◆片岨 片端。すみっこ。「石のそばの、折敷の広さにて、さしたるかたそばに尻をかけて」(宇治拾遺・六・五)

◆附札 書類や手紙などに貼付してある紙。書類に関する指示・意見・返答などを記す。「窓のつよきかたおやぢ、大道をあるくにも、たゞはあるかず、眼くばりしてゆくむかふに、銭百文おちてあれば、是はうまいと、走りゆきしが、毫兩五分とかいた付札に、南無さん、コリヤひろわれぬ」(咄本・夕涼新話集(安永五年刊))

◆状通 手紙を出すこと。「をさななじみの本妻さへ、王子方の者なれば状通にて縁切った」(近松・用明天王職人鑑・二)

◆迷惑がれば つらいという気持ちを様子にあらわすと。「合力がはさまれてから、めいわくが、ときどきあいたやいたやといひてよし」(虎寛本狂言・蟹山伏)

◆仲間ながらぬきあはせて 中間は紺の法被に梵天帯で樫の木刀一本を差すのが普通の姿であるが、ここは、その木刀で応戦しようとしたもの。

◆やるぞしらかみ文とよめといふ事かと この当時「やるぞしらかみ文とよめ」という文句の俗謡がはやったらしい(旧

版古典大系『歌舞伎脚本集・下』の注による)。「おもしろさやるぞしらかみ文とよめ」(川柳評万句合・天明元年 札・三・二〇・一七)「やるぞ白紙文と読め、お手が鳴るなら鉤子とさそれ、とはずつとむかし」の事にて「洒落本・にやんの事だ(天明元年)」「ハテ、そこが歌にも言ふ通り。」「やるぞ白紙(しらかみ)文(ふみ)と読(よめ)といふ事だは」

◆歌舞伎・名歌徳三樹玉垣・三立目
◆酒にて文をかき……火にてあぶれば 酒にて文をかき、酒、明燐、塩化コバルト、ミカン汁などを使う。「これ今のあぶり出しといふもの也。ここにするは酒をもて物を書き火にあぶる異国の方よりも簡易なり」(嬉遊笑覧・三・上)なお、「何此白紙が思案とは。ヲ、サ返初(かりそめ)ならぬ密事の計略、落ちても人の見ぬ様に。此白紙認(した)め置き、水にひたせば皆(みな)読める」(浄瑠璃・神靈矢口渡・二)なども参考になろう。

◆桶軍法重宝記「国書総目録」には出ない書名(『桶軍法鑑校』という享保十七年刊の八文字屋本がある)。前項『神靈矢口渡』(旧版古典大系)の頭注に引く『秘事指南車・下』(享保十二年刊)に、「白紙にて文通する術」として「白紙に酒にて文字を書き、乾して後水に入れば、書きたる文字あらはるゝ、密に文通するには、此法をもちゆべし、乾きたる時は白紙とみゆる、かねて向の人といひ合せ置べし」という記事が出る。ことさらにすれば、この種の書物を念頭におきつつ、桶正成流の軍法書の解説書といった雰囲気を持たせた架空の書名と思われる。

◆燧 火打石と火打金とを打合せて発火させること。また、その道具。「素(も)とより燧太き辻校(わかう)なれば有恠(かかり)けれども物とも思はで、腰に

著(つけ)たる囊(ふくろ)より、燧(ひうち)を出(いだ)し火(ひ)を鑽(う)ちて」(馬琴・美少年録・二〇回)

◆こちく(副詞) 硬いものをたたく音。また、硬いものでうしが触れ合う時の音。「ふくろにいれたるかづらぎの嶺(こちく)と山伏の打つ火うちいし」(俳諧・破邪頭正返答)「さる家の見せの下を、ぬす人、こちくこちけるを」(咄本・軽口若夷(寛保二年刊))

◆ふすはり 火がよく燃えないで、煙ばかりがたつ。くすぶる。「飛び入り飛び入りばつとふすばる煙の内」(近松・平家女護島・四)

◆女筆のちらしがき 「女筆」は女性の筆蹟。「ちらしがき」は、色紙・短冊・艶書などに和歌や文の一、二句づつを、行の頭をそろえず、また、濃く淡く、太く細くなどさまさまに、また、とびとびに散らし書くもので、ほとんどの場合、女性の手紙に用いられた。「女筆(に)よひつ」の散らし書ことなまめく贈り物。いかさまあちなことさうな聞かまほし」と笑ひ」(近松・用明天王職人鑑・二)

◆かこつけ 口実。「寺子屋へ行をかくつけにして、昼寝の手枕度の重るにしたがひ」(南嶺・今昔出世扇・四・二)

◆そもじ様 「そもじ」は「そなた」の文字言葉で、女性語。それをさらに丁寧に言つたもの。「そもじ様故漕(こが)れ舟人目の岩に波せて。砕くる磯辺床右衛門」(近松・堀川波鼓・上)

◆思ひつかるゝ 心を引かれる。好意を持つ。愛情をよせる。イ、惚れ込む。ロ、親しみ懐(なつ)く。「自然と思ひつかすしかけ」(浮世草子・野白内証鑑・一・二)

◆入こみて もぐりこみ。「もし敵のまはしもの、下女などになつて入こみ、ちんどんなどをあたへまいものでもない」

〔咄本・立春新大集(安永五年刊)〕
◆首尾を見あはせ よい機会をうかがい。「よき首尾見合せ、酒に酔出し前後覚へぬ風情」(西鶴・一代女・一・二)「首尾を見合せ合図を定め」(近松・心中天網島・上)

◆とかぬ心の下ひも 「下紐を解く」は、下紐を解いて衣服を脱ぐ意から転じて、男女が共寝する。特に、女性が男性に肌身を許す意。ここは、まだ肌身を許していないことをいう。

◆品く ここは、しぐさ、ふるまいや扱い方。

◆御ためにはあしく候はん あなたのためによくないことです。
◆ふつく ぶつくりと。きっぱりと。「今より我事ふつくと思召切給へ」(其磧・都鳥妻恋笛・四・三)

◆わがくろかみを切ておくり 心中立てのひとつ。「女郎の。心中に、髪を切り、爪をはなち、さきへやらせらるるに」(好色一代男・巻四・二)

◆せいてきて いらいらしてきて。気がたかぶってきて。「ていしゆいよくせいて」(咄本・正直咄大鑑(貞享四年刊))
◆きつは廻し (刀を抜くとき、左手で鞘ごと回して、刃を上に向けることから)まさき刀を引抜こうとするさま。「主に向かつて切刃をまはさるゝは、臣下の身あるまじき事」(其磧・都鳥妻恋笛・五・三)。「切刃をまはさるればとて、申すべき事を申すまじきや」(南嶺・龍都依系図・一・二)

◆ちきに 直接に。「某(それがし)参りちきにあらうて笠をわたし」(近松・傾城反魂・中)

◆おろせ商売 「おろせ」は(江戸時代、駕籠かきが「重くばおろせ」と歌いながらかついだところから)駕籠かきのこと。また、駕籠かきが寝泊まりし、詰めてい

た「おろせやど」の略。「有時若ひ衆にたのまれ嶋原への状帯持ってまいりけるに。賃は卸（おろせ）の並とて五分くれられける」（浮世草子・好色盛衰記・三・三）

◆目ばやく 見つけることが早い。めざとい。「佑経めばやきおのこにて」（近松・曾我五人兄弟）

◆ひよんな物 とんでもない物。思いがけない物。「なう大名の手業（わざ）にも有るべき道具の足らぬのは。ひよんな物とおむつかる」（近松・傾城反魂・上）

◆うぬ 二人称の卑語。相手をののしつていう。「屋敷家財にも。芥子ほども疵

（きず）は付けまいがうぬが命に疵付ける」（近松・重井筒・上）

◆一ほんさゝれて やりこめられて。へこまされて。「蚊柱に一本さする嵐かな永治」（俳諧・毛吹草・五）「此程の返しに一本させらるるは、見へた事」（其磧・傾城禁短氣・五・三）

◆きはまつた 決まつた。結論が出た。「悦びに参らねども。もはや忠盛妻にきはまつた上」（南嶺・忠盛祇園桜・二・三）

◆悦氣 「悦喜」と書くのがふつう。喜ぶこと。満足すること。「入道は一しほ悦喜ましくゝて」（其磧・風流宇治頼政・三・二）

◆よこ手を打 左右の手を打つ。感心したときなどの動作。「みな人よこ手を打て、さても頓作なる御返答やと、口をとちてかへりける」（咄本・一休はなし（寛文八年刊））

◆おりなひ 「おいりない」の転。「ない」の丁寧語。近世においては、田舎侍や奴など下級の武張つた者のことばに多い。「此の赤松梅龍が姪などを。むさど前垂（まへだれ）奉公などに出すものではおりない」（近松・大経師普曆・中）

◆無理無たい 無理矢理。「左（さ）いうてはことすまずと。無理無体に衣裳させ」（近松・用明天王職人鑑・一）

◆高手小手 両手を背の後ろに廻し、首

から肘、手首にかけて嚴重に縛りあげる。こと。また、そのさま。「鴛籠（かご）打明（うちあ）け、高手小手の縛繩（しほりなは）引（ひつ）立てて引出す」（近松・大経師普曆・中）

◆養飼猫に手をくはるゝ 「飼犬に手を食わる」とか「手を噛まれる」などが普通の言い方。ふだんから特別大事にしてやっついて、そんなことをするはずもない者から、思いがけず害を加えられること。「思ひもよらぬかひいぬに手をくはれ給ふ御運の末」（近松・津国女夫池・三）「飼犬に手を噛まるる」（譬喩盡・二）

目録

ゆや 狂言 宗論

第一 四条五条の芝居のうつし

大夫が蔵人をふるは涙の袂
実道理なりあはれるな棧敷

◆ゆや 巻三の下敷になつてゐるのは、能の「熊野（ゆや）」と狂言の「宗論」である。「熊野」は三番目物。作者は諸資料に世阿弥作とあるものの確実とはいえないようである。梗概は以下のとおり。平宗盛（ワキ）は、遠江の国池田の宿の長熊野を寵愛し、都に留めおいてゐる。そこへ池田の宿より重い病に臥している熊野の母から娘の帰国を促す手紙が届く。熊野は宗盛に暇をいにするが許されず、かえつて宗盛の花見に同道させられる。物見車に宗盛と同乗して清水寺に着いた熊野は、観音に母の無事を祈り、また酒宴の席で宗盛の求めに応じて舞う。折しも村雨に花が散る有様を見て熊野の詠じた「いかにせむ都の春も惜しけれど馴れしあづまの花や散るらむ」の歌に感動した宗盛は帰国を許す。熊野は喜んで直ちに東路につく。

◆宗論 出家座頭狂言。身延山から下向する本国寺の法華僧と善光寺から下向する黒谷の浄土僧（シテ）とが道連れになる。法華僧は相手が浄土僧と知つて逃げようとするが、浄土僧はつきまとつて宿も相部屋となる。宿で二人は宗論をするが、お互いにあきれて寝てしまふ。後夜に起きて踊り念仏・踊り題目と名号を取り違え、浄土も法華も同じと謡つて舞い納めるといふ内容。二人が法文を誤つて説く珍妙な宗論を核として形成されたものであるが、宗論は室町時代を通じて行われ、特に法華対浄土の宗論は激しかったらしく、その流行を背景として構想されたものとみられる。浄土宗の柔と法華の剛の対照の妙を言葉・しぐさの両方の面から見せてゐる。

◆四条五条の芝居 「四条五条の橋の上」（熊野）による。京都の芝居小屋は江戸中期から現在に至るまで四条にあるが、もとは五条などにもあつたらしい。「芝居」は四条鴨川の東にあり。……出雲のお国……北野の森・祇園の南林あるひは五条河原橋の南にて興行しけるに、秀吉公伏見城より上洛し給ふ時、見物群集し妨げに及ぶ。故に四条の河原にうつす。……遂に寛文年中に今の地にうつして常芝居となる（『都名所図会・二』）

◆うつし 模写・模造したもの。書状や文書のように書写して作るものに限らず、いろいろなものに用いる。「をんあるじでうすにんげんをおん yonji につくりたまふ」（『目ボ』）

◆ふる 遊女が客を嫌つて、意に従わないのをいう。「ふる ふり心なり、我すかぬ男にあひて、気のふるといふ儀なり」（『色道大鏡・一』）

◆涙の袂 涙に濡れた袂。「景貞目（ひ

第二 村雨がして大夫をちらし候

又もや御意のかはつた趣向
たゞこのまゝにいとまとはおしや命

第三 南無あみだぶの武士の娘

浄土方は四十八まきしてかゝれば
法花宗は経かたびらでの仕合

となる教え。
◆法花宗 日蓮宗のこと。
◆経かたびら 死者を葬るとき、着せる衣。麻衣に真言陀羅尼などを書く。「愚

按するに以上三経(『大宝樓閣経ナド』の本説に拠れば、経衣(かたびら)には隋求宝篋等の陀羅尼、光明真言等を可書、何となれば、真言陀羅尼は、不思議法性

○卷三之一

○四条五条の芝居のうつし

【梗概】

有馬田山が大夫吉野を自邸に引き取ったのは、下心があつてのことであるが、吉野はなかなか言うことを聞かない。それは、都を恋しく思うためだろうと、彼女を慰めるために芝居を催させる。加古川右近が座元になり、敵役は餅間三郎左衛門がつとめる。外題は「今業平牛飼車」。その総稽古の見物に田山が吉野とともに出ていくと、その見物人の中に田山の倅蔵人とその御供の生田新三郎がいる。新三郎と蔵人が若い吉野に狂っている田山の様子をさかんにからかうので田山は恥ずかしくなる。その結果、蔵人の「私が拝領いたします」という言葉に抗うことができなくなり、吉野は蔵人に引き取られることになる。奥の部屋に連れられてきた吉野は、蔵人から、友仲がいなくなつたのだから、この国は自分のもの同然、だから、自分のものになれとさかんに迫られるが、吉野は友仲との再会を願うばかりである。

「これは有馬の田山なり。」

さても都一文字屋の大夫をば吉野と申し候ふ。ひさしく屋敷に留め置きて候ふが、さまぐにくだけども心にまかせず候へども、もしは都恋しさのあまりにやと存じ、芝居を申し付け慰ばやとおもひ候ふ。

の声字なるが故に、一字に無量無辺の義理法門を具し、一句に万法一切を含ます」
〔真俗仏事編・四〕

つ時分に、新平かたへ状をつけ、今晚、椿原にて仕合(しあひ)致すべきよし、いひやりて(西鶴・武道伝来記・三・三)

◆仕合 技などを競うこと。「其日の八

「いかに誰か有る」

とよび出せば、加古川右近まかり出て、

「太夫どの御慰とて芝居興行のよし。京大坂へも申しつかはし、女がたばかり五人はよびよせて候へども、立役その外は御知行の百姓の内より、器用なるものばかりえらび出し相つとめさせます。すなはち、餅間三郎左衛門も病氣本復致せしに付きて、敵役をつとめ申すべきとの義。狂言の趣向はすなはち三郎左衛門が血をわりし腰を、殺せし所をたていれ、惣外題は今業平牛飼車三番つき、井に大尽の鼻毛は長岡の通路、附たり大夫が花の流れ河は音羽の山ざくら、と申す狂言を取りくみ、今晚らうそくての惣芸古」と申せば、

「コリヤよからふ。その惣げいこから見ん」

と、あたらしくたてさせし檜木舞台、縁くによりて見物群集すれば、田山入道は吉野をいざなひ、西の三げんめより十けんめ迄、棧敷に錦をかけさせ、残る棧敷も惣家中へわりつけ、花をかざりし中にも、古入道が今をさかりの大夫と居ならびしは、不動の像に観音も同座あるかと見へにける。

「東西く、さて高ふは御座りますれども、これよりつらりと断申し上げまする。まづ以ていづれも様、早朝より御出下され」

といへば、頭取が袖をひかへて

「昼の芝居かなんぞの様に。宵よりといはつしやれ」

といへば、

「いかにも早宵より御出で下されまして、大夫本は申すにおよびませず、惣座中何程か恭ふ存じ奉りまする。惣座中の代僧といたしまして、是より御札を申しまする」と、百姓が役にさゝれての口上片言まじりも一興となりて、くはちくくくと幕をきれば、だんじり六法のしやぎりをふかせ、来序の太鼓さみせんにのせて小姓役の者ども、大ふり袖に花かごを揃へ、丹前ふつて出づるは廿六七なる立役者。村雨にさくら花のちりかゝる気色を五色にぬはせし羽織はかま、幕あげさせて出たるすがた、あつはれきよき男ぶり。かげはかつらの橋柱、たてものところ見へにける。立出て峰の雲花やあらぬ初さくらの祇園町の風でなしと。棧敷をはるかにながむれば、大尽擁護の機げんとりども、

「ヨイヤやつちや」

とほむる内にも、円山は

「あれは悴蔵人ならずや。有馬よりはいつ帰りし」

と、稻荷山の薄紅葉ほど酒にてりし顔色も、あをかりし葉の秋れはて

「大夫とならんであふては」

と、にはかにさます興かく堂、まづ盃のめぐる事もしばしの内はくるまどめ。

「こゝよりは座敷へ」

と棧敷のはしごをそろくと、おりめの衣はりまがた

「しまま」と呼るれば、

「しまま三郎左衛門是にあり」

と、追付舞台へ出る衣裳のまゝ棧敷の後へ来るをまねき、

「あれは悴蔵人ならずや」

といふ内、見物の中よりほうかぶりせし男、弱かざしてぬつと出狂言のかたへは

むかず、円山がさじきに向ひ、

「暫く、さじきの御隠居大尽さまをちくとんばかりほめ申さう」

と、すこしなまりをくはせて、

「おとしは大かた六十へわかげにかへるはなげぬき南方、たはけも見及びし年にこそよれ。しわにこそよりかゝつてそゝなかし、そゝなかせばうきぐものうかべる栄花をたのしむ事、清水寺の鐘の声。所行無常のこゑやらん。盛者必衰の下戸なりしが、色ゆへめつきり上戸となる。仏も本はほんさまの、なかばは雲に上を見ぬ、驚熊鷹と慾つよく、流水によつて香ひをかぎ、雲をへだてゝ風聞はやし。若旦那の御供して生田新三郎が是まで参りし。ヤツチャお棧敷の大尽さま」

とほめたてしは、円山が家の古きおとな。

「蔵人に付て有馬につかはせしが」

と仰天するうち、丹前の立役と共に、くだんのほめ詞の男打つれ、さん敷の下へ来り、

「今日有馬まかり帰り国境までまいりたれば、にはかの芝居ありとの義。すぐに衆屋へ仕かけ、おなぐさみにとぞんじ、最前よりの出端、おめに懸ましてござる。私が

かやうに孝行なれば。おまへには又わたくしが帰りましたら慰みものにとおぼしめして、それなる美女を召かへをかせ給ひ、草木は雨露のめぐみ、養ひ得ては花の父母たりと申すが、花をさかせて置てのおまかけ、有がたき仕合」

といへば、さしもの円山もいやといはれず、

「何とやらんこの春は年ふりまさる朽木桜。心ばかりの寝間の伽」

と、顔打あかめて申さるれば、蔵人はかぶりをふり

「御言葉をかへせばおそれなれども、花は春あらば今にかぎるべからず。是はあだなる主の皿の御せんぎもくらしときく。はやく奥へ入せ給へ。父の慈悲なるこの女中は私拝領仕り、ともに心を慰さん」

と、

「さげ重こへよせよ」

とて、

「是も思ひの棧敷の内、はやお帰リ」

とすゝむれど、心はさきにゆきかぬる。足弱車のちからなげに

「せめてそなたのなつかしや」

と、うちながめくぜひなく棧敷をおりらるれば、蔵人・新三郎棧敷へあがり、

「コレ大夫、先年中道寺の町の口、老若男女貴賤都鄙いろめく花衣、袖をつらねてぞめきし最中、貴様に行ちがふて、名にあふ都の大夫かなと思ひ付しかども、友仲

あひ方と聞、とても身にあふてくれまいと、それより郭はいふにをよばず、祇園縄手北野まで似た女郎もやとさがせども、かげをうつすほどのおもかげ老人もなきに困り、野郎になりともと、それより毎日河原おもての芝居を見れども、よつてつく器量見へず。有馬へ湯治とて出かけしも、そもじに似たる女おほくの俗人の内にあらばとかうあせるに、天のあたへと、げにやおもひ内にあれば色外にあらはる」

と、しなだれければ、つきとばすを、新三郎きつはまはし、

「友仲殿国遠めされたれば、この一国は蔵人様の物ならずや。いやといはるれば命がなひが」

とおどしかれば、吉野は返事もないじやくり、

「この様に立かはりいれかはり、くどかるゝ身のせつなさ。友仲様にあふ事も」

なみだにむせぶばかりなり。右近は楽屋よりのぞき居て、

「蔵人殿は円山どのは格別の様におもひしに、山外に山あつて山つきず。家中に

悪人多して極りなし」

とあきれはつれば、蔵人は余念なく、

「いやでもおうでもかなへてもらはねばならぬ」

と、ひざをまくらはなうた。

「あたいやらしひ」

と、吉野が心は友仲様にあひたいばかり。人楽み人愁ふ、是皆世上の有様なり。

◆一文字屋 京都島原柳町中之町にあつた大きな遊女屋、一文字屋梅村七郎兵衛。

『色道大鏡・三』には「梅村七郎兵衛」の名で見える。「風義は一文字屋の金太夫に見ますべし」(二代男・六・六)

◆申し付け 改つて莊重な、あるいは格式ばつた威厳を示す言い方。言いつける。命じる。

◆いかに誰か有る 「いかにたれかある」(熊野)

◆女がた 「女形」とも。歌舞伎の俳優の役柄の一つで、女性に扮するものをいう。この名称は女歌舞伎の禁止された寛永(一六二四)ごろから生じた。「おやま」ともいう。その首席に位置するものを立女形(たておやま)といい、女形はさらに、若女形・傾城方・花車方・娘形などに分派する。「此君女がたのかいさんといへ共、第一面鉢よろしからず」(役者口三味線・京一)「今は町の女皆芝居の女形(おんながた)の風を似せ、帆の丸(ハ紋所)をはやらかし」(其積・禁短氣・二・四)

◆立役 歌舞伎狂言の役柄の一。また、その役柄を演じる役者。役柄の性格の分化や解体に伴つて、少しずつ意味するところがずれてくる。延宝(一六七三)八(一)末、天和(一六八八)八四(一)ごろに悪人方(あくにんがた)、敵役(かたきやく)が現れるが、それらに對立して活躍する善人の男主人公の役柄。また、それを演じる役者。元禄(一八八八)一七(四)期には最も重要な役柄となり、その芸質も荒事(あらごと)・和事(わごと)・実事(じごと)などに分れ、初世市川団十郎の荒事、坂田藤十郎の実事のようにそれぞれの芸質にそれを得意とする役者が現れたが、のちには一人で数種の役柄を兼ねることが多くなつていった。「みなこんつよき立役つとめけるが、

これらもむかしは若衆ならめ(西鶴・男色大鑑・八・二)「立役といふ事は、全体女形の号は実事仕、てき役、道外まで一くるめの外なれども、自然とそのかしらにたつ故、実事仕の事のみになれり」(古今役者大全・一)

◆本復 病気が回復すること。「やかてほんふくして、かのはなをおしめともかなはず」(咄本・きのふはけふの物語)

◆たていれ 「たていり」とも。「立入」「達入」などをあてて。歌舞伎の演出用の型。様式的な型から写實的な型まで、その種類はきわめて多く、細分すれば二百種にも及ぶであろう。立廻(たちまはり)、殺陣(たて)とも。「狂言の中に太刀打・立入する事、只少し立まはり斗にて、今の役者の宙返り事・水車、かりそめにも立入(たていり)する事なし」(続耳塵集)「立入(たていり)、全体たていりといふ。雨だて、泥仕合ひ、とりものなどの時、大勢入みだれしを、ついたりといふ」(増補戯場一覽・冬)

◆敵役 歌舞伎の役柄の一。もとは悪人方・悪方(いやがた)という。悪人の役。「人倫訓蒙図案・七」に「敵役みるとそのまににくらしく、無理な事のみいい、いかつがましき顔つきする」とあるように「元来はこわい一方の性格であつたが、元禄(一六八八)一七(四)以後いろいろに性格が分れ、実悪・公家悪・色悪・実敵・平敵・半道敵などに分れる。元禄期に名人山中平九郎が出て以後、初代中村歌右衛門・初代浅尾為十郎・初代嵐雛助・初代中村仲蔵・五代目松本幸四郎などが敵役の名優として知られている。「あつたが敵役の一番のかたき役、ほうひげに長がたな(野良立役舞台大鏡)」「かたき役をきめて勝をとれば、見物衆はさてもよいぞと、その女形を譽るものなり」(あ

やめぐさ)「かたき役はかほであらばれ、実事師はかたちでしれるほどならばたれありて悪人をちかづくるものなし」(忠臣蔵偏痴氣論)

◆外題 歌舞伎や浄瑠璃の題。歌舞伎に使用され長明などについても称する。おもに上方の称で、江戸では名題(なだい)と称した。上演に際しては看板に書かれることが多かった。漢字五字か七字に作り、数に合わせるためにこじつけた読み方をしたり、作字をしたりする。「浪花の顔見世狂言の外題と東都(えど)三座の道行所作事の外題の附かた(所謂常盤津清本富本のこと)は祝ひの語を置き、或は其一座の首領(さがしら)又新参俳優(やくしや)の表徳などを組合せるを趣向とすれば」(雲錦隨筆・四)

◆今業平牛飼車三番つき。井二大尽の鼻毛は長岡の通路。附たり大夫が花の流れ河は音羽の山さくろ。浮世草子に「今なりひら物語」(元禄二年刊)がある。また、合巻に「今業平面影(いまなりひらむかしのおもかげ)」(幕永三六刊)があり、この他業平のつく江戸期の小説・演劇作品としては『業平赤烏帽子』(浮世草子・正徳六年刊)、『業平東下向』(脚本・宝暦八年初演)、『なりひら一代記』(古浄瑠璃)、『なり平うた念仏道行』(浄瑠璃宮古路)、『業平男今様井筒』(浄瑠璃・宝暦六年初演)、『業平河内通』(浄瑠璃・歌舞伎狂言、元禄七年)、『業平昔物語』(浄瑠璃)等がある。なお、『業平』(長岡)「音羽」は「熊野」に出る語。

◆鼻毛が長い 「鼻毛が長い」を掛ける。「鼻毛が長い」は女の言いなりになるまい、馬鹿にされる女。「けしきみ」に「ながきもの」すべてけしきい買ふ人はなけ」とある。「とかく女郎のするほどの事がおかしく見ゆるも、客の鼻毛のながいゆへなり」(好色万金丹・三・三)

◆狂言 歌舞伎狂言。芝居のこと。「今まで心中して死で狂言にいださるるほどの事は、すべて上方に多しといふに」(ひとりね・下)

◆惣芸古 歌舞伎・操り芝居において、初日の前日に行う最後の稽古。歌舞伎役者は衣装をつけず、小道具も使わずに演技をつける。操り芝居では、人形遣いが平日の姿のままで人形を遣う。原則として初日どおりを演ずるが、長い台詞はこのときは省略することもある。なお、この日から稽古を見るために棧敷が一般に開放され、見物衆が殺到したことから、この日のことを「大いれ」ともいう。芝居の場合に従つて、稽古所(けいこじよ)などで、発表の前に当日同様に試みる稽古をもいう。惣漫(そうざん)とも。「あい手なしのひとりげいこ、やうくおぼへるにじぶん、惣げいこのまへかたに、太夫本にてあい役者と立あい」(役者口三味線・京)「初日の前日おはやし浄るり打揃てけいこする。是を惣げいこといふ」(絵本戯場年中鑑・下)「本よみけいこ、惣稽古の混雑はまた後編の事」(楽屋方言・五)

◆檜木舞台 檜(ひのき)で床を張った立派な舞台。一流の大劇場。「かねてもよほすひの木ぶたいもじやうじゆし、けふこそ愛をはれの能」(傾城酒呑童子・四・五)

◆棧敷 劇場の土間(どま)に對して、一段高くなつた高級見物席。土間を取り巻いて三方にあり、東十五間、西十六間、向(むこう)九間計四十間が大劇場の定式であつた。それぞれが上棧敷(うはさじき)、下棧敷(したさじき)と二層式になつてゐる。「棧敷(さじき)も下も声くに暫鳴もしづまらず」(根無草前・二)

◆不動の像に観音 不動は不動明王の

略。不動明王は五大明王の一。大聖威怒王ともいい、その像は、忿怒の形相をしている。観音を吉野に円山を不動明王にたとえたもの。

◆同座 「観音も同座あり」(熊野)による。同じ座席を占めること。「Doza」おなじぎ(同じ座敷、または、座敷の同じ場所、または、同じ席)「目ボ」お侍方と同座のならぬ奴(やつこ)めが「近松・心中宵庚申・上」

◆東西く 呼び声。相撲場・劇場・見世物・街頭などで、群衆に向って口上を述べる者が聴衆を静めるために発する。「トザイ、トザイ」と発声することが多い。また、「ザイ、トザイ」のようにも聞える。「東西くいづれも御しんべうにござりませ」(難波の兒は伊勢の白粉・二)「是も御はなしのたねと存、則序に一幕御目にかけ、東西東西」(咄本・新作落咄馬鹿大林(寛政十三年)・序)

◆頭取 芸能・相撲などで、全体あるいは一分野で音頭を取る有力な人。音頭取り。歌舞伎芝居での楽屋頭取(がくやとどろ)。「三良四良は今に病中しかくとなけれども、夢路を行き踏はく心して仕組もうかくと定めがたく、頭取(とうどり)に断りいひて帰るさまに」(風無常物語・下・三)「先しなれる迄は、さのみいしやうのいらぬ役目を頼と、頭取にさゝやけば、さすが一座の頭取ほどあつて、我無芸なるを心得」(役者万年暦・京)

◆つらりと 端から端まで。全部。「此浅鍋を以て朝夕の供御を調へ、上から下に至るまでつらりと進上申」(狂言・鍋八挺)「いかい御造作(さうさ)与次兵衛様 あづまさま皆様つらりとつかひ立た、お暇申と立出る」(近松・寿門松・上)「ここはひとむれ老人客つらりと居ならび」(咄本・落断笑富林(天保四年刊))

刊)

◆大夫本 芝居・興行などの責任者。実際の興行の運営に携わる者を座元というのに対し、法的に興行の全責任を持つ者をいう。主として江戸における呼称。上方では近世初期にのみ用いた。江戸では元禄(一六八八〜一七〇四)以降、座元と大夫元は同一人物が兼ねたので、混用することもある。「雨の日は河原の太夫もと隙なる野郎めしつれ御見舞申もはてぬに」(西鶴俗つれづれ・四・二)「千秋楽：重年の役者又は他の芝居へ出る役者各太夫元と一札の盃事あるよし」(劇場訓蒙図彙・一)

◆惣座中 「座中」は芸人などの仲間。一座。一座全体。「釜入の段になりては、最良の眼子の事ゆへ、惣座中の鬼の目にも涙をこぼし、鬼神は勿論、娘鬼杯は大声をあげて泣」(咄本・新撰勧進話(享和二年刊))

◆代僧 本来は代理の僧であるが、ここでは、代表くらいの意。
◆役にさゝれて 役目に指定する。屋久につかせる。「花守の役にさされてかり烏帽子」(俳諧古選・附録)

◆片言まじり 「片言」はなまりないし流暢でない言い回し。「柘榴(ざくら)をみて、ひとりはずさくろといふ。ひとりはずさくろといふ。あらそひ、つみにやまず。あたりのものしりにとひければ、二つながらかたことなり。にやくろといふが、ほんの事」(咄本・醒睡笑・四)「吉蔵・三助がなりあがり、銀(かね)持になり：むかしの片言(かたこと)もうさりぬ」(永代蔵・一・三)

◆くはちくく 拍子木を打つ音。
◆幕をきれば 「幕を切る」は物事を始めること。「新撰大阪詞大全」に「まくきる くちびらきすること」とあり、芝居の切幕(きりまく)を明けることから

いう。「おぬしの計らひで幕を切りやれ」(千代始音頭瀬渡・三立目)

◆だんじり 歌舞伎の演技と音楽の一。祭の練物である「だんじり」の影響を受けて成立したもので、丹前(たんぜん)と六方(ろくほう)の一種の、大阪での称。嵐三右衛門家の家の芸で、宝永(一七〇四〜)ごろ三代目の演じた「だんじり六方」が有名である。また、祭礼の場面で見られる下座(げざ)音楽も「だんじり」という。「歌舞伎事始・四」に「江戸にては六法を丹前といふ。其出立時々によるべし。また大坂のだんじりは高股立を取、振いだす也」とある。「藤内五人に五ヶ国の御加増、御ほうびだんくくに、だんじりうつてはやした」(近松・雪女五枚羽子板・下)

◆六法 歌舞伎の演技用語。手を大きく振り、足を大きく踏み結めることを基本とする動作。したがって「六方を振る」「六方を踏む」という。前へ進むときは、右手と右足、左手と左足のように、手と足と同じ側を出す。これを「なんば」という。動作の型により、飛六方・丹前六方・狐六方・片手六方・泳ぎ六方・回り六方などの名称があり、種類が多い。江戸では「丹前(たんぜん)」、大阪では「だんじり」ともいう。「跡目の六法さりとては御親父のすきうつし」(役者大鑑・二)

◆嵐三右衛門とみに死せしをきく 六法のあれやそれやといふ間もあらじ。はつあつめたるうなつしぬれは」(狂歌どみやま・下)「江戸にては六法を丹前といふ。其出立時々によるべし。また大坂のだんじりは高股立を取振いだす也。京にては羽織着ながしぞろりとして六法を、ふりいだす也。是嵐三右衛門の風也」(歌舞伎事始・四)

◆しやぎり 歌舞伎の下座音楽の一。開幕の直前と各幕の終りごとにはやす、形式的なもの。ただし、大切(おほぎり)の際は「打ち出し」となる。「幕をしめると直に太鼓・笛にて囃すをシヤギリといふ」(絵本劇場年中鑑・中)「トチヨンくくくくトきざみ拍子木にて幕引く、直に笛と太鼓のシヤギリしばらくしてうちあげると」(鶏が啼東都曉・上)

◆ふかせ 大きく鳴らす。
◆来序の太鼓 歌舞伎の下座音楽の一。狐の出入りや、狐の変化(へんげ)がにわかには正体を現すときに用い、また、狐になむ曲目・歌詞・役柄にも用いる。大小鼓・太鼓・笛を用い、「どろどろ」を伴う。「丁稚提灯とほし、二三人は入、すこし仕出しあつて、らいじよに成ル。狐一足飛び出る」(契情鸚鵡石・序中入之上)「花道両脇へ狐火(きつねび)すさまじく出る。立廻りどろくらくらいじよ有」(曾我我松山・六ツ目)「らいじよ狐場につかふ」(劇場訓蒙図彙・三)

◆大ふり袖 袖丈の長い振袖。袖の長さは時代により異なり、貞享(一六八四〜一八)のころ二尺ほど、享保(一七二六〜一七五)期において二尺四、五寸ほど、宝暦(一七五〜一七九)期において三尺近い長さであったという(近世女風俗考)。「奥上臈の中にも梅垣どのと申て、都より吟味をあそばしおかせられたる、大ふり袖をくだされ、是はくとい興をさましける」(織留・三・二)

◆丹前 歌舞伎で歩く姿を様式化した芸態の名称。長い白柄の小巻、巻羽織(まきばおり)、深編笠という扮装で、なんばんといわれる特殊な手の振り方、足の踏み方、丹前詞といわれる特殊なせりふで代表される。六方(ろくほう)と同種のものであるが、六方との相違は明確でなく、やがて六方に吸収されてゆく。「にせ若衆事古今無双、丹前のふり出し外にるいなし」(役者節用集)

◆立役者 一座の中心となって活躍する芝居の役者。「たてやくしや」とも。「されど立(たて)役者の意につれまいと思ふても、我しらず氣を求るゆゑ」(滑稽本・客者評判記・中)「大達者、立役者、本三尺といふ。紋看板に出す」(賀久屋寿々免・二)

◆村雨にさくら花のちりかゝる氣色「俄かに村雨のして花を散らし候ふはいかに」(熊野)による。

◆かつらの橋柱「寺は桂の橋柱、立ち出でて峰の雲」(熊野)による。

◆たてもの 仲間うちでの中心人物。特に、歌舞伎の一座の中で中心となる幹部役者。そのうちの最高位の者を大立者(おほだてもの)という。「荻野屋の八重桐とて太夫中間の立者と。いはれし程の全盛(ぜんせい)の末もと」(近松・堀山姥・二)「寛永より元禄年中までの至極上手名人と呼ぶ、立者(たてもの)の分は、悉く其風体を絵図に頭はし」(歌舞伎事始・凡例)「若衆方の立者は若女形より高給銀也」(芸鑑)

◆立出峰の雲花やあらぬ初ざくらの祇園町の風でなし「立ち出でて峰の雲、花やあらぬ初桜の、祇園林下河原」(熊野)による。

◆大尽擁護「大悲擁護の薄霞」(熊野)のもじり。「擁護」は仏法を守護する意の仏語で、神仏など尊く靈力あるものの加護をいう。ここは、お大尽の取り巻き連中のこと。

◆やつちや 人を褒めるときなどに発する掛け声。役者の芸などを褒めることばとして用いることが多い。やんや。やつちややつちややつちやと褒(ほ)める歌より褒(ほ)めさする」(近松・女殺油地獄・上)

◆稻荷山の薄紅葉……あをかりし葉の秋

れはて「稻荷の山の薄もみじの、青かりし葉の秋また花の春は清水の、ただ頼め頼もしき、春も千々花盛り」(熊野)による。酒で赤く塗っていた田山の顔が蔵人の登場で青ざめたさま。稻荷山は伏見稻荷の背後にある山。

◆くるまどめ「はや程もなくこれぞこの、車宿り 馬留め」(熊野)による。

◆にはかにさます興かく堂 興かく堂は「熊野」に「経書堂はこれかとよ」とあるのを利用した。「経書堂 三年坂の上」にあり、真言宗なり。来迎院と号す」(花洛名勝図会・三)

◆おりみの衣はりまがた、しかまゝと「こより花車、おりみの衣播磨湯、飾磨の徒歩路」(熊野)による。

◆暫く 江戸の荒事(あらこと) 歌舞伎の演出の一。善良な武士や女性、悪人の公家や武士の迫害にあうとき、英雄が「しばらく」と声をかけて花道に現れ、「つらね」を言い、悪人を懲らしめる筋を荒事で演ずる。近世は原則として顔見世興行の一番目狂言の三立目(序幕)に置く慣例であった。元禄十年(二六九七)正月江戸中村座上演、初代市川団十郎自作自演の『参会名護屋』に起り、顔見世興行に定着したのは、正徳四年(一七一四)。

◆ちくとなばかり ちよっとだけ。少しだけ。奴詞の一種。「売増坊主(まいすばうず)が行力にてちくとな計朝比奈が、腕さきにて縛て見よ」(鎌倉三代記・一)「ちくとなばかりやつがれが、舌のまはらぬ誉ことば」(歌舞伎年代記・二)

◆清水寺の鐘の聲。所行無常のこゑやらん。盛者必衰の下戸なりしが。色ゆへめつきり上戸となる。仏も本はばんさまのなかばは雲に上を見ぬ。驚くまたかと慾つよく。流水によって香ひをかき雲をへ

だて、風聞はやし「清水寺の鐘の聲……諸行無常の聲やらん……生者必滅の世の憤らひ……半ばは雲に上見えぬ、驚のお山の名を残す」(柳上に驚飛ぶ片々たる金、花は流水に随つて香の来ること疾し、鐘は寒雲を隔てて聲の至ること遅し)「熊野」を利用した行文。下戸のくせに大夫吉野に狂つて酒を飲むようになった田山をからかう言葉。

◆おとな 長老・宿老の意。年輩でももだった者。年功を経て経験があり、重きをなしている者。「家のおとなの若狭守出合て、座敷に請じ」(咄本・醒睡笑・二)

◆出端 歌舞伎で、重要人物が舞台へ登場してくるときの特種な動作。登場を際立たせるための、淨瑠璃・囃子・所作などを伴うことが多い。その人物の性格、立場などや場の雰囲気を表すのに役立つ。「着おろしの長袴足もと定兼(さだめかね)、品之丞が出(で)はのうたに人なみに頭をふつて間をあはすこそおかし」(二代男・三・三)

◆草木は雨露のめぐみ。養ひ得ては花の父母たりと申すが「熊野」の「草木は雨露の恵み、養ひ得ては花の父母たり」をそのまま引用した。

◆何とやらんこの春は年ふりまさる朽木桜。心ばかりの「なにとやらんこの春は、年古り増さる朽木桜、今年ばかりの花をだに、待ちもやせじ」(熊野)による。なお、これは、熊野の母親が病氣なので見舞つてほしいと熊野に訴えた手紙の文面。

◆ねまのとき 寝室での夜の相手。「かにも待(は)べり」(馬琴・高尾千字文)◆御こと葉をかへせばおそれなれども、花ははるあらば今にかざるべからず。是はあだなる玉の皿の「おん言葉返す

は恐れなれども、花は春あらば今に限るべからず、これは徒なる玉の緒の、長き別れとなりやせん」(熊野)による。

◆せんぎもくらし 詮議する能力がない。判断力に欠けている。「小四郎が訴状、よく当代をせんぎくらしと見立しな」(曾我会稽山・五)

◆拝領 主君・貴人などから物を頂くこと。頂戴(ちやうだい)より重い語感があり、子孫に伝るほどの物を賜る場合にいう。「白河の法皇様より、拝領の物といふて出したらはめつきりと大金に成ませふ」(南嶺・忠盛祇園桜・四・三)

◆さげ重 提重箱。「人を見るをまかはず、提重(さげじう)のふかきにて酒呑かはし」(西鶴・男色大鑑・五・一)「上棧敷二軒に提重(さげじう)吸物茶弁当、行かれずにするは、おのくは何とも思はれまい」(其碩・禁短氣・六・三)「善も悪も打渾だ花見のさげ重」(南嶺・今昔出世扇・四・一)

◆こゝへよせよとて、「是も思ひの棧敷の内、はやお帰りとすむれど、心はさきにゆきかぬ。足よは車のちらなげに」(牛飼ひ車寄せよとて、これも思ひの家の内、はやおん出でと勤むれど、心は先に行きかぬ。足弱車の、力なき花見なりけり」(熊野)による。

◆中道寺の町の口 中道寺は京都府北桑田郡京北町上中小字制札にある寺。真言宗大覚寺派。南光山と号す。本尊は十一面観音像。

◆老若男女貴賤都鄙いろめく花衣、袖をつらねて「老若男女貴賤都鄙、色めく花衣、袖を連らねて行く」(熊野)による。

◆名にあふ 有名な。名高い。「名に負ふ春の気色かな」(熊野)。

◆あひ方 特定の客の相手に選ばれた遊女。「あひかたの女郎、かなしひかほを

して、めそ／＼なひて居るを」(咄本・
蹠の掛金(寛政十一年))

◆野郎 野郎歌舞伎の役者。

◆河原おもての芝居 四条河原の芝居。

◆よつてつく ここは、以通うの意。

◆そもじ 「そなた」の文字ことば。対

称。本来女性語であるが、のちには、男性が女性をさして用いることもある。「身づからは青柳の糸、そもじさまは春風に御入候はんと思ひ置き参らせ候」(伽・をこぜ)「とかく申かねて候へ共、そもじは隠居して給はれ」(昨日は今日の物語・上)「孫を殺したそもじの胸はりさくやうに有ふのふ」(日高川入相花王・三)

◆浴人 湯女のこと。

◆おもひ内にあれば色外にあらはる こ
とわざ。どんなに隠しても、思っている

○巻三之十二

○村雨がして大夫をちらし候

【梗概】

父円山から吉野大夫を奪い取った蔵人は、自分の屋敷につれていって、友仲なきあとこの国をあずかるのは自分であるからと盛んに吉野に言い寄るが、吉野はなかなか言うことを聞かない。また、家老の飾磨三郎左衛門にも連判状を見せて、自分の側近たることを要求する。三郎左衛門は加古川右近の名があることや、連判状の趣旨が書かれていないことを確認したうえで、血判をし蔵人を安心させる。そのうえで、中国の美女西施の故事を引きながら、女性のために国をほろぼさないようにと忠告し、吉野を自分の屋敷に引き取ることに同意させる。吉野は三郎左衛門の屋敷へ行けば友仲に会わせてもらえることを期待していたが、案に相違して、三郎左衛門からすべての原因は吉野

ことは自然と顔色に出てしまうことをいう。「渾干汾曰く、思ひ内に有れば、必ず外に形る」(孟子)が典拠。「げにや思ひ内にあれば、色外に現はる」(熊野)による。

◆国遠 遠国に出奔すること。故郷を離れて行方が知れぬこと。「それより佐太右衛門は国遠(こくえん)して、丹後の宮津に重縁あつて、身を隠しぬ」(西鶴・武道伝来記・三・一)他

◆ないじやくり 「なきじやくり」の転。泣いてしやくりあげること。激しく泣いて息を吸い込む状態。「泣(ない)じやくりにて手のつかぬ皿」(俳諧草むすび)「お前計が心中だてわしには不心中者といふ名を残さんせとやとないじやくりするを」(役者文相撲・江戸)

◆友仲様にあふ事もなみだにむせぶばか

りなり「あふことも無く」と「なみだ」が掛っている。

◆山外に山あつて山つきず 「山外に山有つて山尽きず」(熊野)による。「熊野」の行文は『断腸集之拔書』の詩句によつたもの。

◆家中に悪人多して極りなし 「路中に路多うして路窮まりなし」(熊野)のもじり。

◆余念なく 他の事を考えず、一つのことに没頭しているさま。「余念なく見とれるて」(其磧・都鳥妻恋笛・一・三)

◆いやでもおうでも 不承知でも承知でも。何が何でも。「是からは、いやでもおふでもよひ所へありつけてやらふ程に」(狂言・猿座頭)「露の情はいやでもおふでも」(大坂独吟集・意案)「いやでもおうでも」丁の字に宇冠をさせずハ、ね

にあると決めつけられる。こうなつては若殿のため死んでもらうしかないと言われ、遺書まで書かされたのであった。

花前に蝶舞ふ紛々たる雪と、歌舞妓の慰みもきへはて、円山は子に恥とちこもり

て対面なく、蔵人はそれにまはらず吉野にのぼり詰めて、いやといふを無理にのり物へおしこみ、われも一所にのりしは、花見の車同車にてといひ伝へしに異ならず。蔵

人屋敷へいざなひければ、御掃国の悦びとて一家中相つめ、ひとへに国主とてはやせば、饒間三郎左衛門出仕し、

「友仲様御国遠の上は、御前より外この一国を治め玉ふ方外に是なし」

と、三方からは千代のことぶき申し上げれば、蔵人はくはんと菌になをり、

「三郎左衛門、一国は身がおさむるには知れた事なれども、玉の皿に似せ物を持て上

んもなひ事きくまひといふ」(咄本・秋の夜の友(延宝五年刊))

◆あた 嫌悪の意味のある名詞や形容詞などに冠して、その気持の強いことを表す。「浪花聞書」に「あた(あためんどうあた邪魔などいふ助辞也)」とある。「汝にたたらされてあた骨折りつるよ」(小松軍記)「五十両にたらぬ金、あたがしましういふまいと」(冥途飛脚・上)「狼藉千万んあた無作法なあた不行義と」(忠臣蔵・三)「あだぶ作法な」(伊達競阿国戯場・六)

◆人楽み人愁ふ是皆世上の有様なり 「人楽しみ人愁ふ、これ皆世上の有様なり」(熊野)による。こゝも「熊野」は『断腸集之拔書』の詩句によつたところ。

京とは氣違ひく、まことの血はその方外にかくし置しか、友仲方へつかはしたるか。

サアくかくさずとも聞きたい」

とあれば、

「ハア是は存じもよらぬ仰せで御座ります。血ゆへに腰元藤と申す女をころし、その霊のこつて井の内より」

と皆までいはず

「ふるい。れきくの名将勇士が無念なる死を遂てさへ、その打たる者にあたはなしがたし。いはんや、こしもと風情の女の一念とはうけとらぬ。コリヤ出なをしめされい。今時はかぶき浄るりの趣向にもあまい事は請とらぬ。右近源左衛門時代の狂言の仕うち、サア血はどつちへかくせし」

と、さのみいかる跡をも見せず、盃扣へて問つむれば、三郎左衛門わきざしぬひて、
「破て仕廻たる血に御疑かゝれば、申しわけとは是より外はない」

と、腹きらんとするを、藏人おさへて

「ア、はやまるまい。見届た。血はかくさぬにきはまつた。まこと春前に雨あつて花のひらくる事はやしといふが、親共が悪心が身が運のひらき時となつた。三郎左その方をうたがはぬといふしに、恋こがるゝ吉野をその方にあづくる間、この吉野をおとりにして、友仲をつりよせ討てする思案をめされい。友仲がいきのこりては、一国をとりてもねざめがわるい。親田山殿はうまれ付ての、我まゝものなれば、この相談はきかすべからず。サア別心なきといふ連判状血判」

と差いだせば、三郎左衛門きよつとせしが、披ひて見るに巻頭には加古川右近、

「かればかりはかゝる悪事にくみする者にあらず。扱ははかりことの連判よな」

とうなづき、だんく見れば、三十人ばかり血判をならべたり。しかるに何の文句もなく白紙にて、

「右のをむき相そむかば武運につき、大小の神祇の御罰をかうふるべき」

との留書。さしもの三郎左衛門も不審はれず、

「この白紙の心はいかに」

と問そふなる顔色を見てとり、

「善にもせよ悪にもせよ、身が心にしがふ心からは、白紙なりとも連判せまい筈がない」

と、のつ引させぬ云ふん。あとへも先へも行光の小わきざしぬひて左の中指をつき、血判名をかき添筆の命毛おしきゆへに、武道をすてしと人のわらふもいとほこそ、藏人を殿様あしらいにうやまへば、藏人勝にのり光の刀を引ぬきあたへけるうへ、

「其方は一国のたばねをする名家。向後は万事其方へまかする上は、身が一国をおさむるに付て、心づきし事もあらば遠慮なく申しくれられよ」

とあれば、三郎左衛門眉をしかめ、

「むかし越の勾踐の寵愛の妃。西施と申すを呉王夫差にあたへて呉国程なく亡びし故、西施は越へかへりしかども、范蠡といふ忠臣呉王の亡びたまひしも色ゆへなれば、我主君越王も是にまどひ給ふてはいかと、かの西施を申しうけて立のきしためしをもつて見れば、友仲殿へ心中ぶかき契情あとにのこりし段、其意得がたし。其うへ

加古川右近物語にて承れば、明石梅軒が倅貫左衛門とはふかき中。その貫左衛門が縄かけてつれ来り、御隠居田山様の、御目にとまる様にあてがひおきし証拠あらはれたる故、貫左衛門が首は御打なされながら、女ばかりたすけ置いて何の御せん儀もなく、御てうあいと申すは、ひとへに色に目が見えぬからの義。しかるに御前に是を押取にもらひ給ひては孝行にもはづれ給ふべし。只かへすくも御ためと申すはこの事。右の女は拙者にくだし給はるべし。幸婦妻なければ范蠡が跡を学び候はん」といへば、藏人も道理にせまり。さまぐにくどひても帯紐とかぬ美人は、焼物で作た饅頭も同前と、

「いかにも望にまかすべし」

と、呼出してひきわたせば、粹な心から三郎左衛門真実女房にせぬ心を推して、何のしなづなしに頼む命はしら玉のまるいあいさつして、

「今は加様に候へば御いとまを給り候はん」

といへば、藏人もあざをにぎつて居ながら、四そろをくづされた様なかほつきして、離山きうの秋の月夜に釜ぬひてゆくかと、名残惜めど、三郎左がおためごかしに、ちからなみだを見せぬ盃さしづめ、大夫が「おさへやす」といふたことは花の驚あふ事も涙をかくしかねにけり。三郎左衛門も御為とは申しながらと万事「あ」とはいはず。盃と諸ともに大夫が手を引我屋敷にぞかへりける。

側につめあはせたる侍どもうら山しがり、

「たゞかれて忠になるもあり。主の名代にふるまひに行て忠に成るもあり。主君をたゞいたる弁慶も、あら炭をのんで嘔になりたる子譲も、忠といへばひとつくちなれ

ども、結構な刀をもらひ美人の大夫を拝領して、それが忠になるとは」

とさはめけば、藏人目に涙をたて、

「身が心をもしらで、何をぬかすぞ」

としかられ、忠の事は扱おき、鼠のこゑもひそまりぬ。

是はさて置、三郎左衛門は大夫をつれてわがに帰り、家内の者どもを遠のけ一間

へともなひ、

「大夫どの、是まではさぞ気がねで有りつらん。追付わか殿友仲様にあはせませふ」

といへば、

「わしも大かたそうであらふと、おまへの所へくるのは外へゆく様になふて、いかふうれしかつた」

といへば

「サア若殿様にあはさふほどに、そちらむいて念仏」

といへば、

「わるじやれな事いはずともはやふあはせて下さんせ」

とせけば、

「尤く。様子を申しさすべし。若殿様には何ゆへの御流浪とおもはつしやるぞ。皆こなたのこのうつくしい顔からおこつた事なれば、首うつて難波へもたせやるべし。

契情の首も地女の首も生地よひのを、うつくしうさへ仕立ればかはる事はない物なれども、契情故には家國をもうしなへども、御姫様ゆへに家國を失ふたといふ事は、昔から芝居の仕組にもない事。なぜといふに、地女は地を失つてもつてゆくゆへ、是

がまことゝはつきりと男をなかつ際限が見へぬに、契情はうそを地にしてみたつた一所づゝ是はといふ実を見せて、六尺ゆたかな大丈夫にも、ほろりとなみだをこぼさずする事なり。是坂藤が口ぐせのうそのまことゝふるい格なれども、何とやらし給ふべし、穴賢々々とよみあぐるお書とこの手にては、なかぬが世間外の様になりしと、若殿に付てゆきし御近習衆の咄で聞きたり。さすれば首はあはせ申すべし。物いはするといかにこりはてゝ、つゝしんでござる若とのでも、豆腐へ鶏卵をわりこんだ様に成りて、とりわけにくひはしれた事なるべし。こなた契情町では大夫様とうやまはれ、品によつては若殿様のみだい様ともあがめらるゝ人なれども、この三郎左衛門が眼からは太六天の魔王と見ゆる故、昔の西施が故事は蔵人へ申したではない。友仲様への志、布袋和尚も禅寺では本尊のかたわきにたてゝおがめど、水滴にする時はつかへもせぬ肩に穴をあけて、水がみなになると硯石へ打ちあてられ、肩もあたまもくはつちくといはせ、『これ水入れて来い』と関口流に六七間とつてほられ、敷居にあたつてみちんになれば、はき溜へすてられ、本の土には帰れども、布袋めで足ついでのかたといふは、ふむさへあるにあまりなる事と思へど、是信ずると信ぜぬの界にあり。この三郎左衛門生れ付て色事不得手。京の柴崎林左も大かた手まへを形

◆村雨がして大夫をちらし候 前述の「とく」熊野に拠つた表題であるが、こは、急に状況が変わつて大夫を死なせることになつたことをいう。

◆花前に蝶舞ふ紛々たる雪 「花前に蝶舞ふ紛々たる雪」熊野本文は、前出『断腸集之拔書』の詩句が典拠。ここでは前段の歌舞伎の舞台を象徴する表

現。

◆のぼり詰て すつかりのぼせ上がつてしまふ。熱中して有頂天になる。「此已前世にうたはれし山本は、この山本のぼりつめぬか」「西鶴・難波の兄は伊勢の白粉」「外のお客は嵐の木の葉でばらばらばら。のぼりつめてはお客にも女郎にも得手怪我の有物」(近松・心中天の

に致して狂言するとうけ給はつた。その眼から見るによつて、生をひては若殿様の迷ひのたね。御立身のさまたげゆへ首を討」

といへば、大夫はわつとなき出し、

「皆道理すくめのたとへ事、日中は午の刻、夜中はいつも子の刻と、むかしからさだまつたるあふはわかれの道ながらも、せめて書置はしたゝめさせ、友さまへとゞけて下さんせ」

と、硯ひきよせふたをとれば硯に紙もなかりしかば、かきつけしはながみを口にてとりて筆とるを、

「さいこの一通あらためてかゝるべし」

と、料紙箱取り出せば、

「とても世界に神仏はないものか。一度はなぜそはせては下さんせぬ。日親様きこえぬ」

と、正躰さらになかりけり。

三郎左衛門は、もはや夜もふけ、あけゆく窓の山見へて、花を見つる心になり、刀の目くぎくいしめし、やがてくびうつ名こりかなく

網島・上

◆花見の車同車にて 「花見の車同車にて」(熊野)。

◆かはらけ 素焼きの杯。酒を飲む器。「ちやんぬりのかはらけ仕出して世にうれども」(世間胸算用・五・二)

◆千代のことぶき 「熊野」に「千代もと祈る」とあるが、これはいうまでもな

く『伊勢物語』八十四段の和歌を利用した箇所。

◆くはんく と 「桓桓」ならば、威厳のあるさま。「寛寛」ならば、おうようでゆつたりしているさま。「寛緩」(緩やかでおうようなさま)「緩緩」(ゆつくりといそがないさま)等の可能性もあるが、次の蔵人の言葉からみて、「桓桓」をあ

てておく。「百官押靡け、自然と我を高御座。桓桓と見下して」(浄瑠璃・撰津国長柄人柱)

◆菌 すわたり寝たりするとき、下に敷く敷物。使用により方形または長方形で、多くは布帛製真綿包みとし、時に蘭の筵や毛織物の類を入れ、周囲を額と称して中央とは別の華麗な布帛をめぐらすのを常とした。「秋は春の案じ置きもせず、油草(ゆたん)一つを茵(しとね)にして」(浮世草子・好色万金丹・四・四)

◆なをり 定められた場所にきちんとする。正座する。「班女はしとやかに座になをり」(其磧・都鳥妻恋笛・巻五・一)

◆氣道く ころは「よく気がついた」とほめていうところ。

◆血ゆへに腰元藤と申女をころし、その霊のこつて井の内よりと 巻二の一参照。

◆あたはなしがたし 「あた(仇)をなす」は恨みに思つて仕返しをする。「きつねと云ものは、あたをなせばあたをなす。恩を見すれば恩をほうずる」(狂言・釣狐)

◆ふるい 古くさい(言い訳だ)。「爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に。ア、是れ。そりやあんまり。子供もした昔咄ふるいふるいふるい」(浄瑠璃・ひらかな盛衰記・三)

◆女の一念 「女の一念岩をも通す」の略。女の執念ぶかいことのとえ。「イヤ渡さじと女の一念。若(もし)や白旗平家へ渡らば末代まで源氏は埋木」(浄瑠璃・源平布引瀧・三)「サア女の一念といふものはこはいものじや」(咄本・新選躰の宿かえ(文化九年刊))

◆うけとらぬ 承知できない。納得しない。「私事、当年三十九に罷成る」と

いふ。いづれも合点せず『いかにしても、三十九、四十にしては請取がたし』(西鶴・日本永代蔵・三・五)「よくよく理詰の突らしき事にあらざれば合点せぬ世の中、むかし語りにある事に、当世請とらぬ事多し」(難波土産)

◆あまい なまぬるい。手ぬるい。「あまいやつ、じろりと見た目にほやりと笑ひ」(近松・平家女護島・三)

◆右近源左衛門時代の狂言 若衆歌舞伎時代から野郎歌舞伎時代にかけてその艶色をうたわれた上方の名女形。月代をかくすため額にかぶる紫帽子の置手拭いを考案した。「かづらすがたや右近なるらん」(桃青三百韻)「女がたもむかし右近左近が時は、面影は、まぎらはしく」(西鶴・男色大鑑)

◆仕うち 舞台でのしぐさ。演技。「精をだすといふは、ねても覚ても、仕内を工夫し、稽古にあくまで精を出して、扱舞台へ出では、やすらかにすべし」(役者論語)「俺が思ふ通りに」(爺様(ととさん)といひ)『娘の仕内』(歌舞伎・韓人漢文手管始)

◆さのみいかる鉢をも見せず 前に「蔵人殿は円山殿とは格別の様におもひしに云々」とあった。

◆扣へ そばに置いて。控えて。「ひかゆる 扣・控・停」(書言字考)「其身はたばこぼんひかゑゆうく寛々たる所へ」(軽口腹太鼓)

◆春前に雨あつて花のひらくる事はやし 「春前に雨あつて花の開くる事よし」(熊野)。「こも前出『断腸集之抜書』の詩句を典拠として利用しているところ。

◆連判状 同志の者が自署し、印判ないし血判を押した誓約書。謀反を企てる一味が、意志統一を確認するために作製するもの。「熊川源五兵衛秀景逆意(ぎや

くろ)一味の連判状」(浄瑠璃・伽羅先代萩・八)

◆血判 起請文、誓詞などに違背しない意を示すため、指を切り血を出して、署名の下に押すこと。また、その押したものを、室町中期ころから武家社会で見られ、戦国時代には盛んに用いられた。江戸時代、新たに役職に任ぜられたときなどに提出した誓詞には必ず行われたが、次第に形式的なものとなった。けつばん。「此方より和睦を破り、血判を反故にして」(浄瑠璃・鎌倉三代記・二)

◆留書 本来は、手紙の末尾に添える「敬具」「草々」の類をいうが、こころは、文末の断り書き。

◆のつ引させぬ のがれられない。「跡は拙者が胸に胸にひらさら一筆あそばせと、床の硯の墨摺り流しのつびきさせぬ入性根」(近松・双生隅田川)

◆あとへも先へも行光の小わきざしぬひ 「あとへも先へも行光の小わきざしぬひ」といふは、動きがとれなくなり、途方にくれる状態。進退きわまつたさま。「さらばといへども跡へも先へもゆかず、見るに笑しく」(西鶴・好色一代男・六・六)これに、「行光の小わきざし」を掛けた。「行光」は刀工の名と思われるが未詳。あるいは創作か。

◆中指 「色道大鏡」に「血判の法は、血を紙におし付くるを思む。血を出す指、男は左を用ゆ、女は右の中指又は無名指を用ゆ、是二流なり」とある。

◆命毛 筆の穂先の長い毛。書くためにもっとも大切な部分であるところからいふ。「雲落(あぶな)物に筆の命毛」(西鶴・本朝桜陰比事)「命」が惜しいに掛けている。

◆殿様あしらい 主君のように奉つて。「勝にのり光の刀」「勝に乘る」は、図に乗る。調子に乗る。「おのれはかつに

のつて、そのつれな事をいふか」(狂言・髯槽)「のり光」は、則光で、実在した備前国の刀工。「貞丈雑記」三に「刀の銘に菊の紋ある事 人王八十四代の天子後鳥羽院の御時に、則光(備前)貞次(備中)……などと云ふ名高き鍛冶のたくみ十二人をえらび、十二月に分ちて院内に番を勤めさせて刀を作らせられ」とあり、「別所長治記」(神吉の城攻)の条にも「重代の打物備前菊一文字則宗二尺九寸ありけるを、右の小脇に引そばめ」とある。

◆むかし越の勾踐の寵愛の妃、西施と申すを呉王夫差にあたへて呉国程なく亡びし故、西施は越へかへりしかども、范蠡といふ忠臣呉王の亡びたまひしも色ゆへなれば、我主君越王も是にまどひ給ふてはいかざと、かの西施を申しうけて立のきしためし 西施は春秋時代の越の人。天下の美女と称され、越王勾踐(こうせん)の寵妃であつたが、会稽山の戦いに敗れたとき、彼女を呉王夫差に献じた。その結果、呉王は色におぼれて政を怠り呉の亡びる原因となつた。呉王の死後は、范蠡のはからいで、越王のものにもどらず、范蠡のところで余生を送つた。

◆其意得がたし 理に合わない。「此九太夫合点がいかぬ」『ヲヲ親父殿そふじやそふじや。此定九郎も其意を得ぬ』(浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・四)

◆其うへ加古川右近物語にて承れば、明石梅軒が伴左衛門とはふかき中 吉野が明石貫左衛門と深い仲であつたことは巻二の三参照

◆貫左衛門が縄かけてつれ来り、御隠居円山様の、御目にとまる様にあてがひおきし 巻一の三参照

◆証拠あらはれたる故、貫左衛門が首は御打なされながら 巻二の三参照

◆押取 むりに奪い取ることを強奪。「押取にしたら鞍なども、うたてげなるにぞ乗り給ひける」(保元物語・下)

◆婦妻 妻。「此金子才覚致してきたるものには、その褒美として、少知をとる者也共、一人のむすめ龍田を婦妻に得させ、頼政が智にせん」(其蹟・風流宇治頼政・一・一)

◆粹な心から 男の気持ちを敏感に察して。大夫であるから、こういう感覚は発達している。

◆何のしなづなしに 「しなづ」は「品図」で、いいぶん・文句・けち。何も文句を言わずに。「蒲冠者範頼卿、ぬるいお生れ、手柄がなさに義経公にしなづをつけ」(浄瑠璃・義経千本桜)

◆頼む命はしら玉の 「頼む命は白玉の」(熊野)による。こゝでは、「頼つてもその命がどうなるかわからず」の意。

◆まるいあいさつして 「まるい」は穏やかなこと。おとなしく挨拶して。「丸う捌いた男作(をとこだて)」(浄瑠璃・夏祭浪花鑑)

◆今は加様に候へば御いとまを給はり候はん 「今はかやうに候へば御暇を賜り東に下り候ふべし」(熊野)

◆あざをにぎつて居ながら 「あざ」には「蠟」の文字をあてる。天正カルタ、めくりカルタなどのハウ(提棒)の一の札。三皇(あざ、しゃこ、あおこ)の一つで、点数五十点に当る強い札。「あざをにぎる」はこゝから転じて、果報、利得の種を取り逃がさないように握り持つ。「日比はかるたがすきじやあつたが、ちやうど、ほとけ兒が、あざをにぎつたやうなといはれた」(咄本・軽口ひやう金房(元禄頃刊))「あざをにぎって押せ押せ、押しこめ乗こめ米俵」(近松・雪女五枚羽子板)

◆四そろ めくりカルタの役の一つ。四

枚同じ札がそろふこと。非常に強い役。「ほつこりと・御されアザさまヨソさま」(雑俳・万才鳥帽子)

◆離山きうの秋の月夜に釜ぬひてゆくかと 「離山宮の秋の夜の月」(熊野)の行文に、こゝを「月夜に釜を抜かれる」(明るい月夜に釜を盗まれる。転じて、はなはだしい油断のたとえ)を掛けた。「其合点はして居ながら、身の一大事をわすれ、いつも月夜に釜をぬかれ、借錢乞と無理の口論」(西鶴織留・一・三)

◆おためごかし 相手の利益をはかるように見せかけて、その実自分の利益をはかること。「必油断なされな」とお為ごかしに云ひ廻せば」(浄瑠璃・祇園女御九重錦)

◆ちからなみだを見せぬ盆? 「おさへやすといふたことばは?」

◆花の鶯あふ事も涙をかくしかねにけり 「老の鶯あふ事も、涙にむせぶばかりなり」(熊野)

◆たゝかれたて忠になる 誰のことか未詳

◆主の名代にふるまひに行て忠になる 同前

◆主君をたゝいたる弁慶 謡曲「安宅」や「勘進帳」もの芝居で有名な話。謡曲「安宅」の梗概は以下のとおり。ニセ山伏となつて逃避行を続ける義経主従十二人は、富樫の守る加賀安宅の間にさしかかり、弁慶は東大寺再建の勘進山伏と弁じたが、富樫は山伏の通行は許さないといい、そこで弁慶は即座に往來の巻物を勘進帳と偽つて読みあげ通行しようとするが、笈を背負つて強力に変装した義経が見咎められ、弁慶は色めく一同をおさえて杖で義経を打ち、関守を威圧する。危機を脱した一行が山陰に憩ひ、現在の不運を嘆いてると、富樫が酒を持参し、非礼を詫びてねぎらう。弁慶は延年の舞を舞い、酒宴に興を添えつつ一同

を促し、虎口を脱する思いで奥州へ下る。

◆あら炭をのんで唾になりたる予章 あら炭は堅炭の古い言い方(和訓栞)。予章は「予譲」と書くのがふつう。中国戦国時代(紀元前五世紀)、晉の智伯に仕えて寵愛された予譲は、智伯が趙襄子に殺されるや、名を変えて罪人となつたり、炭を身に漆を塗つて癩の姿になつたり、炭を呑んで唾となつたりして復讐の機会をうかがつたが、成功することなくついに自殺した。

◆ひとつくち 同じものの。同等。「鼠と蝙蝠とは格別のものなるを、一つ口に申さるる事、以ての外のあやまり也」(軽口もらいゑくぼ)

◆目に髪をたてゝ 眉を上げてにらみつけるさま。「互いに目に角立てゝの詰開き」(浮世草子・新色五巻書・二・四)

◆ぬかす 「言うのそんざいな言い方。いいがす。「何ぬかすやら」といふ顔。田舎なれば氣もつかず」(浮世草子・新色五巻書・二・一)

◆なふて 「なくて」の音便。「なうて」と書くべきところ。

◆いかふ 形容詞「いかい」の連用形「いかく」の変化した語。たいそう。ひどく。はなはだしく。「廓の女郎を廿六七になれば、いかふ古いものゝやうにいふは了簡違ひ」(浮世草子・好色万金丹・五・二)

◆わるじやれな ふざけた。冗談のように。「わるじやれな茶屋ぐゑい」(咄本・軽口あられ酒(宝永二年刊)・五)

◆生地 素顔。「わしが鏡で顔を見て木地はずいぶんよけれ、人がほれぬいな事と思ふたが」(近松・鍵の権三重帷子・上)

◆仕組 演劇、戯曲または小説などの組立て。趣向。「移変わる芝居の噂狂言のうま仕組(しぐみ)を実(まこと)に見

なし」(西鶴・好色一代女・四・一)「古風三右衛門ぬれ口舌(くぜつ)などの狂言の仕組(しぐみ)に、相手の役人を我内へ呼びよせ」(耳塵集)

◆際限 「きり」も「きわ」も同じ意味。さかい限。区切りどころ。

◆坂藤 坂田藤十郎のこと。元禄期(1688〜1704)を代表する上方の名優。写実的な芸風で、和事にすぐれ、上方歌舞伎の基礎を築いた。

◆うそのまこと 虚構の中に含まれる真実、というほどの意。藤十郎は写実の芸にその本領を発揮したと評される。「(風)三右衛門はうそらしき狂言の仕様に、しかも名人なり。藤十郎は誠に、同名人なり」(耳塵集)など。

◆ふるい格 「格」は流儀、やり方。古い手。「今のまんざいの格で、栗うりの柴うりのと丹波から東へ出る老は多し」(近松・大経師昔暦・下)

◆穴賢々々とよみあぐるお書 「穴賢」はあて字。浄土真宗で御文様(浄土真宗の教養をわかりやすく説いたもの。本願寺第八世蓮如上人の手紙を編集したもの。東本願寺派での言い方で、西本願寺派は「こぶんしょう」という)を誦する時、一節ごとに必ず唱える句。各節の末尾が必ず「あなかしこ」で終わっているため。「これまた、当流にたつところの一念発起、平生業成とまふすも、このころなり。あなかしこく」(蓮如御文章)

◆世間外 常識はずれ。

◆豆腐へ鶏卵をわりこんだ様 区別がつかないことのとえ。

◆大六天の魔王 仏語。第六天である他化自在天(たけじざいてん)には、この天の高所に別に魔王の住所があるとされたところからいう。「第六天の魔王といふ外道は、欲界の六天をわがものと領じ

て、なかにも此界の衆生の生死をはなる事をおしめし」(平家物語・巻一〇・維盛入水)

◆布袋和尚 中国、後梁の高僧。九世紀から十世紀の人。腹の肥えた身体に、杖を持ち、日用品を全て入れた袋をになつて町の中を歩き、吉凶や天候を占つたといふ。日本では七福神のひとつとして親しまれる。

◆水滴 硯にさす水を入れておくための、金属または陶製の小さな器。机上のすわりが良いで、布袋の像の形に作るものが多かった。「水入れの布袋淋しき昼上り」(雑俳・うしろひも)

◆つかへもせぬ肩に穴をあけて 「肩がつかえる」は肩がこること。肩こりをとるためには、肩をもんだりするほか、小刀で細く切り、鬱血した血を取り出すなどのことも行なわれてようである。

◆みなになる からになる。「何やきの茶碗にもせよ、五ぶくとのめば、みなになるほどにといふた」と(咄本・当世軽口咄揃(延宝七年刊))

◆関口流 江戸時代に流行した柔術の一流派。徳川家光のころ、関口氏(うじむね)が林崎甚助から居合の伝を、三浦与次右衛門から組打の法を学び、これに長崎で習得した中国拳法を加えて創始したもので、居合と柔術を組み合わせた新流儀。「いか様関口流を云立 紀州表へ有付た大学といふ者は達人じゃ」(歌舞伎・幼稚子敵討)

◆柴崎林左 柴崎林左衛門。延宝末年若衆方より立役に転じ、宝永末には大坂立役の巻頭の地位をえた。享保七年(一七二二)没。ここは、晩年「正身の侍風」「実力の随一」と称され、物堅い実直な役を主に演じていた頃を念頭においている。

◆かきつけし 書きなれてい

○卷三之三

○南無あみだぶの武士の娘

【梗概】

三郎左衛門に刃を突きつけられた吉野が、思わず、日頃から信心している法華宗の高僧日親の名を呼んで救いを求めると、その声を聞いて飛び出してきたのは三郎左衛門の母妙蓮であつた。その名が示すとおり、彼女は古くからの堅法華で、同じ宗旨のものをこの屋敷で死なせるわけにはいかないといふをされては斬ることもならず、やむなく床下に隠そうとする。と、そこから出てきたのは、ずっとここに匿われていた腰元の藤とその母親妙仙であつた。藤と吉野は顔を合わすやいなや、互いに姉・妹の名乗りをあげ、奇遇を

◆はながみ 畳紙(たとうがみ)。懐紙(ふところがみ)ともいう。

◆あらためてかゝるべし もう一度新しくお書きになるがよい。

◆料紙箱 紙を入れた箱。「造紙箱(或草子箱) 料紙箱の事。古は料紙箱の事を草子箱など云物也。後には料紙箱といふ也」(貞丈雑記)

◆日親様 室町時代の日蓮宗の僧。中山法華経寺の日蓮に学び、十九才で西海総導師職となつたが、再び中山に帰つて厳しい修行をつみ、入洛して辻説法を行う。永享八年(一四二六)本法寺を開き、同一年には「立正治国論」を著わして將軍足利義教を諫めて一時投獄された。このとき舌を切られ焼いた鍋を頭にかぶせられたが動じなかつたことから「鍋かむり上人」という。公卿・幕府へ諫争すること八回、他宗と討論すること六十六回に及ぶという。著書に「折伏正義鈔」など。

元禄十六年(一七〇三)刊『日親上人徳行記』がある。

◆きこえぬ 理不尽である。あんまりだ。「やあら聞えぬ旦那殿」(近松・曾根崎心中)

◆正躰さらになかりけり 取り乱しているさま。

◆あけゆく窓の山見へて、花を見ずる心になり、刀の目くぎくしめし、やがてくびうつ名ごりかなく、「明け行く跡の山見えて、花を見捨てる雁がねの、それは越路われはまた、東に帰る名残かな、東に帰る名残かな」(熊野)による。

◆目くぎくしめし 刀を抜いたときに、刀身が抜け飛ばぬように目釘をつばきなどでぬらすこと。「目釘をしめす」というのがふつう。「主従刀の目釘をしめし、手ぐすね引て待かけ居る」(浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・三)

喜ぶのであつた。藤と吉野は生き別れになった姉妹であり、妙仙は藤の養母だということがわかる。が、これも皆阿弥陀如来の引き合わせと喜ぶ妙仙の言葉は聞くやいなや、吉野は藤と妙仙が浄土宗であることに反発し、三郎左衛門の母妙蓮を加えた四人の間で、凝浄土対堅法華の宗論争いが始まる。うんざりした三郎左衛門が仲裁に入つたところ、彼の刀の柄にある目貫を見た吉野が、それは兄と私に父から形見にともらったものだと言ひだし、三郎左衛門に殺された井戸掘りの男が吉野・藤の兄であることが判明する。兄のかたきとさわぐ二人をなだめかねていると、三郎左衛門の母妙蓮がその身代わりになるといつて咽笛を突いて自害してしまつた。となると三郎左衛門も黙つておらず、藤を母の敵と追求しはじめる。と、今度は藤の養母に妙仙がそれでは私が死ぬと言つて自害してしまふ。茫然としている間に夜はほのぼのとあけていつた。

南無妙法蓮華経。蓮華経の経の字を教せんと人やおもふらん。三郎左衛門が母は妙蓮とて代々の堅法華なるが、物かげよりこの様子を見てとんで出、

「日親様といはるゝからは御宗旨と見へた。いとしやく、祖師日蓮大聖人様の御難日にあたつて、もつたいなや、この母がもらひものがはりに衣を着せて、若殿様にはあはせぬうけあひ」

と、番神様かけて身をなげかけ歎かるれば、三郎左衛門

「折あしゝ。時節もや」

と、

「しからば人にあはせがたし。この下に忍ばせん」

と畳をあぐれば、腰元の藤久ぐゝに養はれ、母もろともにおもやつれ、によつと出て顔見合せ、

「ヤアおまへはあね様か」

「是はくゝいもとか」

といへば、母は、

「ムゝ、かねてそなたの咄めされし、京ノ姉子とはあの人よな。是なる藤ことは、十三歳より養子にいたし、不勝手つゞきて他領へ立のき、藤は去年からこの御屋敷へ奉公に出せしに、ハテあちな縁で兄弟の対面。是といふもあみだ如来のお引きあはせ」

と涙をながせば、大夫はむつと顔にて

「是おふくろさま、こなさんのお名は何と申しますぞ」

といへば、

「こなたではかるもど名をかへて参つたれども、髪さを切てまことの名は妙仙」

と答ふに、大夫は

「それ見さんせの。忝なくも一部八巻をよむ事はさて置いて、いたゞいても成仏うたがひなき、法華の妙の字つきながら、南無あみだなどゝは、おとなげない。何事でござんす」

といふに、妹は聞きかね

「是姉様。もつともほんの親たちは法華であつたれども、今の母様のいかいお世話。人となりしも弥陀の功力。妹の縁にひかれ、牛につられて善光寺まいりなされ」

と、堅法華に凝浄土、たゞみを扣いてあらそへば、三郎左衛門が母は大夫が肩もちに出られ、藤が母は涙をながして珠数をくりかけ、回向顔に黄念のはりつよきを、三郎左衛門大きにあきれ、

「宗論はゆるく様の下で心ながにすべし」

と、最前ぬぎすてたる刀をおつとり、指手元に大夫すがつて

「ヤア待て下さんせ」

と、刀の柄をためつすがめつ

「ハテ合点のゆかぬ。わしがおや閑路右衛門殿より、兄様とわたしにかたみとてわけつたへられし、家の紋雪輪に水仙、この目貫は何としておまへの手へは入りましたぞ。何とぞ兄様にめぐりあはん」

と、

「肌身をはなさぬかたしの目貫」

と、守袋よりとり出して引あはせば、藤が母かいぐしく、それともしらず、

「先日井戸堀の男を三郎左衛門様がおころしなされし時、わらはもそばにくゝりあげられて聞て居たが」

と、皆までいはず

「兄弟の娘」

「ヤア兄様は三郎左衛門様こなたの手に」

といふを、三郎左衛門大小ともになげ出し、

「ア、せくまい。いかにも身が手にかけては殺せしかども、きやつが物まねにて、お家の重宝をかたきへわたさぬ奇代の勲功。いかにも御世治りての後は、その妹を尋ねいだし、かたき討れんためうしなはじと刀にかけし印の目貫のかたし物。さてはそち達が兄なりけるか。何をいふても若殿様を御世に出すまでは。この三郎左衛門が命は自由にならぬとあきらめ、敵討を待てくれよ。目貫に打つてあらはし置くうへ、手ごめにしていか様ともすべきそちたちへ、分ていふ身が偽はいはぬ」といへども、

「イ、ヤきかぬ。兄様さぞ口惜しふござりませふ。食いついてなりともかたきといふしるしを付させ下され」

と、自我偽縁の様に声もしらけ、無量寿品になきくどけば、妹は

「人を打てかたき討をのばせよとは、弥陀の誓にももれし言葉」

と、義理を責めたる六字づめ。詰かけく恨ければ、三郎左衛門が母手をうち、

「さてくけなげなる姉妹。三郎左衛門申すは御主のお為をおもふての事。ふたりの衆の心ばらしに三郎左衛門が名代、は見られよ」

と、床に有りしさがおつ取り、咽ぶるにつらぬかれてうつぶしに臥給へば、三郎左衛門大におどろき、兄弟の娘もあはてふためき、

「申し、おふくろ様」

と泣けど叫べど息たへたり。三郎左衛門しばし言葉もなかりけるが、

「しばしの道理をも聞わけず母を殺せし愚智無智の女郎どもめ。八つざきにしてもあきたらねども、大夫ことは存じいれもあれば、助けをきて、どうで身がかたきうたる心。兄が死ぬる時のかたしの目貫もその方ばかり。しかれば母がかたき討ずには置きがたし。さしあたって妹の藤、主殺し同前なれども、その段はゆるして手打ぞ」と飛かゝるを、母親へだて、藤へあたる刀をうけあけになれば、

「なさない。是母様」

と取つく娘をつきのけて、

「申し是、三郎左衛門様。御立腹は御尤。養子と申す事打ちあかし、何とて娘が殺さるゝを養母が見てゐられませふぞ。御隠居様の敵とおぼし召れ、私をいか様にも御心まかせ」

とすりよれば、三郎左衛門も義理にせまり、あはれをふくむぞ道理なる。

妙仙はかねて用意やしたりけん、数珠袋よりさが取り出し、

「どふで殺しはなされまい。なむあみだぶく」

とるぐるに取りつき、娘の藤ともにすゝむる詞の内、母はくるしみ、陀仏の綱綱も切れゆく命の糸。とけてむなしくなりけり。こなたは老母のなきがらを、敵のため母ながら、とても一蓮法花宗億載阿僧祇泣きつくせば、三郎左衛門天におどり地に

はね、題目あこがれて、兄弟自然と中直り、

「実今思ひ出したたり。一念弥陀仏妙法華」

◆南無妙法蓮華經。蓮華經の經の字を教
せん人やおもふらん「南無妙法蓮華
經、蓮華經の經の字を、きようせんと人
や思ふらん」(狂言・宗論・冒頭部)

◆堅法華 法華宗の熱心な信徒。法華宗
信者は概して他の宗派に対してはなはだ
しく排他的であり、片意地で狂信的とさ
れる。「さる町人に情のこはき法花宗と
浄土宗と、老軒の家に壁をへだて住みけ
る。…かた法花の事なれば、口すさまじ
くそしること」(咄本・輕口露がはなし
(元禄四年刊)・三)

◆宗旨 仏教の宗派。江戸時代は宗門改
の制度があり、人別帳には必ず宗旨が記
載され、生国と宗旨とは当時の人の身上
についての基本的条件であり、関心事で
あった。「なんぼうそちの宗旨の元祖じ
やと崇めらるる高野大師も」(其磧・傾
城禁短氣・二・一)「宗旨はなんだの。
浄土宗」(膝栗毛)

◆祖師 一宗一派の開祖をいう語だが、
特に日蓮をさしていることが多い。「祖
師上人は越後へ御配流(はいりゅう)なされて
より二十余年の御経廻」(秋成・世間猿
・二・二)

◆日蓮宗 建長五年(一一五三)日蓮によ
つて開かれた仏教の宗派。仏教の真髓は
『法華經』にあり、これによつてのみ人
は救いを得られると主張し、厳しく他宗
を攻撃し、これを国教とすべきことを説
いた。他の宗派や為政者から圧迫を受け
たが、日蓮や弟子たちの不屈の布教活動
によつて次第に発展し、特に地方武士、
都市商人、職人らに多くの信徒を得た。

日蓮の死後、遺骨を葬った甲斐身延山久
遠寺が中心となった。この宗の信者は、
他宗の者に対し、交際することによつて
お題目を唱え、団扇太鼓をたたいてお
勤めをし、撥題目を懸字などにして尊重
する。法華宗。

◆御難日 日蓮宗で、日蓮が文永八年(一
二七一)九月十二日に相模国龍の口で首
を切られそうになった災難をいう。

◆うけあひ 保証人になること。「与作
がかけがよつ程有皆をのれが請合じや」
(近松・丹羽与作・中)

◆番神 「三十番神」のこと。慈覺大師
が『法華經』を書写したとき、日本国内
の神明が三十日間毎日当番で守護したと
いう、その三十体の神。のち、縁日の神
仏となり、天地守護や内侍所守護など、
十種ばかりの三十番神が定められた。「惣
じては七千余座の神、殊には三十番神朝
家を守り奉り給ふ」(保元・上)「恐ろし
や御幣(みでぐら)に三十番神ましまし
て」(謡・鉄輪)「おそろしやみてぐら
にといふを、ゆきあたり俄になをし、お
そろしや股(またぐら)に、三十番神お
はしますと」(咄本・醒睡笑・七)

◆おもやつれ 病氣や疲れなどのために
顔がやせ衰えること。また、以前よりも
顔がやせ衰えて見えること。「父がそろ
そろ抱き起こすおちが顔の面蒼(おも
やつ)れ」(近松・女殺油地獄・中)

◆こと 人を表す名詞代名詞につく用
法。その人をさし示したり、……に関し

と三郎左衛門に養なはれ、若殿の御出世とともにまつばのふたり女、かたきをうつ
山かづら、夜はほのくゝとあけにけり

て、などの意を添える。「太夫の浮雲事
わすれず」(其磧・禁短氣・四・二)

◆不勝手 懐ぐあいが悪いさま。貧乏に
なること。「去る歴々の人、なにとかし
て近年不勝手になり、色々思案して」
(咄本・輕口福蔵主(正徳六年刊)・一)

◆あちな縁 ふしぎな縁。
◆あみだ如来 浄土宗系では、衆生が阿
弥陀如来の救いを信じて念仏すると必ず
極楽に往生するとされ、もつとも重んじ
られる。阿弥陀仏。

◆むつと顔 機嫌を損じてむつとしてい
る顔つき。「専左衛門むつと顔にて」(其
磧・都鳥妻恋笛・三・三)

◆こなさん 「こなさま」の転。江戸前
期には「こなさま」と同じ用法の女性語
であったが、次第に敬意が薄らいだ表現
として対等以下のもうい、また、男
性も使うようになった。「こなさん達の
顔見たいと思ふ折ふし呼びに來たを幸
に」(近松・夕霧阿波鳴門・上)

◆髪さき こは、髪の毛。
◆それ見さんせの それ見なさい。

◆一部八巻 八巻二十八品から成る中国
後秦の鳩摩羅什(くまろし)訳の妙法蓮
華經のこと。中国並びにわが国で最も普
及し、両国における仏教史や文化史の展
開に与えた影響はきわめて大きい。「法
華經の一部の八巻のと言つて、なま長い
經を讀もうより」(宗論)

◆いたゞいても成仏うたがいなき いた
だけば間違ひなく成仏できる。「お経を
いただいても即身成仏は疑ひない」(宗
論)

◆法華の妙の字つきながら 「妙仙」と
いう名に妙法蓮華經の「妙」の字がつい
ていることをいう。

◆いかいおせわ とてもお世話になつ
た。「いかい」は形容詞「いかし」の連
体形として用いられるもので、善悪いず
れにせよ、程度のはなはだしいさまをい
う。「母様(かゝさま)いかいお世話」(近
松・鐘の権三重帷子・上)

◆人となりしも 一人前に成長したの
も。「石堂丸……母に對(むかひ)てい
へりけるは『わが身母の手一ツして養育
(はぐくま)れ、かく人となりし事、そ
の恩世の中の親には百倍せり」(馬琴・
荊菫後伝玉櫛箭・中)

◆くりき 功力。仏法や經典、その他、
もろもろの功德によつて得られる不思議
な力。「御法の功力に草木国土も成仏な
れば」(謡曲・巴)「ア、念仏の功力有難
い。こちも念仏申す」(近松・心中天網
島・上)

◆牛につられて善光寺まいりなされ こ
とわざ。「牛に引かれて善光寺参り」。自
分の発心からではなくて他に導かれて信
心の行為をすること。車にしかれてよい
所へまいるとはと、とまいましたわい、ハ
テ牛にひかれて善光寺まいりするわいとい
はる」(咄本・咲顔福の門(享保十七
年刊)・二)

◆凝浄土 浄土宗の信者はその教えに凝
り固まることが多いとして、こう呼ばれ
る。

◆たゝみを叩いて ことばで激しく人を
責めるときに手で畳をたたくことをい

う。「分別なされ吉次殿と、たゞみをた
たいてねだらるる」(近松・孕常盤)
◆肩もち 一方の人のひいきをするこ
と。「ヤア替った所へよこ合から出てか
た持か。うぬもこれやあいすりか」(歌
舞伎・傾城勝尾寺・口明)
◆珠数をくりかけ 数珠を取り出し。
◆回向願 回向をするような願つきで。
◆責念仏 はげしく念仏を唱えること。
「責念仏の生玉の春」(俳諧・大矢数)「何
れもわれいちとしころかゝつてせめ念仏
を申し、すでに回向とおぼしき時」(咄
本・軽口露がはなし・四)
◆はりつよき 気が強いこと。意地を張
り合うこと。「我が心にいらぬ男を振り
つけるを、張(はり)が強いといふには
あらず」(其磧・傾城禁短氣・五・二)
◆宗論 仏教の諸宗派間の教義論争。「愚
者の宗論」(咄本・軽口機嫌囊(享保十
三年刊)・二)
◆心ながに 氣長に。「とかく商(あき
ない)の道は心長ふ、遊興は短くばつと
出て」(其磧・傾城禁短氣・四・二)
◆ゆきわに水仙 雪輪も水仙も家紋には
用いられる。
◆かたし目貫 目貫は刀の柄に表・裏一
対にして用いるが、その片方だけ残った
半端になったもの。「此猿、口のうちよ
り虎のかたし目貫(めぬき)を取り出し」
(西鶴織留・二・一)
◆守袋 符を入れて身に着けている袋。
生年月日・父母の名などの書き付けや、
形見などを入れたりする。「首にかけら
れし守袋を明んとし給ふを」(其磧・風
流宇治頼政・四・三)
◆せくまい あわてるな。かっとするな。

「色道大鑑・一」に「せく、男女にかぎ
らず、恨みあるか、嫉妬の心にてか、立
腹して胸へせきあぐる心也」とある。「本
望はとげたるぞ必ずせくまい」といふも
聞路の朝鳥飛び立つ心ぞ道理なる」
(近松・姫山姥・一)
◆物まね 非常に珍しい。「天竺震旦はし
らず。我朝には奇代のためしなればとて」
(南嶺・魁對盃・四・二)
◆じがげ 自我偏。「法華經・如來壽量
品」にある「自我得仏來」に始る偏頗(け
じゆ)。われわれの住む世界がそのまま
寂光淨土であることを説き、最後に仏の
大悲の發露を説くもので、『法華經』に
説くところの眼目とされる。「法華經の
六卷の自我偏にや説かれたる」(梁塵秘
抄・四句神歌)「そつちがさう胸をすへ
れば、おれも又じがげを出して受取ふ」
(歌舞伎・名歌徳三并玉垣)
◆声もしらけ 声も力をうしない。
◆六字づめ 『阿彌陀經』の、阿彌陀仏
の名号を七日間一心不乱に唱えれば極樂
往生できるといふ説にもとづき、念仏を
百万遍唱えるその終わりに「南無阿彌陀
仏」の六字に節をつけて長く唱えること。
「死骸を駕籠に打乗せ、連れ節に六字づ
めの念仏申て帰る道すがら」(其磧・禁
短氣・四・四)
◆詰めかけ 詰めて問いたです。「八
幡堪忍ならずと、眼色かへてつめかくる」
(西鶴・武道伝來記)
◆心ばらしに 気が晴れるように。
◆名代 身代わり。「其の時は名代(み
やうだい)に死んでくれもなされまい」
(近松・用明天王職人鑑・二)

◆さすが 刺刀。江戸期においては、武
士の帯する脇差の鞘の外側に差してある
小刀をいう。小づか。「つつと入つては
ねたふしさすがをさか手にめつたつき」
(近松・寿門松・上)
◆ぐちむち 愚智無智。「愚智」も「無
智」もおろかなこと。知恵の浅いこと。
また、その者。おろか者。「愚痴無智の
野暮達の為詳しく説いて聞かせ申す」(其
磧・禁短氣・一・一)
◆存じいれ 思うところ。考え。「是非
同道といひか、つてひかざれば、よろこ
び兩人のぼりしが、九兵衛存知入の有と
て、脇指ひとつになつて」(西鶴・武家
義理物語・二・二)
◆どうで いずれにしろ。どっちみち。
「どうで女房にや持ちやさんすまい」(近
松・曾根崎心中・道行)
◆あけになる あけに染む。血だらけに
なる。「御首もなき尊骸あけに成て伏し
給ひ」(近松・国姓爺合戦・一)
◆数珠袋 数珠を入れる袋。数珠のほか、
鍵・小銭など小さい手回り品を入れた。
「今婦人のもつ小き袋を数珠袋と云、過
なり。調度袋と云事なり」(遠碧軒隨筆
分類抄・下)「つぎ々々の珠数袋、此中
にさられた時の暇(いとま)の状ありし
を、是はとつて捨て」(西鶴・好色五人
女・二・二)
◆弥陀の網綱 阿彌陀仏の救いの糸。「弥
陀の網綱」等の言い方になつたもの。
◆一連 「一蓮托生」の略。死後、極樂
淨土で同じ蓮華の上に生まれること。
◆億載阿僧祇 「億載」も「阿僧祇」も
ともに非常に長い年月のこと。未来永劫。
◆天におどり地にはね

◆題目あこがれて 題目も忘れてしま
い。
◆一念みだ仏 「一念阿彌陀即滅無量罪」
の略。仏語。一たび阿彌陀仏を念ずればす
なわち無量の罪を滅する。一度南無阿彌
陀仏と唱えると、数限りのない罪もたち
まちに消えうせてしまう。源信の『万法
甚深最頂心法要』に「往生本緣經云」
として見え、中世以降、広く誦誦された
文句。「それ一念阿彌陀即滅無量罪。即
ち廻向發願心。心を残すことなかれ」(語
・実盛)
◆妙法華 妙法蓮華經の略。
◆まつばのふたり女 松葉の「松」に「待
つ」を掛けた。
◆かたきをうつ山かづら、夜はほの
くどあけにけり やまかづらは「日蔭
蔓(ひかげのかづら)」の異名であり、ま
た、山野に自生する蔓性の植物全般にも
いう。「うつの山」は、『伊勢物語』第九
段(「行きくつて、駿河の国にいたりぬ
宇津の山にいたりて、わが入らむとす
道は、いと暗う細きに、つたかえでは茂
り、物心ばそく、すゞるなるめを見るこ
とと思ふに、修行者あひたり」。敵を討
つ↓宇津の山↓山かづらと続き、さらに、
「やまかづら」は和歌では、曉に山の端
にかかる雲あるいはそこから転じて曉・
早朝の意にも用いられる(「あらたまの
としの明行く山かつら霞をかけて春はき
にけり」(続千載・春上))ところから、
「夜はほのくどあけにけり」につなが
っていく。

目 録

邯鄲 狂言 釣狐

第一 四季折くは目前の色庵

お寺がたのかくし妻とは面白やふしぎやな
ひるかと思へば夜ばかりの通ひ所

◆邯鄲 謡曲。四番目物。現在能。作者未詳。シテは悟を開くために楚の国へおもむく途中の蜀の青年盧生。邯鄲の里に泊り、栗御飯が炊きあがる間に一眠りしたところ、栄華を極めた夢を見、人生を悟って帰ってゆくというもの。『太平記』巻二十五「黄梁夢事」と同じ説話を骨格としている。巻四の一・二はこの謡曲が下敷になっている。

◆釣狐 狂言。極重習物。別名「こんない」。一族を次々と狐師に捕らえられた老狐がシテ。狐師の伯父の伯蔵主（はくぞうす）という僧に化けてその家を訪ね、狐釣りを思い留まらせようとするが、狐師は伯父のそぶりに不審を抱き、仕掛けをして捕えようとする。狐は一度は罠にかかるが巧みにそれを外して逃げ入ると

いうもの。巻四の三はこの狂言を下敷にしている。

◆四季折くは目前の 「四季折々は、目の前にて」（邯鄲）による。

◆色庵 妾宅。囲いものを住まわせる家。面白やふしぎやな 「面白や、不思議やな」（邯鄲）による。

◆かくし妻 人に知らせずこっそり囲っておく妻。「さる禅僧、かくし妻をこしらへて、程なく子をもふけ」（咄本・年忘嘶角力（安永五年刊）・二二）

◆ひるかと思へば 「昼かと思へば」（邯鄲）による。

◆一村雨 「ひと村雨の雨宿り」（邯鄲）による。

◆ふりにくい 「村雨が降る」に、相手を拒む意の「振る」をかけている。

第二 一むらさめもふりにくい大尽

千貨万貨は石かはらの露

きへたやしうと太夫の一言

第三 家老の策にかゝる後悔

茶ばかりで塩のない廣さふらひ

昆布に山椒の目に見へぬ欲心

◆千貨万貨 たくさんの宝物。「千貨万貨の御宝の、数を連らねて捧げ物」（邯鄲）による。「千顆万夥」とする本文も多いが、本注釈では、「千貨万貨」となっている『謡曲百番』（岩波新古典大系本）による。

◆石かはらの露 石も瓦も役に立たないもののたとえ。（宝物と思つたのは夢ですべては露と消えた、ということ。）

◆きへたや 前行の「露」を受けて、（左京大夫の言葉によつて、すべて自分の思い違いであることがわかった友仲は）自分の振舞いを恥ずかしく思い、露となつて消えてしまいたい、と思つたこと。

◆後悔 後悔を「こんくわい」と読ませていることについては、四の三末尾の注を参照のこと。

◆茶 人を馬鹿にしたり、ふざけていること。「コレせんせい、そふーがひにいなるな。岡はしも茶にならぬ」（浄瑠璃・傾城買指南所）

◆塩のない 愛想のない。四の三本文の注を参照のこと。

◆昆布に山椒 「別に馳走はおらない。昆布に山椒、よい茶を申そう」（釣狐）をふまえる。昆布と山椒から水辛という菓子を作つたことから、取り合わせのよいことにたとえられる。これに茶を合わせた三点は狂言「文蔵」や一休の『自戒集』にもみえる。「花に鶯、紅葉に鹿、こぶに山椒、恋に酒」（近松・艳狩剣本地・四）

○卷四之一

○四季折くは目の前の色庵

【梗概】

ここは、難波上塩町。家老たちの指図で難波に逃れてきた友仲は、彼らが頼れといった所には赴かず、ここ上塩町で内科医に姿を変え、須可滝養元と名乗っている。生まれつきの美男のおかげで、坊主の囲われ女や妾宅が立ち並ぶこの界限では評判がよく、その主人である坊主たちにも性病などの相談が気兼ねなくできる医者として繁昌していた。

この日も、診察に出かけようと丁寧に草履を出させていると、道頓堀池田庄三郎という茶屋から使いが来る。友仲の患者である下寺町のさる坊主が怪我をし、友仲でないと困るというのであるが、その使いの顔を見ると、友仲の旧知の島原の料理人朝倉の三ぶであった。彼は、古一文字屋の浜荻という小天神となじみになり、いまは、島の内のさる大茶屋で夫婦で奉公しているのであった。彼は友仲に、馴染みであった吉野大夫の消息を伝える。彼女は、かくまわれていた三郎左衛門のもとをのがれ、友仲を探するために島の内に移って来ており、此花と名を変えて、自前で遊女勤めをしているが、いまは、京都の明神様と呼ばれている武士と大変な馴染みであるという。そして、友仲が呼ばれたのは、この此花の美貌に見とれた坊主が階段を踏み外して怪我したからだというのである。この話を聞いていったんは吉野の心変わり腹を立てた友仲であったが、傾城に誠がないのは当然のことと思ひ直して自分をなだめる。が、心は晴れない様子である。それを見て料理人の三ぶは、かつて友仲のお大尽遊びの恩恵にあずかったことを言い立て、我々夫婦が協力するから吉野（此花）に恥を掻かせてやりましようとそのかし、ともに島の内に向かつていった。

浮世の旅にまよひ来てく、夢路をいつとさだめん。

これは上塩町のかたはらに友といへる者なり。我大名に生れながら、政道をも心掛

ず、只色事にあかしくらすばかりなりといふたは、今はむかし語り。家老どもが情

にてあやうひ所をまぬかれ出で、この難波へは来たれども、紙子一重の取り付き。何面目あつて国元へあり所を知らせんやと、右近三郎左が指図の心当へは落ちつかず、上塩町といふて、取りのき講の料理受け取つて、魚は喰れて成仏すると心得て居る。

動落庵のみ立ちつゞき、奥深にしづかなる構は大方紫袈裟かけた旦那殿の、かこふて置かるゝ珠数先のお房、陀羅尼のおかぢ、称名声のお吟、大黒の槌に生れたればとて、おなべといふも丸ふたの坊主亭主、名題座敷ばかりにて、その間くの小借屋は、わらさうり・火ふき竹・さくら・ふのり、一文菓子のかたわきに、なにの事かは知らぬが「是あり」との看板多く、寺の隠居がたの多ひ所には似合はず。豆腐屋は稀にして魚屋がちな軒つゞきに、友仲は誠に木からおちた猿舞、へへんのかみと相借

屋、何喰まいと継母ゆへ流浪いたす、西国の町人のむすこと披露し、名も須可滝養元とあらため、本道の医者ぶん。何が契情買の骨長、一もみざつともまれたる、はりま紙子の肌あたりよき人づきあい。第一慾気のない人間、今の世界にはまれものと驚

熊鷹の様な、爪仲間の商人ともいとしがりて、無理やりに医者に仕立て、寸白に敗毒散もられても飲む気になりての取りもち、生れ付きたる美男、咳にはとろりと撫でもらひたがる、髪めづらしき近所のかこはれもの、心をうかさぬはなきゆへ、お妙やお仏

の取り持ちにて歴々の寺方へ立ち入り、外の医者とちがい引き合せ人がよきとて、大和尚大上人も色衣まわつて、旦那衆へ沙汰のならぬ怪我をも見せられ、常体の医者なれば、「所化の時分学寮でいかう湿にあたりました故」との長口上いらす、打付に山帰來の相談、遠慮内証の礼物夥しくとれて、そろくぬき紬の綿入羽織も加賀絹

のまだ己の刻ばかりなるに着かへ、薬箱包も染分の木綿が紫の日野にかはり、やがて療治にいでんと、この中かゝへたる角前でつちに草履なをさする所へ、

「頼みませふ。道頓堀池田屋庄三郎と申す茶屋から参じまして御ざります。こなたの御療治先、下寺町のさるお寺様、私方にてちと怪我をあそばし、外の医者はいやじやほどに、上塩町へゆきて、須可滝養元様をよんで来てくれよとの仰せで、お迎ひにまいりました」

といふを聞いて、

「自体、老僧の身で責念仏が過ぎる」

と、怪我といふよりはやのみこみして、

「その使、これへ通し申せ」。

「かしこまりました」

と入つて、

「ヤア、これは思ひもよらぬ。お前様は、友大尽様では御座りませぬか」。

「これはしたり。京の嶋原で名高い、料理人朝倉の三ふではないか」

とあれば、

「されば、私ことは、旦那もつはらお里通ひの比より、古一文字屋の浜荻といふ小天神になじみ、ちとわけのたゝぬ事ありて、浜荻を連れ、御当地へくだりしかども、新町は京の引はりでつとにくき身と成り、只今は嶋の内、肩きる大茶屋へ、夫婦ながらはいつて奉公致しております。それにつき、吉野大夫様、御国元の御家老、三郎左衛門様とやらの所をかけ落なされ、おまへがこの地にござると聞き、契情町は自由の

ならぬ所と、のんきの八兵衛が口入にて、この嶋の内に自前のつとめ、『やみの夜になかぬからすのこゑきけば、生れぬさきの父ぞ恋しき』といふ歌のごとく、とかぬ帯に客をなかせ、ふらずしてあはれぬ義理づめ、難波津に咲くや此花と名をあらためての御繁昌。夜かと思へば昼になり、昼かとおもへば月またさやけき、物日のせり合。春の花は船遊びのまくに開かせ、紅葉も色こく棧敷の毛氈にかざやき、春夏秋冬万木千草も一日に花さけるはやり様。いかなる色男でも、まことのお情にあづかりしものはひとりもなき所に、この間は京都のおさふらひ衆、おとしへには見ゆれどもお名は明神様と申しまするが、小判の光は燈明より明かに、どふした御縁か大夫様の方よりなづみ心にならせられ、ひんとしたそり橋のお詞一度もこれなく、岸の姫松いく世経ぬらんと、したゝるいままでのお床じやとの取沙汰、何やらいふておむつがり、御床たゝむ仲居どもは、今朝も十二燈のつゝみ紙ほど紙屑があつた」と申せば、宿屋の亭主が柏手たゝいて、『鈍子もて来ひ。朝酒を旦那と此花様にあげねばならぬ』と居つゞけの所へ、『今日は手前の斎日にて、お住持様御出』。惣じて茶屋と申すものは、ばたくさと入りこむ所ゆへ、仏壇は二階に仕込みおきしを、勝手知にてお住持様はしごをあがり給ふ折から、『此花様身仕舞しにちよつといなして』と『台所へ御出』とが一時にて、和尚様、『さても美人め、あの様な菩薩を抱て寝るこそまことの極楽ならめ。榮耀にも栄花にも、げにこの上やあるべき』と、あまり見とれてはしの子ふみはづしぐはつたり。皿鉢膳棚くだけ、懐からは『諸法事大布施帳』と表書のしてある手帳とともに、お針のせんがきこへぬづくしの書ひてある名塩半切の文もひらけ、二徳たばこ入れから輪珠数もろとにころくこけて出では、赤紙につゝみしは

まぐりの貝入。とりちがへて『やれ、氣付さうな』とのませたれば、舌先がひりくとしてすこしおどろく心地がするとのこと、『やれ水を』と持て行けば、『この薬を用ひてから、水は禁物』とじゆつない中にも機能を覚へ給ひ、それゆへのお迎ひ』といへば、友仲は今日も明日もさめた心底。

「たん三郎左がかたを忍び、身をたづぬるとまではきこへたが、明神とやらこま大とやら老ぼれ大尽にまはる段く、いかにしてもこらへられず」
と、古軍筒より刀とり出して見られしが、

「イヤくコリヤいふほどおれが恥といふもの。契情に誠なしとは看板うつてしれてある事。それをまことにさせぬは、買人の無調法にて、欺すは契情の地といふもの。だまされたがはらがたつといふは、夢に見た金か眼があひてからないとではらたてもおなじ事なるべし。契情のいつはりと葱根のくさみがなくば、この界では人間の手はまはらぬでかなあるべし。もしまた葱根にくさみがなくば、鐘持に雛男つれたやうではりあいなく、契情に誠がありすぎたならば、桜の花ざかりなる枝に、柿が実であるやうで面白かるまじ。よいく、売女めにつむがれたは、こちの鼻毛をぬかぬ故とあきらめたがよい」

と口ではいふて見れども、胸の内はもたぐたして、ふみたい、たぐきたい心になるもおもひ過ぎての取り乱しにて、契情買は皆おなじ情なるべし。

料理人の三ぶも

「御尤でござりまする。女房ともども旦那のことは、あけくれ申し出してばかりおりまするは、わすれもいたしませぬ。ソレ井筒屋での大寄、上の間三拾余疊敷にしろかねの山をついては金の盃、一盃のめば、五百匁づゝ下され、西の間の縁側三十余枚の障子ぎわには、小判の山をつかせて、しろかねの盃をいだされ、三盃のめば式十両づゝいたゞいた御恩、大夫様のなされかた、わたしどもさへ、むつと致しておりますれば、是非とも御供いたして品によつたらば、わたくしども夫婦がしりもち致しまして恥かゝせませふ。それこそほんの此花さまではなふて、今を春部とかくやこの恥。大夫様も人の皮かぶつてござれば、よもや恥かしいとおぼしめさぬ事はござりますまい」

「いたのもしくいふを、

「いやく、畜生に物いふ氣はみぢんもなければ、さしあたつて今日までのばしてみた鼻毛の下の養ひが第一。大名の火にくばつたといふたとへはあれども、粹こかしにはまつたといふは身に思ひあたつて口おしい。療治にはまいるべし。畜生めに身が事、ふつゝいふてくれな」

といへども、いふてくれよがしの輪廻のきづな。

「むかしの栄花を今の身でいふは不粹」

と、たゞ惘然と三ぶに連れ立ち、鳴の内さしていそがるゝ

◆浮世の旅にまよひ来て、夢路をいつとさだめん「憂き世の旅に迷ひ来て、憂き世の旅に迷ひ来て、夢路をいつとさだめん」(邯鄲)による。冒頭部の文句。◆これは上塩町のかたはらに友といへる者なり「是は蜀の国の傍に、盧生といへる者なり」(邯鄲)による。

◆上塩町 大阪府天王寺区にあり、いまは上汐町と書く。江戸時代は私娼街としてにぎわった。「島の内の芸子に深うなじみ、此春身うけして、愛から程ちかき上塩町に困うてあるからの事」(秋成・妾形氣・四・一)

◆我大名に生れながら、政道をも心掛ず、只色事にあかしくらすばかりなり「われ人間にありながら仏道をも願はず、ただ惘然と明かし暮らすばかりなり」(邯鄲)による。友仲が難波に来ることになった事情については巻一の二を参照のこと。

◆取り付き もとで。「わづかの取付千貫目にする程の人心、よろしき極め成べしと沙汰して」(西鶴織留・六・四)

◆あり所 居所。住所。「とつ様があるほどなれば馬をひいたさね共、有しよしらねばかほも見ず」(近松・丹波与作・中)「彼の板がこひの惣領殿がおととひからありしよがしれず」(近松・生玉心中・上)

◆心当 あてにするところ。頼つていくところ。「こなたの尋ねる心当(あて)はどこじや」(浄瑠璃・ひらかな盛衰記・四)「夫はお由を伴ひて、田舎の縁者を心あてに」(梅暦・四・一一)

◆取りのき講 「取り除き無尽」ともいう。毎回の講日のくじに当たって落札できると、当日の掛金総額を一時に手にすることができ。賭博の一種とみてよいもの。講の会合のあとには会食をすることが多かった。

◆動落庵 「道楽」をかけたもの。

◆紫袈裟 古く紫の袈裟は勅許がないと着られず、江戸初期には紫衣事件などがあつたが、後年はそうした規制もゆるんだ。「紅染(こうぞめ)の衣の上に紫の袈裟ををかけ、手に水精いらたかの数珠をもち」(狗張子・六・一)

◆旦那殿 ここは困いものや妾宅の主

◆数珠さきのおふさ 以下は僧やお寺にちなんだ事物を、困いもの・妾の名前に転用したもの。

◆大黒の榎 「大黒」は僧の妻や妾(此寺の大黒になりたぐは、和尚のかへらるゝ迄待て)「西鶴・五人女・四・一一」。

◆これに「大黒の榎跡」(庭にできるでこぼこを繁盛のしるしとしたもの。「庭に凸凹の出来るを俗に大黒の榎跡といひ其家繁昌の標といふ」(譬喩尽・一一)をきかせて名前にしたもの。

◆陀羅尼 密教(真言宗・天台宗)系の呪文。梵語のまま唱える。

◆称名 浄土宗・浄土真宗で「南無阿彌陀仏」と唱えることをいう。

◆小借屋 小さい借家。まずしい生活を印象づける。「市門の曉鶏は、此西の方、あやしの小借屋といふ物軒をならべ、おのがさまざまの世渡り詫しげなれど」(鶏衣・七景記)

◆火ふき竹 火を吹き起すのに用いる竹筒。「笹の葉の風や螢の火吹竹」(犬子集・三)

◆さくら 細かに割った竹を束ねて、飯器などを洗うための道具。「団扇。竹は笈帯(ささら)のことし」(南都名産文集)

◆ふのり 布海苔。磯の石に多く養生する海藻。さらして干すと糊になる。以上は、どこの家にもあるような台所道具を並べたもの。「生死の大事のこすとはな

し／をはりぬる法にふのりをときそへて」(鷹筑波・一)

◆豆腐屋は稀にして魚屋がち 豆腐は精進料理の代表。なまぐさ坊主たちがこの界限に多いことをいう。

◆木からおちた猿舞 「猿も木から落ちる」という諺にひっかけたもの。廓遊びになれているはずの友仲が、お家騒動に巻き込まれ、この地で貧乏暮らしをして

いることをいう。

◆へんのかみ 平気な様子をいうか。「猿舞」からのどうつづくかは未詳。

◆相借屋 同じ長屋にすること。また、その人。「相借屋(あいじやくや)の鼻(か)が相互いとして」(其磧・禁短氣・三・一)

◆何喰まいと継母ゆへ ことわざ「何喰おうとまな身」の「まな」に「継母」をかけた表現。「何喰おうとまな身」は気楽な貧乏人の境涯をいう。「夕に米唐櫃(がらと)をかすり、朝(あした)に薪絶へて、何喰ふまいとも俣(まじ)な中にも」(其磧・禁短氣・四・一一)

◆継母ゆへ流浪いたす なさぬ仲の継母とうまくいかないために、跡継ぎが家を出て諸国を流浪する、というのはお家騒動劇などでの常套的なパターン。

◆須可滝養元 「姿は狂言」のもじり。◆本道 漢方で、薬草の服用などを主とした内科的な治療を施すもの。外科や鍼灸などに対していう。「それはほん道にはあらで、針に心深かりける故に」(仁勢物語・上)

◆骨長 ある方面について経験豊かで内情までよく知っているもの。したたか者。遊里関係や趣味関係のことなどに使われることが多い。「いづれも馬鹿の骨張(こつちやう)」「好色万金丹・二・一一

◆爪仲間 「爪」は「驚」「熊鷹」の縁だが、「新撰大阪詞大全」に「つめとは

しわること」とあるように、ケチで欲の深い商人仲間のことにはひっかけている。

◆寸白 寄生虫及びそれによる病気のことで。また、男子の睾丸の大きくはれる病気にいう(その原因を寄生虫によると考えたため)。「それがしがば、此十日ばかり眼病氣にて候。とても次の而にとて、すんばくもさし出候。すんばくの事は持病にて候ゆへ、是非に及ず候」(一休諸国物語・五)

◆敗毒散 江戸時代ひろく愛用された漢方薬。寒氣、高熱、体の痛みなど風邪の症状に多く用いられた。「効驗は医案の外に見へて、敗毒散などをもちにも」(南嶺・大系図蝦夷漸・二・三三)「よくよくみれば、敗毒散であつた。せきをやめいといふことか」(咄本・口合恵宝袋(宝暦五年刊)・四)

◆歴々 立派な。単に裕福だけでなく、伝統や格式のあるものについていう。「又も懲りず竹斎は、或人大熱氣を煩ひけり。歴々の医師集りて、配剤する」(竹齋・下)

◆寺方 寺院関係。町方(まちかた)・在方(ざいかた)などに対していう。また、僧を敬つてもいう。「こももには寺かたも見へぬ。寺町へ参り、頼みましょ」(狂言記・泣尼)「太緒に雪踏位勝けにはきなして、やつこ草履取をつけ、これを寺がたの通ひ屋従と申侍る」(西鶴・一代男・四・五)

◆引き合せ人がよきとて 欲深い商人たちが推薦し、妾らが仲立ちするので、秘密のことも相談できる医者だ、ということ。

◆色衣 墨染の衣でなく、僧侶の格式を示す紫や緋の色の衣。「四十いふよの此比は、色衣(しきえ)を着し、うやまいも一字の寺をつかさどり」(八百屋お七

・上

◆旦那衆 「寺や僧に金銭を貢ぐ人」が原義であるが、こゝは、檀家の主人の意。

◆沙汰のならぬ 話せない。話してはならない。「互ひにしめつしめられつ思はず誠の恋となり、サア此の上は今の事沙汰はならぬが合点か」(近松・堀川波鼓・上)

◆常体の 普通の。並の。「銀(かね)が銀もうける世となりて、利発才覚もよりは常体の者の、質(もと)で」を持ちたる人の利徳(りどく)を得る時代にぞなりける」(西鶴織留・六・四)

◆所化 修行中の僧。「所化の伴頭榮俊といふものは、学問の友として久しく断金の契をいたせしが」(伽婢子・十)

◆学寮 江戸時代、寺院で僧侶が修行するところ。檀上寺、寛永寺などに設置されていた。「逸正寺にかへり来て、恩を謝して学寮に在り。是よりして影西は、夜に日に仏学を研究して、又五七年来を歴ければ」(馬琴・八犬伝・百二十八回)

◆湿 湿気の多い皮膚病。こゝは、梅毒にかかったことをこまかしていう。「ある医者をよびて見るに、これは湿にあてられたるわづらひじやといふ」(咄本・当世輕口咄揃(延宝七年刊)・二)

◆打付に じかに。直接に。「寝た間も忘れず恋こがれ、思ひ余つて打付に、いふても親子の道を立て、難面き返事」(浄瑠璃・摂州合邦辻)

◆山帰来 ゆり科のつる性低木。根を煎じて梅毒の薬とする。「腫物となりて。此程顔にあられ。天窓に出てかくせ共かくされず。外科を頼で見するに。元来内証の疵より起たる腫物なれば。人中で様子も見られず。人の無小座敷の窓を明て人に見せぬ療治の仕様。凡そ三十日斗も立ど腫物はいよいよひろがり。今では山帰来を拾五両づゝ内薬に入て飲るれど

も」(南嶺・今昔出世扇・一・一)

◆ぬき紬 縦糸が木綿、横糸が紬の織物。あまり上等なものではない。「難波津に借屋此はな冬空にも、ぬき紬(つむぎ)の単羽織」(役者枕言葉・大坂)

◆加賀絹 加賀国に産する生絹(きぎぬ)の織物。羽二重(はふたへ)に似るがそれよりは安い。多くは染めて裏地に用いる。小松あたりで特に盛んに織られた。「薄鼠となりし加賀絹の下紐を、こどりまはしに袴(すそ)みじかく、柳に鞠五所しほり」(西鶴・一代女・五・二)

◆己の刻 午前十時前後。

◆染分 種々の色に染め分けてあること。「染分(そめわけ)の組帯、せかいらげの長脇指」(西鶴・一代男・二・三)

◆紫の染分けの、上交(うはがへ)の棲(つま) 風にひらめき「其積・禁短氣・四・二)

◆日野 日野絹。近江国日野地方産の絹織物。上野国藤岡地方産の上州絹などを、地質が似ていることから一般には日野絹と称した。「一人(ひの)の役目、たとへば金襴類一人、日野(ひの)郡内絹類老人」(西鶴・永代蔵・一・四)

◆療治 治療。「痛さは痛し寝られねば、これはいかなる療治やらんと問ひければ」(竹齋)

◆この中 このあいだ。せんだつて。「此中の古歌を大納言殿におたづね申たが」(西鶴・一代女・一・四)

◆角前 一代女。「角前」は「すみまへがみ(角前髪)」。額(ひたひ)の左右の角(すみ)を剃り込んだ前髪で、元服前の若者の髪型。そういう髪型の年若い丁稚。

◆角前髪(すみまへがみ)の若い者、同じ心の飛びあがりども四人、揃へ明衣ゆめたの染めこみに氣をつくれ」(西鶴織留・四・三)

◆下寺町 大阪城東にある寺町のうち、

いちばん西の町筋。天神橋筋東側に面して多くの寺院が並んでいる。「時雨の松の下寺町に信心ぶかき心光寺」(近松・管根崎心中)「一家(いっか)門にも見かざられ、終に乞食と成、下寺町の野はづれに寐て居たる折ふし」(咄本・輕口浮瓢單(寛延四年刊))

◆自体 そもそもから。元来。「ぢたい、だんなのしたぞめはの、かさねぬづゝ屋といふみなみのちや屋のおとゝで、これへいりむこ」(近松・重井筒・上)「自体其方は平家の事を、譏刺したると聞及ぶ」(南嶺・忠盛祇園桜・五・一)

◆責念仏 念仏の唱えかたで、終りに近く最高潮に達したときに急調子で唱えること。「責念仏の生玉の春」(大矢数・七)

◆何れもわれいちとしりかゝつてせめ念仏を申し、すでに廻向とおぼしき時」(咄本・輕口露がはなし・四)

◆是はしたり 意外なことに会つて驚いた場合や、思わぬ失敗をした場合に発する語。「是はしたり 過ちたる時にいふ語也」(俚言集覧・増補)「コレ申し申し。是はしたり寝てござるそふな」(浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・七)

◆小天神 遊女の位。天神と鹿恋(かこひ)の間に位するもの。「あたまた敷よびて、いくらが物ぞ、天神小天神と、せちがしくきはめぬ」(西鶴・一代男・五・五)

◆その外口きぬ大夫天神、我れが馴染のおもはくを指折りみれば七十二人并に鹿恋小天神、月影分にいたる迄胸算用にてすみがたし」(元禄大平記・四・二)

◆わけのたゝぬ事 うまく処理できないこと。暗に借金のことをいうか。「わけをたつる 当道において、他の批判にあづからぬやうにする事也」(色道大鏡・一)

◆「さりとは心よはい男かな。其わけたてどは我のぞみいふ事にあらす」(其

磧・禁短氣・四・二)

◆新町 大阪の西横堀川と長堀川の合流点の北西一郭にあつた官許の廓。京の島原、江戸の吉原とともに日本の三大遊里の一つ。「其後寛永第八辛未年、道頓堀より今の新町(しんまち)に遷(うつ)さる」(色道大鏡・一・三)「目前の喜見城とは、よし原島原新町(しんまち)」。此三ヶの津にます女色のあるべきや」(西鶴・二代男・一・一)

◆引はり 對抗すること、競争すること。前項にあるごとく、京の島原と大阪の新町とは並称されることが多かった。「ひつぱり 相對して競ふ意をヒツハリになると云」(俚言集覧)「操狂言の庄屋と歌舞伎の大屋と、引張(ひつぱり)な役さ」(素人狂言紋切形・下)「多羅福屋の親仁とひつぱりにて、ちと浣皮のむけたる女と見ると唯は通さず」(世中貧福論・下)

◆嶋の内 大阪の、北を長堀、南を道頓堀、東を東横堀、西を西横堀で囲まれた一面をいうが、特に、疊屋町、太左衛門橋筋あたりは私娼街で、近世中期以降、大阪第一の繁華街となっており、この地をいうことが多い。「繁花風土記・上」には「此地は花やかなる事を主とせし所なれば流行事はやり、詞衣裳の好み首のかざり身のまわりの事まで一段はやく此里より口切す。身じまひうははしくして氣取なく、器物等のきたひ酒食のあらけき魚物青物に至るまで、初物は此里を過ぎれば手に入がたく、誠に青樓の竜虎にして黄金をかたぶけんと心をゆだぬる人は此世界に入らで又いつくにかあらん」とあり、四方の運河を利用した商業も盛んで、船場(せんば)と並ぶ大阪の代表的な商業地域で、裕福な商人も多かった。「とかく此節嶋の内。御はいくわいかた

く無用といさむれども」(南嶺・丹波与

作無間鐘・四・一」「朝(うつば)の干鯛(ほしか)屋の番頭といふ者。新町嶋の内がよひに親方の手前二三度も不埒な品も有たとの咄し」「秋成・菱形氣・二・一」

◆肩さる 威勢のいいさま。「刃ものでも切ぬ風をば肩て切」「柳多留・一五三」◆口入 仲介。あつせん。「早速に口入を頼み。かの繁野を一夜百疋の相対にて。ひそかに次郎太夫方へ通達すれば」「秋成・菱形氣・三・二」

◆自前 「じまへかせぎ(自前稼)」のこと。遊女や芸者などが置屋に抱えられず、自分の居を定め、独立して稼ぐこと。「乃ち置屋に得意ありて、揚屋以下よりこれを置屋に迎へ、置屋より是を其自宅に迎ふ也。此徒を自前かせぎ飯見世の女郎或は芸子と云也」「守貞漫稿・二一」かけのとれぬ自前の女郎には。もし此銀濟申ぬ時は。五年切て其許の奉公人に成。つとめ申べしと請合をたせ」(南嶺・龍都係系図・一・三二)

◆やみの夜になかぬからすのこゑきけば、生れぬさきの父ぞ恋しき 榊の悟りを詠んだといわれる道歌。作者は一休禪師とも白隠禪師とも足利義政ともさまざまに言われている。「まつくらな闇の夜に鳥が鳴かないでじつとしてゐる。羽音も立てず、鳴きもしないから、本来いるかいなかもわからないのであるが、そこにしつかりと鳥がいて、鳴かない声がきけるようになったら、その時こそ、親のことが全面的に理解できたと言えるし、父母が身近かで自分と一体となり恋しいものとなる。そこではじめて禅の悟りにつながっていくのである」というような教を含むとされる。「よし恨むまじ嘆くまじ。泣くまい泣くまいなかな鳥のこゑきけば、むまれぬさきの我ぞ恋しき」(近松・兼好法師物見車・中)「飲や謳

や一寸先は闇の夜に、鳴ぬ鳥の声聞(け)ば、拾ぬ先の金ぞ恋しき」(源内・根無草後編)「やみの夜になかぬからすのこゑきけば、生れぬさきの父ぞ恋しき 東山義政公の詠なるよし、長頭丸隨筆に見えたり。生下未分といふ冊子には、母ぞこひしきに作れり」(隨筆・三義雄記(山崎美成)・二二)

◆とかぬ帯に客をなかせ、ふらずしてあはれぬ義理づめ 前項の道歌のように、なにもせず客を呼び寄せるさまを誇張している。

◆難波津に咲くや此花 古今集仮名序に出る「なにはづにさくやこのはな冬ごもりいまははるべとさくやこの花」にちなんで此花という源氏名にした。

◆夜かと思へば昼になり、昼かとおもへば月またさやけき 「夜かと思へば、昼になり、昼かと思へば、月またさやけし」(邯鄲)による。

◆物日 近世の遊里における特定の祝日。この日、遊女は馴染(なじみ)の客に売ることを見方から強いられた。客のなるときは、みずからその代金を出さねばならなかった。一方、客は馴染の揚屋(あげや)・遊女に祝儀・物品を贈るのが習わしであった。日は遊廊(ごう)と異なっていたが、月に数日あり、五節供などの生活行事の日や祝祭日と重ねた日が多かった。紋日(もんび)、売日(うりび)とも。「座摩・稲荷・主満・住吉の御祓(はらい)にかこつけけるは、傾国・茶屋・風呂屋の物日(ものび) せはしく」(新色五巻書・五・二)

◆春の花は船遊びのまくに開かせ、紅葉も色こく枝敷の毛氈にかゝり、春夏秋冬万木千草も一日に花さける 「春の花咲けば、紅葉も色濃く、夏かと思へば、雪も降りて、四季折々は、目の前にて、春夏秋冬、万木千草も、一日に華咲けり」

「邯鄲」による。

◆おとしばへ お年延へ。かなりの年配。相応の年齢。「若い者ならば浮気の沙汰共申さるべきが。人に異見もいたすべき年ばへをして。甥などの手前も恥ず申出すから覚悟しての事」(其磧・都鳥妻恋笛・三・三二)

◆明神様 神格の高い神社やその祭神をいう。「明神(みやうじん)号 神宮を上とし、明神是に次。今世俗都(すべ)て諸社を称して何某の大明神と称するものは誤りなり。明神は勅許の号なり。勅許なきは何某の大神、亦、何某の神社と称す」(神道名目類聚抄・四に)

◆なづみ心 なづむは 思いを寄せる、ほれ込む、執心するの意。「なづむ おもひ入(いれ)て執着する心なり。心外(ほか)にあらずして一すぢにかたぶく・(かたち)也。なづむといふもふるき詞なり」(色道大鏡・二)「夜毎夜毎に丸山の廓へお通ひ有て、名山とやら申傾城になづみ給ひ」(歌舞伎・韓人漢文手管始・一一)

◆ひととしたそり橋のお詞一度もこれなく 未詳。「そり橋」は太鼓橋。

◆岸の姫松いく世経ぬらん 「我みてもひさしくなりぬすみのえのきしのひめまついくよへぬらん」(古今集・雑上)による。

◆したゝるい 甘ったるいさま。色(いろ)の方面についていうことが多い。「したゝるき物、あひほれの目もと」(犬枕)「此したゝるいを好むわらは、しらじらしうべつたりとした事をいへば、殊の外悦ぶものぞ」(其磧・禁短氣・五・二)

◆仲居 京阪の遊廓・岡場所の揚屋・色茶屋にいる女中で、客への接待を務めとす。客・芸娼妓を送迎し、客の羽織を畳み、茶酒を運び、座敷の酒席に客と同席して座を取り持つ。登楼した客の意を受

けて芸娼妓を呼びにやり、時には客と芸妓との仲に立ちなどし、諸事客のために働く。夜間は交替して起き番を勤める。「二階座敷、ソレ灯をとせ中居共、お盃お煙草盆と」(浄瑠璃・仮名手本忠臣蔵・七)

◆おむつがり 闇中で女性が喜悅することをいう。「内義はしきりにすゝりむつかり、つゞけつゞけものしける内に」(好色大福帳・二)

◆十二燈 元来は一年十二か月になぞらえて神仏に供える十二本の灯明のことであるが、実際には、その代金として包む銭十二文をいうことが多い。「十七夜代待の通りしに十二灯を包て我身の事すへずへしれぬやうにと祈ける」(西鶴・五人女・三・五)

◆居つゞけ 遊里語。遊女屋に遊び、日を重ねて帰らぬこと。流連。「二度に成り、三度に成り、四度目は面白し。五度目はかはゆふ成り、それから連れも邪魔に成り、十日も廿日も居つゞけたはいいなし」(浄瑠璃・夏祭浪花鑑・二)

◆斎日 命日などに、僧を招いて行う法要・仏事。午前中に法事を行い、午後、供養のために食事を供するのが通例であった。「曲輪にも納豆の匂ふ斎日哉」(太抵句選・冬)

◆ばたきと あわただしく行うさま。ばたばた。「四条五条にほこりこそたて／ばたきとすきや畳の面がへ」(鷹筑波・五)「不断は手をあそばして、足もとから鳥のたつやうに、ばたきとはたらきてから、何の甲斐なし」(西鶴・胸算用・四・三)

◆仕込みおきし 奥の方に置いてある。◆勝手知 中の様子を知っている。内情を知っている。「一見の客取込つれし。戦場の勝手しりにて。コリヤ勝大尽様のお入」(南嶺・魁對孟・三・一)

◆菩薩 遊女。「されば野郎に能筆は稀也。女郎は下品下劣の局菩薩まで、筆の歩みの悪(あ)しきはなし」(其碩・禁短氣・二・三)「初会にはばさつもソントはすに座し」(柳多留・二二八)

◆榮耀にも榮花にも、げにこの上やあるべき「榮花にも榮耀にも、実此上や有べき」(邯鄲)による。

◆はしの子 階段やはしこの一段一段。「たとへば、はしの子を一つづつあがるに、いそがんとて二あがるゆへに、おつるがごとし」(長者教)

◆ぐはつたり 物が倒れたり落ちたり突き当たったりするときの擬音語。「がつたりは、もろくたふれたるかたちか。又物にあたりてかたき音か」(かたこと・五)「昇(かい)て出でたる破れ簾(かこ)広間にぐはつたり」(浄瑠璃・鎌倉三代記・三)

◆きこへぬづくし 「きこえぬ」は「理不尽である。あんまりだ」の意。うらみごとを並べたてである様子。

◆名塩 摂津国有馬郡名塩(兵庫県西宮市名塩)。和紙の産地。室町末頃、名塩村の東山弥右衛門が越前より鳥の子紙・奉書紙の製法を伝え、原料に泥土を混合して変色を防ぐなどの工夫により、名塩紙あるいは間似合紙と呼ばれて全国に広まった。「殊に名塩(なじを)・山口の紙中衆(かみなかしゆ)。愛(ここ)を通るに」(新色五巻書・三・五)

◆半切 半切紙 縦が普通の半分の大きさの紙。現在の半紙に相当する。書簡なども、紙が高価ゆえにこの紙を使用するようになった。「半切紙 縦短く尋常の半分なり、筑前・筑後を土と為す、摂州大坂、同じく山口・名塩多くこれを出す、播州亦たこれに次ぐ」(和漢三才図会・一五)「京大坂とも妓の文は尋常の半切なるに。伊勢ばかり古風のこりて堅文なる

もをかし」(馬琴・蜀旅漫録)

◆二徳 紙入れの一種。鼻紙と手回り品を入れて、外出の時に懷中にするもの。「二徳の用 一に紙入れ二に薬入れ也」(警諭尽・一)

◆輪数珠 三十六個の珠を連ね、輪違いにした数珠(じゆず)。浄土宗で用いる。「こんな事も出にや聞かれぬ。ア、有難い南無阿弥陀仏と。輪数珠繰り繰り出でにけり」(近松・心中宵庚申・下)

◆赤紙 薬を包むのに用いる。「唐人秘密の薬といふ物を。赤紙に包み」(南嶺・教訓私儘言・一・三二)

◆はまぐりの貝入 はまぐりの貝殻は焼いて粉末にし、薬になった。喘息・胸痛・悪寒発熱・陰瘻・煩満などに効能があったという。

◆氣付 氣付け薬。陰瘻用のはまぐりの粉を氣付けに用いようとしたのである。「じゆつない中にも 苦しがつている最中に」「酒をのむとて酒にのまれて、かやうに道中にてころびたをれ、顔をすりむき足を打やぶり、術(じゆつ) なさうな体たらくぢや」(浮世物語・四・三三)

◆まはる 遊里で、遊女が客の意のままに行動する。「まはる 男の氣にちがはじと、女のかたよりしたがつ貌なり。たとへば風車の風にまかせてくるるとまはるやうに、男の心にしたがふなるべし」(色道大鏡・一)「亭主が連飛、花車が蜘蛛舞、下女下男が風車、是れ自然とまはるにあらず、当代金山まぶらめき渡る勢ひなり」(御前義経記・二・一)

◆契情に誠なし 遊女のいうことはすべて商売上のことで、本当の氣持ちではない。この種の言い方は「傾城に誠があれは晦日に出る」「傾城の誠と琴箱の反らぬはない」「傾城の誠と卵の四角なのはなし」など数多くある。「けいせいに誠なしと世の人申せども」(近松・三

世相・三)

◆看板うつて 看板を掲げることから転じて、世間に広く知られていること。有名であること。「足もとへどつかとすわりし有きさまは。追ひはぎの大將と看板打たぬばかりなり」(近松・堀山姥・四)「贅もそゝけて。ねをきとは看板打たる顔つきを」(南嶺・丹波与作無間鐘・一・三二)

◆それをまことにさせぬは、買人の無調法 「無調法」は遊郭での遊び方を知らないこと。遊女がうそをついて客に対するのを、本氣にさせていくのが客の腕というものであり、遊女が本氣にならないのは客の遊び方が下手なせいだ、ということ。「此たびめしつれのぼり、ついでながら粹にもなしてとらせたく思へども、ゐなかのぶてうほうを大せい引ぐしでのぼるもいやなり」(役者談合・京)

◆地 もともとのあり方。普通の「京」。「ヘン其くれへな両用言葉は、おいらア地だ。夜湯(へん)這入る時は、真ッ闇(くら)御免なさいッ、ちよいと客が来れば、コレお茶ばこぼんを持て来いヨサ」(和合人・二・下)

◆がなあるべし でもある。「がな」は巻一の一の注釈に既出。「是も何ぞの因縁でがなあらふ」(歌舞伎・幼稚子敵討)

◆鍵持に難男つれたやう 釣り合わないことのとえ。「鍵持」は武士が外出する時に鍵を持って従う下僕。近世、百石以上の武士になると鍵持一人を従えることができた。「鍵持 大鳥毛対の道具、かゝり第一の者なれば大男にしくはなく、もみ鬚に毛巾着、足拍子一風あり、何れも丈夫のたぐい達者を第一とする、道中におゐて鍵かたげて馬に乗たるは面目もなき次第なる」(人倫訓蒙図彙・一)とあるごとく、大男がよしとされる。「難

男」は難人形のようにやさしげな男。「年の頃二十四五なる男たゞ一人、刀脇指は腰に横たへけれど、けたれてなまぬるき色の白きひな男なり」(東海道名所記・一)「春を重ねしひなとおとこ、一つなる口桃の酒」(近松・曾根崎心中)

◆つむがれた 逃げられた。他の男に乗り換えられたことをいう。「紡は糸をひく也。績はひねりつけること」(増補俚諺集覽)

◆鼻毛をぬかぬ 「鼻毛をぬく」は他人をだますこと。こは、自分のだまし方(遊女の扱い方)が下手だったからだとな得しようとしているところ。

◆もだくだして 思い乱れるさま。「自脈取やらもだくだと居姿くづれてわけもなし」(十二段・三二)

◆契情買は皆おなじ情なるべし いわゆる草子地にあたる部分。

◆大寄 遊里語。大勢の客が、多くの遊女を揚げて一所に遊興すること。「大寄(おほよせ) 客の友どちをあまた誘引して行き、女郎を大勢寄せて、一所に参会するをいふ」(色道大鏡・一)「太鼓の清介が、持つてひらいて、大よせの中に語りぬ」(西鶴・一代男・六・七)「あまつさへ此の比は大寄(よせ)」といふ事を始め、十二軒の風呂屋より十二人の女を選び出し、能狂言の安宅をやつして、面々が身の上を懺悔し、是れ一番を客のもてなしとす」(御前義経記・五・四)

◆上の間三拾余疊敷にしろかねの山をついては金の盃、一盃のめば、五百匁づゝ下され、西の間の縁側三十余枚の障子ぎわには、小判の山をつかせて、しろかねの盃をいだされ、三盃のめば式十匁づゝは、金の日輪を出だされたり、西に三十余丈に、金の山を築かせては、銀の月輪を出だされたり」(邯鄲)をふまえた表

現。

◆むつと 不愉快に思ふ様子。「嵩(かさ)にかゝつた云分をむつとはすれど是非もなき」(浄瑠璃・八百屋お七・中)◆品によつたらば 次第によつては。事情によつては。「品によつたら見せまいものでもないが。マアそれよりはこな様の此懷を」(浄瑠璃・鎌倉三代記・五)◆しりもち かげで力添えること。「てれん上人といふ此宗旨の尻持、強(あなが)ちに女道宗を破して」(其磧・禁短氣・一・一)◆今を春部とかくやこの恥 前出「なにはづにさくやこのはな冬ごもりいまはは

○卷四之一

○一村雨もふりにくい大尽

【梗概】

道頓堀嶋内の茶屋池庄の一室では、此花(吉野大夫)が馴染の明神様と呼ばれる京の大尽といつしよにいる。此花の相手はいやしからぬ人柄ではあるが、白髪の老人である。さて、池庄に着いた養元(友仲)は早速診察を始めた。その姿を物陰から見ていた此花は友仲であることを気づき、自分も「つかえ」が起こつたから見えてほしいと頼む。その声は此花であることを知つた友仲は薄情な女に調合する薬はないとにべもない返事をする。此花は友仲を怒らせた原因の馴染客が、実は住吉左京大夫であることを知らせたいと思うが、住吉左京が友仲を見つけてしまえば、京に連れ帰り左京の娘と一緒にさせることになるだけだと思ひ返し、左京を帰らせたあとで会いたいと声をかけるが、相変わらずつれない返事しかない。そこへ左京があらわれて、友仲を認め、すぐに京に連れ帰り、娘と一緒にさせるという。此花は友仲にすがりついて「やつと見つけた恋人なのに、殺されてはなさない」と嘆く。ここではじめて友仲は大夫の本心を悟るが、とはいっても、こんなにだらし

るべとさくやこの花」の下の句のもじり。◆人の皮かぶつてござれば 人間であるから。「人の皮かぶつた畜生」という諺をふまえたもの。「コレ榮耀(えいよう)がしたさじや皆欲じや。人の皮着た畜生(ちくしやう)めと」(浄瑠璃・新版歌祭文・野崎村)◆のばしてゐた鼻毛 「鼻毛をのばす」は男がほれた女などに気を許してだらしくふるまうさま。「くわをぬかして咄す夜の長ひは燈心、庚申の晩に晩にと言のばした、鼻毛にあらぬ断のかづかづ」(喃本・即興断(寛政六年刊)・序)◆大名の火にくばつた 泰然としている

こと。なにもできないでいること。「けなお子や、ようむつからず氣詰りな辛抱、大名の火にくばつたとの譬への詞に違ひなし」(浄瑠璃・河内国姥火(正徳三初演)・四)◆はまつた ひつかかる。だまされる。「皆人賢過て、結句近き事にはまりぬ」(西鶴・胸算用・一・四)◆ふつふつ ふつつりと。きつぱりと。「医者(いしや)の料理ずきは。医者(いしや)の製法にあらずと。ふつふつおもひきりて」(南嶺・大系図蝦夷断・二・三)◆いふてくれよがし (此花に) 言つてくれと言わんばかりの。

◆輪廻のきづな 深くつながっている故の執着心。「外面似如菩薩内心如夜叉。ゑみのうちに磨(とぎ)とぎすます。刃(やいば)はするどしといへども、輪廻のきづなは切にきられず」(和漢乗合船・二)◆惘然 呆然に同じ。氣抜けてぼんやりしているさま。「そも何とせん、と周章し、惘然として立在給へば」(馬琴・弓張月・二十九回)。なお、「邯鄲」に「ただ惘然と明かし暮らすばかりなり」とある。

ない自分を最後まで聲として認めてくれる住吉左京への義理もありどうすべきか迷っている。大夫は、七首をもつて「自分が死ねば、あなたの一分は立つはず」と死のうとする。それを住吉左京があわて止め、「大夫の本心はわかつた。実は自分の娘は不慮の事故で先亡くなった。それで、大夫の本心を見とどけたうえで、養女として友仲と結婚させるつもりであつた」とあかし、大盤振る舞いとなる。一座も華やき、友仲は昔どおりの大尽遊びにうつつを抜かし、あとは大夫と小座敷でびつたりと添い寝、と思いきや、薬箱持ちの角八の「申し申し」という声に思わず目が覚め、あたりを見ればもとの上塩町の借家。その薬箱にもたれてうたた寝をしていたのであつた。すべては夢であつたことを悟り、大夫が道頓堀に来るはずがないと、なお迷っている自分に涙を流した。

玉の御輿(みこし)に乗りぞこなふて、二度のつとめの吉野の花。また咲きかへす難波津の、梅とひらくや此花が、心にそまぬ思ひぐさ。いかゞしてとけにしや、人品は高上なれども、ぬけばかくるゝほどの薄白髪、色気見えぬ京の大尽明神様とうやまい、かはるなかはらじの心中づくし。池庄が座敷のにぎはひ、めつた打ちのつゆに時ならぬ花さけば、仲居どもが一盃きげんに紅葉も色濃く、

「ひとつたべませう」

といへば、

「小判もふりて、つきてのない無間の鐘が」

とさゝめく最中、中二階より

「上塩町の医者殿のおりさつしやる。それくすり箱」

ととりよすれば、養元ふろしきをとぎ、

「ア、いかふむつかしうござる。ア、お寺様のおちさつしやれたは、眼色即落と申して、一通りの打身ではござらぬ」

と、くすりあはすともしらず此花は、はしこの下にて夜食くひかけて居たりしが、見れば見るほど友仲様にまぎれはなし。「これは」と飛び立つばかりなれども、人目あればそれと知らせたい心づかい。

「申しお医者様、私もつかへがおこりまして」

といふを、ふりかへり、

「さてこそ」

とさじ取り直し、聞かぬ顔にて、

「ム、あのお寺の右の脈が沈にして、却而数のあるは合点がゆかぬ。沈とはしつむとよんで、このやうにしつみはてたる身のはてには、誰がさせたことぞ。沈んでも数く思ひくらせし甲斐もなく」

と、ひとり言いへども、亭主は何の氣もつかず、

「お医者様へ御酒ひとつあげませいで」

と、生貝のふくら煮も耳の所まじりに、むし鱈も頭の所の焼いたをいだせば、いかに銭にならぬ客とて、むかしを思ひ出しながら、

「コレそこな女中様、つかへがおこつたらば、お客様になでおろしてもらつしやりませい。シタガ二階のお寺様もおまへを見てのうちみ。身を打つたは誰もおなじ事ながら、只今このさじにかけてみる甘草のあまみにくいつき、むしがおこつて熱がつよく、寒の内でも紙子ひとへもうとれる医者では御ざりませぬ。犬にのます薬はまたゝびより外しりませぬ程に、つかへがおこつたらば、八百屋へなりともいふてやらつしやれ」

と、また心肝腎肺脾命門ひんしやんと腹たつれば、此花は、「さては、様子をきかんとしてのはらだち」と合点したれば、

「奥なお客は、住吉左京様」

と打ちあかしていひたけれども、それでは友仲様を連れてかへり、娘御と夫婦にせうとあるはしれた事。所さへしれてあれば、はしり込み、自前の自由さ一刻もはやふいなしまして、住吉様にあはせともないと、

「奥にはどの様なお為にわるい人が居やうやら御存もなうて、はやふ御帰りなされませいで」

と人のきかぬ内に、さゝやくほど腹立ちがまさつて、このやぶ医者、

「そもく、さじを手を取つてよりこの方、畜生に療治のけいこいたした覚えはこない」

と、安桑箱の櫓蓋とともにひざれば、此花もさじかげんとりかねての最中、奥の間

より

「此花は何して居るぞ。いねといふ事か」

と、腹たてゝ出らるゝを、あはせまじきとこたつをへだてゝ、友仲をうしろにかくせば、

「かくれまい、友仲。見わすれ給ふか、住吉左京大夫じやが」

と聞いてびつくり。薬箱職ちらし逃げ出るを、大勢にとめさせ、

「貴殿伯父円山悪心と聞き及びし故、お上へ願ひ貴殿をまつ身が方へあづかり置き、そのあとにて円山父子が悪事をあらはし、めでたく国を治めせんと、わざ／＼高使にくだりし所、はやまつて行方しれず。貴殿をたづね出したる上に、何事も取りはからはんと、さまざまに心をくだく所に、けいせい吉野はこの嶋の内に此花と名をかへつとむるよし。さだめて貴殿としのび／＼の通路あるべし。尋ね出して娘と夫婦にせんと、はかりごとの色がよひ。今日あふは娘と縁のつきぬ所。サア／＼京都へ同道申さん」

とあれば、此花は

「いかにも仰せの通りと見ぬきましたれども、友様の行衛、わしがちからではゆかぬ所、おまへにたづねさせてそいたばかりに、一度顔見せてさへ下さんしたらば、ふつ／＼と思ひきりませふと申し上げましたれども、見たればむかしのいとしひ男。殺さるゝとてもはなはせじ」

と、友仲にしがみつき、なくより外に言葉もなし。

友仲もはじめて大夫の心をしり、

「あやまつた。こらへてたも」

と袖をしぼり泣かれけるが、

「住吉殿へは面目もなき対面。これ大夫、そなたの志は詞にもつきぬうれしさなれども、かくまで悪性なる某を婿と思しめして、これまでの御苦労そなたと添ふては侍が立たず。また、住吉殿の心にまかすれば、かはゆさうにそなたの心中も無になる。いかゞせん」

とさしうつぶけば、此花は、友仲が抜いて置いたる、相口取つて抜き持ち、

「わしさへ死ねば、おまへの一分はたちます。息のかよふちは、人の男にせうといふ納得はなりませねば、さらば／＼」

と既にかうよと見へけるを、住吉左京あはてゝとびつき、刃物もぎとり、

「心中見とゞけ申した。ありやうは身が娘は不慮の事にて先月に相はてしゆへ、そちが心中見とゞけ、娘にして、友仲殿にそはせ、播州一国の騒動をも、お上へ願ひて詮議せんと、一度約束したる婿を大切に思ふ心から、かくははからいたる住吉が志、娘にする約束の大酒盛、皆／＼きほへ」

と、くはつと黄なるものまかせ給へば、

「コハありがたし」

としめりけがとれて、めつきりと春めけば、此花は、かたじけないともありがたいと言ふ言葉さへ涙にくれ、

「久しくあはざりし物がたり、つもの事どもゆるりと咄されよ。氣を通せ者ども」と、皆／＼引きつれ大座敷へ出で給ふ。粹な男ぞたのもしき。

友仲はあまりの事に物も言はれず。亭主は、

「小座敷にお床とらせて置きました。マアおやすみ」

とおしやれば、いやでもなし地のねやの盃とりぐに、

「いざや飲まふよ」

と、ふすま引きたてゝ入り給へば、住吉殿は、

「おつ付け迎ひを下すべし。ずいぶん馳走して、附は身が家来方までさしこすべし。

物入に目を付けな。このよし申せ」

と言ひ捨てゝ上京あれば、それより友仲はむかしにかへる阿房殿、いたり遊びはあきらけき、雲龍のとり出大金銀は砂と散らし、ちよつと出る小めろまでも光をかざる御仕着せ物、

「誠に名に聞し寂。光の浄土喜見城もげにこの上はないはづ」

と、大夫とひとつたりと添寝の所へ、菓箱もちの角八が、

◆玉の御輿 「玉の輿」は「美しく立派な輿」。ことわざ「女は氏無くして玉の輿に乗る」によつた表現。富貴の人の妻となり、不相応の身分に上ることをいう。

「女は氏なふて玉の輿(こし)と云ふは、此奉公の事なり」(新色五巻書・一・二)

◆二度のつとめ 請け出された遊女がまた勤めに出ること。また、勤める遊郭をかわること。「お藤は我身をそれに極めて。もとの親方(二度のつとめ)」「秋成・菱形氣・三・二」「博多の廊へ。二度の勤は萬原へなりと、何でも金儲けにするのじや」(歌舞伎・韓人漢文手管始)

◆思ひぐさ はまうつば科の寄生草本で

「申しく」

とおこす声、

「谷町筋の正楽寺様から急に、お見廻なされて下されよとの使」

といふに、眠のゆめはさめにけり。

養元はゆめさめてく、おきあがり見れば上塩町菓箱にもたれ、氣くたびれのところ

く休み、

「さては夢でありしよな。さばかり多かりし仲居たいこ大夫が声と聞しは、となりの噂が夫婦いさかひのひどきなり。にしきの床と見えしは、たゞうす綿の木綿布団、南無三宝く、よくく思へば、あまりなつかしさの夢なるかや。大夫がなんの道頓堀へ出ようぞ。このうへはまだ間短になつた夢見まいものでもなし。げにうろたへまじや、

間短の、夢の世ぞ」

と猶まよふてぞ泣かれけり

祝儀を渡すことを「露を打つ」「露に打つ」と言つた。「めつた」はやたらに。

むやみに。ここは、やたらにたくさん祝儀をばらまいたことをいう。「我世ざかりに七夕の日のうちに六十両露にうちしも」(西鶴置土産・五・二)「逢た夜の・顔が暁の涙と変ずれば、昨日露打し客の今日春あらしの酒傘を貰ふ」(艶道通鑑・四)

◆時ならぬ花さけば、仲居どもが一盞きげんに紅葉も色濃く「春の花咲けば、もみちも色濃く」(邯鄲)による。

◆小判もふりて、つきての無い無間の鐘 「無間の鐘」は浄瑠璃「ひらがな盛衰

記」(元文四年初演)の四段目「梅が枝の手水鉢」による。百両のお金が必要なため、小夜の中山の無間の鐘をついて折る氣持で、手水鉢を鐘になぞらえて打たんと柄杓を振り上げたところ、二階からひそかに黄金を投げた者がいてお金を授かるというもの。ここは、鐘を打ったわけでもないのに小判が降ってきたと騒いでいるところ。

◆眼色即落 目の色がかわっている、というのをむずかしく言つたもの。

◆夜食 夕食。「はなしの中(うち)に小雛は夜食を喰(たべ)かり、主従三人睦ましく食事をなし、小雛は巨燵に入

◆附 勘定書。「錢をとるにははやく来るね。如在(ちよせ)のねへ内だ。こ
う是を取つて付を持つてきさつし」(滑
稽高野詣二・下)

◆物入 費用がかさむこと。かなりの出
費。「世の外聞ばかりに、をくりむかひ
の駕籠、一門縁者の奢(を)こりくらべ、
無用の物入かさなりて」(西鶴・永代蔵
・一・五)

◆目を付けた チェックを入れるな。大
目にみろ。

◆阿房殿 「もとより高き雲の上、月も
光は明きらけき、雲竜閣や阿房殿」(邯
鄲)による。阿房殿は元來秦の始皇帝の
宮殿の名で、華麗な宮殿の形容。

◆いたり遊び 贅を尽くした遊び。「い
たり」は「結構このうえもない。最も贅
を尽した」の意の接頭語。

◆雲龍 前掲「雲竜閣や阿房殿」(邯鄲)
による。

◆小めろ 小女(こをんな)。小娘。少
女。「女郎三人かゝへ。はつめいな仲居
小めろおきならべて。現銀見世の手まは
しよく」(南嶺・教訓私儲育・四・一)
◆光をかざる御仕着せ物 「光を飾る装
ひは」(邯鄲)による。「御仕着せ物」は
遊里で女郎などに与える衣服。また、な

じみの客が、相手の遊女や、出入りする
茶屋の主婦や仲居などに仕送りするもの
もいう。「我(われ)四度の御仕着(し
きせ)に八拾目に定(さだ)め」(西鶴
・一代女・三・四)

◆寂光の浄土 寂光の浄土喜見城もげにこ
の上はないはづ。「寂光の都喜見城の、
楽しみもかくやと、思ふばかりの気色か
な」(実此上や有りべき)(邯鄲)による。

◆須弥山(しゆみせん)の頂にある初利天
(たうりてん)の居城。七宝で飾られ、帝
釈(たいしやく)天が十一万九千人の初利
天女を正妃として住むという無上の遊樂
世界。ともに歡樂の頂点をあらわすとき
の慣用的表現。

◆薬箱もち 往診の時、医者について薬
箱を持って歩く者。下男に近い身分。「天
狗ではなく薬箱持の小平六なり」(秋成
・世間猿・五・二)

◆谷町筋 大阪の町名で、北は天満橋の
南詰から、南は本町橋通りまでの、南北
の道路に沿って延びていた細長い町。北
より一丁目から三丁目まであり、錫屋町
に連なる。行政区画としての町名ではあ
るが、南北に細長くその中央に道路があ
ったので、その道を「谷町筋」と呼んだ。

東側に東町奉行所、西町奉行所、弓奉行
・鉄砲奉行の役所などが並ぶ官衙街であ
る。「昔難波の谷町筋に住ける。小間物
や次郎七といふ者有り」(南嶺・今昔出
世扇・四・一)

◆正楽寺 次節の下敷となつて狂言
「釣狐(こんくわい)」にゆかりのあ
る寺。「正楽寺は佐々木道誉が菩提所、
コンクハの狂言、白藏主が寺也」(風
俗文選・湖水賦)

◆眠のゆめはさめにけり 「眠りの夢は、
覚めにけり」(邯鄲)による。

◆ゆめさめて、おきあがり見れば 「盧
生は夢覚めて」「ただ惘然と起き上がり
て」(邯鄲)による。

◆氣くたびれ 心気の疲労。気の疲れ。
「歩み行て気草臥れしに何も食ふと腹の
減りたも住吉の浜」(仁勢物語・六八)初
旅の子よりも母の気草臥(柳多留・別
編・中)

◆とろとろ休み 眠気をもよおして、う
つとりとなつてゐるさま。「木枕取よせ
とろとろとまどろまるれば」(南嶺・忠
盛祇園桜・五・三)

◆さばかり多かりし仲居たいこ大夫が声
と聞しは、となりの噂が夫婦いさかひの
ひびきなり 「さばかり多かりし、女御

更衣の声と聞きしは、松風の音となり」
(邯鄲)による。

◆南無三宝、よくよく思へば 「南無
三宝南無三宝、よくよく思へば」(邯鄲)
による。「南無三宝」の「三宝」は仏・
法・僧の三つ。元來は仏語で三宝に帰依
する意。一般には、突然の出来事に驚い
たり失敗したりしたときに発する語。し
まった、困った。「南無三宝、瓜百すて
た」(咄本・昨日は今日の物語「藤屋伊
左衛門とよぶこゑす、なむ三ぼうと逃出
れば」(近松・夕霧阿波鳴門)

◆間短になつた夢 間短は下等な遊女。
きわめて短時間に売色するところから出
た名。「惣本寺の鳴原・新町・吉原より件
のごとく正しからざれば、白人・品州・茶
女・臭屋・間短(けんたん)・蹴倒・夜発ま
で、おなじ習に移り行」(艶道通鑑・五)。
こゝは、「ただ邯鄲の仮の宿」(邯鄲)の
もじり。

◆間短の、夢の世ぞと猶まよふてぞ泣か
れけり 「げに有難や邯鄲の、実にあり
がたや邯鄲の、夢の世ぞと悟り得て、望
み叶へて帰れけり」(邯鄲)による。

○卷四之三

○家老の策にかゝる後悔

【梗概】

さて、播磨の方では、有馬岡山が吉野大夫のことを忘れかね、なんとかものにしてようと策略をめぐらしている。飾磨三郎左衛門の所にかくまわれているのを奪い返すために、吉野の伯父に伯蔵主という悪人がいることを知り、彼を仲間に引き入れ、百両をやるから三郎左をゆすって吉野をとりもどしてこいと命ずる。

伯蔵主は武士に姿を変えて三郎左の屋敷に行き、案内を乞う。武士に姿を変えてはいるが、間違いなく伯父であるというので、三郎左は座敷に通す。名前を尋ねられ、とつさのことなので「坊で内左衛門」と妙な名を名乗り、生国も、奥美濃と答えてしまう。そのあと、伯蔵主が「姪を帰してほしい」と言うので、三郎左は「やらす、やらす」と奥美濃方言で答える。が、伯蔵主にはそれが「やる」という意味であることがわからなかったため、すべてウソであることを見破られてしまうが、とりあえず、夜中過ぎに栗殻野に吉野を連れて行くと言つて伯蔵主をひきとらせる。夜中になつて、伯蔵主が栗殻野にやつてくると、約束通り女乗物が置いてあつたが、なかに吉野はおらず、代りに板の書き付けがあつた。そこには、「このことを誰に頼まれたか正直に白状すれば三百両与える」とあつた。岡山約束は百両だったので、迷つた末に、三百両をもらうことに決め、もしだまされることになつても出家姿ならば命までは取られまいと墨染の衣に着替えていると、木蔭から三郎左の家来が出てきて取り押さえ、岡山に頼まれたことを白状してしまう。「三百両くれ」というと、「三百両はやるが、だまそうとした罰金として三百両を取り上げる」ということで、なんにもならなかった。

わかれの後になく男く、後悔のなみだなるらん。

古隠居の骨長有馬入道岡山は大夫が事わすれかね、蔵人かたに居るうちは、さながら恥かしくおもひしかども、傍間三郎左衛門方へ引とりしと聞き、伯父坊主に伯蔵主

といふ悪者ありと聞き出し、「金百両やるべし」との事にて頼まれければ、伯蔵主慾に眼はなく、「このまゝで参つてはなかなか三郎左衛門をゆすりがたし」と、幸芝居をせられし時のつけ髪をかけ、大小をきめこみ、

「姪の事なれば、だましてつれきたり、ひそかにかくまはせ申すべし」

と、やすくと受合、野道をそろくと、三郎左衛門屋敷へといそぐ内にもさしつけぬ。「大小似よふたかしらぬまで」と池水に写して見て

「似よふたく。そのまゝのさむらいじや」と小歌ぶしにてゆく。むかふより、はうかぶりした男式三人行き過ぐるも、「もしや三郎左方の犬ではないか」と心づかひ、とかういふ内に、はや三郎左衛門方に着きけれ。

案内を乞ひ、右の通りを申し入りけるゆへ、「いかにも、伯様といふ伯父坊主はあるが、刀さいた人に覚えはなし」と、連障よりのぞいて、「いつの間に還俗なされしや」とは思へども、外聞いかゞと、

「いかにも伯父御でござんす」

といふに付き、三郎左衛門座敷へ通し、

「御名は」

と問へば、急に侍とは出かけたれども、名の所まで心がつかず、行当りて当惑し、

「手前が名は御自分に御存あるはづ」

といふ。

「これは、ちかごろめいわく千万」

と問い詰められ、

「身が髪は、はへぬきでござるによつて、名も坊で内左衛門、この羽織大小も借物ではない」

と、めつたに臂をはれば、

「御生国はどこでござる」

と問はれ、先程よりなまりちらしたるものゆへ、京とはいひにくき品になりて、

「奥美濃」

と答へ、

「身が姪よし野、これにあるよし。身どもに娘なればつかへり、かゝり申したき」

といへば、三郎左衛門がてんはゆかねども、

「やらすく」

といふを、

「伯父がまいつて、姪を申し受けたいと申すに、やらすとはあまり塩もないあいさつと腹をたつれば、

「イヤサ、いかにもやり申さふが、ちと子細もあれば、よし野に申しきかせては参るまじ。乗物にのせて、いづ方へぞつかはす分にて、粟殻野に棄てさせ置くべし。今夜半比に、それまで御出ありてつれ帰らるべし」

といへば、

「弥、それにちがいはござらぬか」

と、あまりうつくしうゆきたるゆへ

「さらばく、ちと美濃の養老の滝でも見物に御出でなされ。何も馳走はいたすまいが、長良川の鱈の鮓に岐阜酒で申さう」

と、よろこびいさみ帰りしあとにて、三郎左衛門あざわらひ、

「きやつ誠の武士にあらず、そのうへ美濃ものとは大のいつはり。やらすといふは美濃詞にては、やらふといふ事なるに、それをしらず、腹をたてたり」

といへば、大夫は出でて、

「さてく、さすがは御家のかためをなさるゝほどありて、おどろき入りし御事、おち様はぼん様にて京の人」

といへば、

「さこそく」

と俄にのり物一挺こしらへさせ、内へは何か手づからいれて粟殻野へ昇せすてをき、三郎左衛門はとある木陰にかくれて「坊主おそし」とまち居たり。

さても、伯藏主は時節よしと粟殻野へ心がけ出でける所に、約束のごとく女乗物すてありければ、「百両は仕てやつたもの」と戸をひらけば、大夫の事はさてをいて、小めろが一人なければ「是はどうじや」と見まはすに、板に書付をして中につり置きたり。よみて見れば、

「その方儀、人に頼まれ来る段は、刀をかけてゆるす間、あり様に白状してこの札をしるしに持ち来たるべし。褒美として金三百両、相違なく遣すべし」

と書き付けて、銚子三郎左衛門名判をすへたり。「これはまた、円山殿へ頼まれたる

よりは、貳百兩の増金^{ぞうきん}、どちらに義理^{ぎり}もなければ、頼まれし次第^{しだい}を、白状^{はくじやう}せうか」と札を取りにかゝりけるが、「いや／＼、円山殿かたの百兩は握つたも同前^{どうぜん}、三郎左殿のははかりごとかもしれない」と立ちかへらんとせしが、また立ちもどり、「三百兩とは、いかにしてもうまくさい詮索^{せんさく}。いや／＼、三百兩といふ名題^{なだい}にくゝられて、命をとられふもしれず。したが、また首尾^{しゆび}よふいたさば、一生^{いっせう}の楽助となる事、コリヤ思案所^{しあん所}じや。いなふよ戻らふよ」といろ／＼に心ぐるひしけるが、「いや／＼、たとへ三郎左衛門別心^{べっしん}にてとがむるとも、出家^{しゅつが}とありては、よもや殺しはせまい。もとの出家姿^{しゅつがすがた}に仕かへて参らう」と、つけ紙^{つけがみ}をとり、大小をぬぎすて上着^{うしやう}をとれば、墨の衣になりて、かの札を取りにかゝる所を、木陰^{こかげ}より三郎左衛門家来^{けらい}もろとも飛んで出で、「その心底^{しんてい}ならば、いかにも金子はつかはすべし。大かた頼まれたは円山殿であらふな」といへば、

◆わかれの後になく男／＼、後悔^{こうかい}のなみだなるらん「別れの後に鳴く狐、別れの後に鳴く狐、こんくわいの涙なるらん」〔釣狐^{つこ}〕による。
◆さながら、そうはいうものの。さりとて。みすみす。「我家ながら、売るに買手なく、さながら四間口、人に、無直^{たど}」もやられず」〔西鶴・二十不孝・一・二〕
◆伯父坊主に伯藏主といふ悪者ありと聞き出し「かれが伯父坊主に伯藏主と申してござるが」〔釣狐^{つこ}〕による。
◆つけ髪 かつら。近世では、老人や僧が遊郭に行くときなどに用いられた。「付

髪^{かみ}（つけかみ）こしらへて芝居奴の口まねかつて仏の道は外^{ほか}（ほか）より見るもかまはず候」（『万の文反古・五・四』）
◆大小をきめこみ 大刀小刀を差して、武士としての威儀を整え。
◆まで 文末にあつて、確認・強調の意をあらわす。中世末から近世の口語。「ア、ほんにどこでやら落してのけた。誰^{たれ}（たれ）ぞ拾^{ひろ}（ひろ）たか知らんまで」（『近松・心中天網島・中』）
◆小歌ぶし 三味線に合せて歌う歌。「いつもさけのきげんにて、こうたをうたふてかへらるゝけふのふるまいにも、さだめていつものぢふんに、こうたぶし

「何をかくしませふぞ。円山殿より、金子百兩の約束^{やくそく}にて頼まれましてござる。偽^{いつはり}り申した段は御免なされ。白状^{はくじやう}いたし申した上は、三百兩を下されませい」といふを、

「いかにもつかはすべし」
と取つておさへ、

「刀^{かたな}かけてゆるすべきよし、書き付けたれば、命^{いのち}はたすくべし。三百兩は約束^{やくそく}なればわたすべけれども、かたりを申し来りし科料^{くはれう}にとりあぐれば、

出入りなし。おのれがやうなやつを徘徊^{はいかい}さすれば、何事をいたさふもしれぬゆへ、身が屋敷へつれ帰り申し付け様あり」

と、乗物^{のりもの}へぼしこみ、家来^{けらい}どもにかきあげさすれば、伯藏主はこんくわい先にたゞず、われはばけたと思へども、人の悟^{さと}るを知らざりし、心の内こそかなしけれ

にてかへらるべし」と（咄本・軽口はなしとり（享保十二年刊）・三）
◆はうかぶり 衣服・手拭い・布切れなどで頭から頸まで覆い、他人に顔を見られぬようにすること。ほかかぶり。「是なる下郎めは、かゝるはれいの庭なるにほうかぶりはくわんたいなり。色代せよと咎^{とが}むれば」（『近松・出世景清・一』）
◆犬 間者・スパイのことだが、「彼の者が犬などを飼うておいたらばかように参ることはなるまいに、犬を飼わぬがこれが一つのとりえでござる。これはいかなこと。今遠いで犬が鳴いたを、近くで鳴くかと存じ、びつくりと致いた。これ

と申すも心にあやまりがあるによつて、遠いで鳴く犬の声にさえ怖ずるほどにの「（釣狐^{つこ}）」とあるように、化けた狐が天敵である犬をこわがるという狂言「釣狐」の趣向をきかせたもの。
◆連障 窓に方形の細長い木または竹を稜^{りやう}を正面にして狭い間隔に並べ、長方形の子を形作るようにして取り付けたもの。外から見通されにくく、外をのぞくの都合がよい。武家の邸の中門の廊の脇に設け、内より外方をうかがうことをする。「やぶかうじかうじかうじて居つゞけのれんじの窓の北おもて」（『四方のあか』）「床の間やれんじをふきなよ」（『酒

落本・錦之裏

- ◆選俗 僧がふたたび俗にもどること。「和尚選俗して清左衛門とあらためてより。かくれなき大身體」〔南嶺・大系図蝦夷断・四・一〕
- ◆行当りて 突然のこと。
- ◆はへぬきでござるによつて 「つけ髪」をつけていることを気にしているあまりの言葉。
- ◆めつたに むやみに。「人ごとにあれこそ。例の生薬師様よと。めつたに有難がりけるゆへ」〔南嶺・今昔出世扇・一・二〕「めつたには みだりに」〔詞葉新雅〕
- ◆臂をはれば 虚勢を張る。「臂を張ける神主も、ちりちにうせざりて」〔東海道名所記・六〕「山伏も図に乗つて。強ふ見せんと華（こぶし）をにぎり臂（ひぢ）を張り。力（りき）めば」〔浄瑠璃・ひらかな盛衰記・四〕
- ◆なまりちらしたる なまりの多い言葉でしやべりちらした 「旦那が申つてで参つたと、なまりちらかして申したりや」〔咄本・咲顔福の門（其碩作、享保十七年刊）・五〕「詞は通（あつぱれ）万石取り。腰に二腰さしこなす。銀拵（こしら）へもうさんなる。なまりちらして帰りけり」〔浄瑠璃・伽羅先代萩・四〕
- ◆品になつて 具合になつて。事態になつて。「こらへて下さんせ。添ふに添はれぬ品になり。わしや尼になつたはいな」〔浄瑠璃・新版歌祭文・野崎村〕
- ◆塩もない 愛想がない。味が無い。おもしろみがない。「人に塩かないと申ことは」〔咄本・醒睡笑・二〕「謀をしめ出しにする俵の秀郷が智略深き思案は底の

湖塩のないやつこ出立」〔南嶺・忠盛祇園桜・五・三〕

- ◆栗鼓野 不詳。地名辞典等には出ない。
- ◆長良川の鯉の鮓に岐阜酒 いずれも美濃を出身地としたはずみで答えたもの。
- ◆やらす 「行く」を「やらす」というのは、尾張・遠江の代表的方言。「尾張遠江にて、ゆかずといふは行んずる也。馬をやらす、駕籠をやらすなど道中にていふ事也。馬をやらんずる、駕籠をやらんずるなれど、訳しらざる人は笑ふこそをかしけれ」〔物類称呼・五〕
- ◆美濃詞 美濃でも尾張・遠江のように入間詞として利用しており、二番煎じの感がある。
- ◆御家のかため お家を支え守っていく人。「先づ入道殿を誰とか思ふ。一門の棟梁國家のかため」〔近松・平家女護島・一〕
- ◆ばん様 僧や僧形の人の敬称。坊様。「夫よりなかつは、二階に世之介を手引して、久都に取付、尤愛（いと）し）らしき坊（ほん）様、此胸のつかへをさすれと」〔西鶴・一代男・七・六〕
- ◆女乗物 江戸時代、身分の高い女子の用いた上等の駕籠（かこ）。黒漆に金蒔絵などの装飾を施した。「女乗物にも数種あり。惣黒漆に金蒔絵を最上とす。蒔絵は定紋散し、或は定文に唐草、又は唐草のみをも描之敷。予見る物多くは定紋のちらし也。棒、同制也。押縁黒に滅金の金具を打つ。右の製なる物には日覆ひ狸々緋也」〔守貞漫稿・後集三〕「きぬ掛松の下に新しき女乗物、誰かは捨置ける」

〔西鶴諸国咄・二・一〕「女装轎子（をんなのりもの）一挺と、又一挺の十字竹輿（うちかこ）を、折戸口に扛御（かきおろ）せば」〔八代伝・六・六〕

- ◆おろ せば 「八代伝・六・六」
- ◆仕てやつた うまくこまかして自分のものにした。だまし取つた。「或時は、片山陰の柴かりて、適（たま）々手にふれし銀子をしてやり、浦人の塩馴衣をはだかにして、飯にも取る分別計」〔西鶴・一代男・二・一〕「おなつ女郎と清十郎がぬすみ出したぶんにして、してやるやうなぐめんがなと分別すれど、あははぬちゑ」〔近松・五十年忌歌念仏・中〕
- ◆その方儀 手紙や文書などで相手をさすときの形式張った表現。「其方儀、元手を失ひ、大分金など借りたときいた」〔咄本・鹿の巻筆〕「其方儀心ていなをり候よしきこへ候」〔酒落本・錦之裏〕
- ◆段 引用文を受けてそれに体言の資格を与える形式名詞。こと。とき。書簡文などに多く用いる。「亭主が胸に應（こた）へ」〔欲の段は退（の）けて〕〔其碩・禁短氣・三・三〕
- ◆増金 割り増し金。「日増の大入に前々日よりいひ込でもさんじきはなく、直段（ねだん）増金（ましきん）なけねば手にいらぬ近年にない大繁昌」〔歌舞伎・錦面姿・下〕
- ◆握つた 自分のものにしたのと「埒（ら）の明ぬ振手形を銀の替りに握（にぎ）りて、年を取ける」〔西鶴・胸算用・一・一〕
- ◆うまくさい うまそうな 「アレ見さつしやれ、旨臭（うまきさ）い船では無いか、如何様雌（めん）ばつかりの遊山船」〔浄瑠璃・道中亀山断・一〕

◆名題 名目。名前。「此嵯峨の下屋敷へ。茸狩といふを名題にして。やかたを出野遊にことよせ」〔其碩・風流宇治頼政・四・二〕

- ◆桑助 のんきに暮しを送る者を、人名に擬している語。「扱もかるき身体、外より見てのくるしみ、内証の楽介（らくすけ）各別ぞかし」〔西鶴織留・二・四〕
- ◆かたり だますこと。詐欺。「或はかたり、鳩のかひ、追剥押入（まの）のはひのねだれ取」〔近松・峨歌かるた・五〕「世の中ので女郎買ひの騙（かた）りと云ふはこの客連（つら）が事でござる」〔其碩・禁短氣・五・三〕
- ◆科料 近世の刑罰の一で、罪を金銭で償わせること。將軍吉宗が始めた制度。「七拾五ヶ郎の名主役取上られ、組頭は五貫文づゝ過料なり」〔狐塚千本鎗〕「うちが国（くに）さあじやア、から取違（とりちげ）へても過料（かれう）のヲつん出すものを」〔酒落本・世説新語茶〕
- ◆ぼしこみ 押し込み。ぶちこみ。
- ◆こんくわい先にたらず 「後悔先に立たず」のもじり。「こんくわい」はきつね。その鳴き声に基づく呼び名。また、狂言「釣狐」の別名（鳶流および「狂言記」ではこの称を用いる）でもある。「あのやうなきつい目にあふなら火を付まい物と、いまはこんくわいにあるとはいはれた」〔咄本・軽口ひやう金房（元禄刊）〕「卦（け）は坤（こん）の卦、坤なこんくわい、俗に申す狐（けつね）、則狐福（けつねぶく）と申て」〔膝栗毛・八・中〕

勸進能舞台 五之卷

目録

乱

第一 我女房に孝あるによつて

珊瑚珠の接様をさつかりても

御褒美をくれぬこそ断やしら化のおやち

◆乱 能楽用語で、「驚」と「猩々」だけにある特殊な演出の舞。笛を主調として大小の太鼓ではやす緩急変化の激しい難曲。また、能「猩々」そのものをさすこともあり、ここはその用法。以下、曲名としては「猩々」を用いる。謡曲の「猩々」は五番目物で、世阿弥作。唐土の金山（かねきんざん）の麓、揚子の里に住む孝子高風（ワキ）が、霊夢により市で酒を酌い、富貴の身となる。市ごとに来る者があり、いくら盃の数を重ねても顔の色が変わらないので名を尋ねると、海

中に棲む猩々だと答える。そして、高風の人柄をめで、無尽蔵の酒壺を授けるといふ内容。現行曲中最短編であるが、めでたい内容なので、最後の巻に用いるにはふさわしい。なお、この巻には、狂言は用いられていない。

◆我女房に孝あるによつて 「さてもわれ親に孝あるにより」「猩々」による。

◆しら化 弱点などをわざとあかして、率直らしく誠実らしく見せること。すぐばけ。「直化（すぐばけ）実事（じつじ）にはあらず是は手だての内にていひまは

第二 御家の宝只今返しあたふるなり

蔵人が心直なる事竹の葉の

さかさま異見円山が身の果

第三 有難やこの国にふたりの美女

毎日の酒宴にあしもとはよろくと

しても金の泉は湧き出づる繁昌

さずありのまゝにいひてきかしむる謀也。白化（しらばけ）：直化（すぐばけ）と同じ（色道大鏡・一）。「只白化（しらばけ）に：辻談義も仏のまねの口をあき、つまる所は喰はねばひだるいひたるいといふにぞ、ありのままなる法師とて人皆勸進をとらせける」（西鶴織留・一・二）

◆只今返しあたふるなり 「只今返しあたふるなり」「猩々」による。

◆心直なる事 「心素直なるにより」「猩々」による。

◆竹の葉の 「竹の葉の酒」「猩々」による。なお、竹はしばしば真つすぐなものにたとえられる。「竹ほど直（すぐ）なる、物はなけれど」（隆達小歌集）

◆さかさま異見 子が親に意見すること。前項「竹の葉の酒」から「さかさま」と続けたもの。

◆あしもとはよろくと 「足もとはよろよ」と「猩々」による。

◆金の泉は 「泉はそのまま、尽きせぬ」「猩々」をふまえるか。

○卷五之一

○我女房に孝あるによつて

【梗概】

有馬藏人の屋敷に京都西陣の香具屋で風来というものが訪ねてくる。広間で話を聞くと、割れた皿を接目のみえないように修繕する秘伝を知っているという。人払いをして詳しい話を聞くことになり、風来がふところから秘伝の書付を出そうとするやいなや蔵人はすぐにとつておさえ、家来の新三郎に縄で縛らせて奥に連れて行かせる。そこへ隠居の円山がやってきて、早く京に行つて継目の参内をすませてしまえ、とせかせる。かつまた、お家重代の宝である珊瑚珠の皿についても、京都の細工人風来という者に偽物を作らせてあり、三郎左衛門のところにあつて割れたと言われているのはそちらの方であること、本物は自分のところにあることまでも明かし、紫のふくさの中から本当の皿を出して見せる。驚きながら蔵人は、「そこまでの計略を立てていながら、なにゆえ吉野に迷つたのか」と聞くと、円山は、友仲をおびきよせるための方便であると言ひ訳をしたが、「ではなぜ明石貫左衛門を斬り捨てたのか」と迫られ、最初ははかりごとであつたが、いまは本氣になつてしまったのだと告白する。そして、「いずれにしても、早くこの皿を持つて参内せよ」と言ひつつ宝の皿を蔵人に渡した。それを受け取るや、合図の太鼓が鳴り、住吉左京大夫とその娘姫和歌の前、赤松家の若殿友仲、家老加古川右近・鏑間三郎左衛門が蔵人の後見役生田新三郎に先導されて入つてきた。

「これは、もろこしではなけれども、かねきんを織る西陣に、香具屋の風来と申す商人にて候ふ。われ妻に孝あるにより、不思議の夢を見たにまかせ、有馬藏人殿へいそぐ」といふて、取次をもつて目見えをねがへば、蔵人は日夜のおごり、身の程をわすれ、

「大酒の上の手討、大盃を持つて杓取りそへ、老せぬやくすりの名をも菊の水、盃も浮み出でて思ひよらぬ大名となるぞうれしき」と座に付かるれば、一家中うやまひかしづく末座へ、くだんの風来を召し出だせば、

「おそれながら、私義は香具屋で御ざりまするが、殿様へひそかに申し上げたき事これあり、まかりこしたり。その子細と申すは、うすくうけたまはれば、『御家の重宝玉の皿われ申したる』と、どこともなしに嚙御座候。それにつき、ふしぎなる靈夢をかうふり、その皿を接石うるしを致し覚へ、ひとつもつぎめの見へざるやうにいたす口伝を申し上げたく参上いたしたり。大切の義なれば、このつぎ様は人ばらいをなされて、ひそかに御きゝも下さるべしや」といへば、蔵人その意得ずながらも、

「神妙く、褒美は望に任すべし。皆くつぎへ立て」と、一間をたてこめ、

「シテ、その方は」

と近よれば、件の商人懷中より書付を出だせば、蔵人読みも終らずかいぐつて取つておさへ、

「人やある」

とよぶに、家の子新三郎つとまいれば、

「縄持つて参れ」

と、高手小手にいましめさるぐつわかくる。

「御隠居円山様の御入」の義、くだんの縄つきはおくへひかせ、蔵人いで向へば、

円山上座になをり、

「わか殿友仲国遠あつて日数もあれば、はやく上京あつて継目の御礼申しあげられ然るべし」

と、悪人ながらも子をおもふ心の闇に迷ひ、そのうへ人を遠のけ、

「今までは深くかくして申しさかさなんだ。そちもしる通り友仲父は身が為には兄、身が事は知行一万石をわけて有馬をあておこない置かれたれども、不断兄友成が側にありしが、兄友成が病中に家の重宝なれば祈禱ともなるべしと、三郎左衛門かたにこれある玉の皿を取りよせ、いたゞき申されたる時より、何とぞあの皿をぬすみをき、その方にゆづり、この家國をとらせたく思ひ付きし故、京都より玉細工人風来といふ者をよびよせ、結々珊瑚珠を数千くだかせ、つぎめ見へぬ様に仕立させて似せをこしらへ、取りかへをくともしらず、友成殿病氣つりのりし時、手づから似せ物ともしらず、三郎左衛門へわたし給ひて、あへなくなられしゆへ、三郎左衛門この騒動に取りまぎれ、まことの皿と心得、大切に預れども、根がつぎ物ゆへ、腰元の女が砕きたるとの義、さもあるべし。しかれども念を入りて見とゞけしは、三郎左衛門めに氣をつけさせまじきため、おもてむき詮議をつよくせぬも、真の皿はこの方にある故なり、早くこれをもつて上京し、一國を手に入らるべし」

と、錦のふくさより真の皿をいださるれば、藏人はじめておどろき、

「扱く父の御計略かんじ奉りたり。左程のふかき御心にて、何とて吉野風情が色にはまよはせ給ふ」

といへば、

「されば、もちろし薄陽の江には狸々といふけたものあり。狸人これをとらんとするには、壺に酒をたゞへ、盃杓をそへおけば、はたして酔いたる所をとらるゝとは知りながら、この酒に心みだれ、つゐにかりうどの手にいるよし。友仲をつりよせてうたん為に吉野を寵愛と、ばつと沙汰をさする思案、まったく色にはまよはぬく」

といへども、

「いやく、その分ではすまぬ事がござりまする。明石貫左衛門が吉野に深ひと御聞なされて、うつてすてられし御心はいかに」

と問はれ、

「サアそれは」

「サアそれは、どうで御ざりまするぞ」

と問ひ詰められ、

「あり様は、初のほどは、はかりことであつたれども、見るにまし、思ふにまして、命かけて忘れぬやうになつた故の倍氣じや。よしない詮議せずとも、親がこの憂き苦勞して、ぬすみ置いたる皿を持つて上京せよ。大名の御隠居ともいはる身が契情一人手にいれずにはをくまい」

といへば、

「しかれば、モウその外に仰せらるゝ事はござらぬの」

と、言葉に釘さし、宝の皿を請け取り、かけをきたる相図の太鼓をたゞけば、住吉左京大夫おなじく姫和歌の前、赤松の若殿友仲を始め、家老加古川右近鋳間三郎左衛門、上下いため付きて、藏人おとな役、生田新三郎さきに立つて、千秋万歳を謳ひつれ

◆我女房に孝あるによつて「さてもわれ親に孝あるにより」「狸々」による。
◆これは、もろこしではなけれども、かねきんを織る「是は唐土かね金山の麓、楊子の里に住まゐる高風と申者にて候」「狸々」による。「かね金山」は同音異字の「徑山(二コミチキンザン)」と區別するための慣用的な呼び方。単に「金山」とする本文も多いが、本注釈では、この箇所を「かね金山」とする『謡曲百番』本文による。「いでや文蔵が先祖は、唐土(もろこし)看經山(かねきんさん)の麓楊子(やうず)の里にて」「好色万金丹・一・二」

◆かねきんを織る西陣 ポルトガル語 *canéquin* より生じた語。固くよつた綿糸で、目を固く細かく織つた薄地の布。白足袋、簞司(たんす)の内敷、その他衣料として広く用いられる。「幅三尺より四尺五尺までも段々有。丈五丈位より七八丈拾丈までもあり。白なり。地合うつくしく糊つや光有て、尤染付よろし」「万金産業袋・四」

◆香具屋 名香や香道具を売る店。「一度も焼(たい)ては聞(き)かず、もらひ溜(ため)て近所の香具屋へ安く売て」「(其積・禁短氣・一・二)」「香具やに問夫(まぶ)がある」と廊中へしれたら」「(秋成・世間猿・四・三)」

◆風来 「狸々」では高風。

◆われ妻に孝あるにより不思議の夢を見るにまかせ「さてもわれ親に孝あるにより、ある夜不思議の夢を見る」「狸々」による。

◆老せぬやくすりの名をも菊の水、盃も浮み出でて「老ひせぬや、葉の名をも菊の水、さかづきも浮かび出て」「狸々」による。

◆靈夢 神仏の告げが現れる不思議な夢。「暫まどろむ枕の上に、あらたなる靈夢をかうふる」「咄本・新竹斎」

◆石うるし 漆の木の枝からかき取つたままで精製しない液。せしめうるし。粘りが強く、上質で、石や器具などの破損したものの修理に用いる。「凡そ木器、磁器の破(やれ)たる者は、漆を以てこれを接継す。則ち離るべからず。復びこれを離さんと欲する者は、蕎麦ガラ(そば)の灰汁の中へ投浸れば、其器則ち離るべし」「(和漢三才図会・八三)」「ひとつたりだきつかしやんすやいなや。とんとすいついてはなれぬ股ぐらのあはび石うるし石うるし。内裏(だいり)様御はんじやうの吉左右」「(浦島年代記・二)」「くつついて痛がる物なら狼の生れがはりだらう。取付て離ねへなら狐さま。引付て離ねへなら石漆(いしうるし)」「(浮世風呂・三・下)」

◆子をおもふ心の闇に迷ひ「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬ

るかな」「(後撰集・一一〇三・藤原兼輔)」による。子を愛するあまり、親が思慮分別を失うこと。子に迷う闇。子を思う心の闇。子の道の闇などいろいろの言ひ方をする。「大いなるかな。親愛切たり親たりといへり。塩やき藤太が母は。子を思ふ心の闇にかきくれ。お濱にあひたふござりまするといへば」「(南嶺・魁對孟・五・一)」

◆あておこない置かれたれども 領地を割り当てておいたが。「御墨付粉(まぎ)れなく、何々の郡を充行(あておこな)はる」「(庭鐘・繁野話・四)」「さるによつて忠義の武士に充行(あておこな)ふ知行も」「(浄瑠璃・鎌倉三代記・二)」

◆玉細工人 いろいろの玉や石を材料にして細工する人。

◆緒々 名袋や印籠(いんろう)などの口を締める紐に付ける具。球形、その他の形があり、うがつた孔に紐を通し、これを袋のほうへ動かせば口が締る。裝飾をも兼ね、玉石・金屬・象牙(さうげ)・珊瑚(さんご)・蜻蛉玉(とんぼだま)・種子の皮殻など種々の材を用い、彫刻、象嵌(さうが)んなどを施したのもある。「さんごじゆのをしめをさげ、何とぞして、是を人にひけらかしたいと思ひ」「(咄本・私可多咄・二)」「珊瑚(さんご)枝玉といふは枝の形ながら、すぐひも通しをぬきて緒(じゆ)にす」「(万金産業袋・三)」「又

淡青色の硝子にて、をじめの如き者をこしらへ桜花の画あるあり、俗にくすり玉と云」「(重訂本 草綱目啓蒙・四)」

◆されば、もろこし潯陽の江には狸々といふけだものあり。狸人これをとらんとするには、壺に酒をたへ、盃杓をそへおけば、はたして酔いたる所をとらんとは知りながら、この酒に心みだれ、つゝめにかりうどの手にいるよし。この説話は謡曲「狸々」とは別の中国の狸々伝説による。「狸々は……性酒を嗜む。人これをとらへんために、路側に酒と腰とを設く。初めは我れを擒にする謀をしれども、嗜みの甚だしき遂に指を獲に染むること数度に及び、大酔の餘り腰をさげて舞ひ戯れ、遂に術中に陥りて擒となると見えれば、嗜むこと甚だしきはしるべし」「(古今要覧稿・六)」

◆倍氣 嫉妬(しつと)すること。「ささらせまじき物は倍氣(りんき)」、是(これ)女のたしなむべきひとつなり」「(西鶴・一代女・三・二)」

◆上下いため付きて 上下をつけ、頭髮をきちんと整えた、いかめしい身なりをして。「むかし伽羅の油にいたため付たる頭も、白き烏丸通に」「(浮世親仁形氣・二・二)」「軍蔵は上下いため付て。いんぎん成亭主ぶり」「(南嶺・花樺巖流島・一・三)」

○御家の宝只今返しあたるなり

【梗概】

蔵人は友仲との再会を喜びつつ、これまでの経過を語る。それによれば、すべては、友仲に無事跡継ぎをさせるためであり、そのためには、父円山から本物の血のありかを聞き出さねばならない。血が割れたとうわさをはじめすべては、そのための計略であつた。右近や三郎左も最初のうちは私の本心を疑つていたが、円山の一味に加わつていないことがわかつてからの二十日ほどは腹を割つて相談をしてきた、というのであつた。すべては円山の悪心から起こつたことが明らかになつたので、右近は、こうなつた以上腹を切るしかないだろうと円山に迫る。円山も覚悟して、友仲の手にかかつて切腹したいと願ひ出たが、「自分の父親に切腹させるわけにはいかない、代りに」と蔵人が名乗り出ると、円山が宝の血を奪ひ取つて、「親の心子知らず」とはこのこと。せつかく切腹とあざむいて友仲を切ろうとしていたのにもうこうなつては、自分に刃向かうとこの血をみじんにくだくぞ」とおどす。皆々困つてゐるところに蔵人が出て、「わかつた。では、自分は父に一味し、左京大夫と友仲はだまし討ちにいたします」と言ひつつ、さきほどから奥に縄で縛つてあつた風来を呼び出す。彼は、「にせ血の代金をなかなかくれないので、偽の血を二枚作り、本物は自分のところにある」と告白する。くやしがる円山から右近が血を奪ひ取つたのを見とどけたうえ蔵人は、「でかした、でかした。偽物を二枚というのは、いま思ひついた計略。父上、お覚悟」と言ひつつ、円山の腹に刀を突き刺す。円山は息が絶えるが、その直後、蔵人も親を手にかけたうえは生きていられないと、自らの腹に刀を突き刺した。皆は、あつたばなその最期に感じ入るばかりであつた。

蔵人はひざたてなをし、

「久々にてこの友仲殿にあふぞうれしき、この友仲殿、御国遠と聞くやいなや、有馬より罷り帰り、様子を聞けば、なさけなや、親人のゆへとある。南無三宝と思ひしか

ども、諸家中の心底もはかりがたしと、白紙に連判させ、一人くためし見て、判形

のうへの誓紙の文は若殿を尋ね出だし、家國を継がせんとの一通、兼て左京大夫様へも写しをのぼしたれば、まれ人も御らんずらん。月星とくまなくみがく蔵人がたまし

ぬ、これおち様三郎左衛門へ御わたしなされたるは、似せ物といふ事、三郎左衛門合点なれども、大殿御死去のみぎり、ぢきに御渡しなされたれば、詮議もなりがたく、わ

ざとくだけたとの披露は、事をのぼし、その間に真の血を詮議し、出ださんとの深き思案。うたがひふかき親人のころを計り、井筒より幽霊の出るとり沙汰に血を破

つたるにちがひなきしるしを見せ、『似せの血をもつて継目をすまし給へ』といふに、『にせ物にてすます料簡何ともがてんゆかず。似せ物を請け取りて、それなりにすま

すべきはずはなひが、さては真の血は円山殿かたにかくし置かれたるゆへに、せかれぬよな』と、それよりこの蔵人までをうたがひ、三郎左衛門右近が様々の計略、

身が心の親とひとつでない所を見とどけ、廿日ほどこのかたは打わたつての相談、親の悪子をあらはす事、孔子の教にもはづれ、孝道にもそむかなしさに、この家國

にはかへられぬゆへでござれば、向後御心を改めらるべし』といへば、三郎左衛門も、

「只今蔵人殿の仰せらるゝ通り、御手前様に真の血はありと見付けし故、だんくのはかりことをもつて、不便や、科もない井戸堀までをころして、手づよく拙者がに

せ物をくうて、真の血と思ひこんであるていを見せましたも、今日といふ今日、こなたの白状を聞き、あの真の血を別条なく出させうばかりでござつた。何と右近さ

うではないか」

といへば、

「いかにもく、京都へ人を上せ。後日の証拠のため、住吉様をよびくだし、友仲様を難波よりひそかによびかへし、すなはちいひ名づけの御姫様をみつゝにむかへとりて、藏人殿と心をあはせまかりありしに、皿が手に入るからは、浮世に用のないお身、御子息藏人殿の誠ある志に免じ、罪におこなふべき所なれども、いさぎよく切腹く」

とおつとりまはして、つめ腹きらさんときしめければ、三郎左衛門は、

「むかしが今に至るまで、若殿の契情ぐるひを中へ入れた騒動に、系図の一卷か宝の一品のないはまれなり。さしづめ子ゆへのまよひなれば、実悪といふ中にも、近年藤川武左衛門以後、老人悪のまれものもなければ、切腹でお仕廻なさるれば、黒の上々吉まではおうけ合申す」

と、ちかきたとへを取つてのがさぬ鉢、さしもの円山ほつきりと悪心折れ、

「あやまつたゝ、何も外にいふ事はない。サア友仲の手にかゝりたいよつて首うたれよ」

と、おしなをらるれば、藏人は涙をつゝみ、

「若殿へ申します。いとことは申しながら、さしあたつて、本家の御自分様親が悪心不届にはおぼされんか。これまでに心をつくしたるこの藏人に、御心をゆるされ、親円山一命は御助下さるべし。そのかはりに、藏人切腹仕つらん」

と、持ちたる皿を下に置き、腰刀に手をかくる間に、円山とびかゝつて皿をばいと

「エ、親の心子しらずじや。ナアその方を世にたてんと数年の工夫、身があやまつた首うたれんとはいつはり。友仲がよる所をぶちころしてしまふ分別。藏人の不孝者め。もはや親子の縁もこれまで。くたばりたくは、くたばれと、いつでも身に刃むかはど、この皿をたつた今みぢんにくだくが」

と、左にかひこみ、

「サア大夫を身が心に任せ、一國は身が物とあがむるか。何とく」

といへば、皿を質にとられしにはこまり、手を出しかねて、皆く見あはす所に、藏人しさつて

「ア、おやち様、はやまり給ふな。おまへの悪心のすわつた所を見とゞけふ為でござつた。また、左京大夫友仲はだまし討と存じ、はかりよせましてござる。こなたにあはすものがある」

と奥へかけいり、しばらくして、さいぜんの縄付をひきたて出づれば、円山見て、

「ヤアその方は先年玉の皿をすりかへし時の細工人よな。その方かたへ礼物おそなはるとて、たびくの催促、さては世倅かたへ願ひに出たをとらへられたるか」

といへば、藏人、

「にくいやつは、この玉細工人でござりまする。こなたの仰せ付けられで、玉のさらを似せさつしやる時、真の皿はきやつがぬすみ、式枚ながら似せものをこなたへわたし置いたとの注進。御礼物延引も、にせ物と御心のつきしゆへと存ずれば、ちか頃恐れいりたれども、すりかへ置きたる真の皿をさし上ぐべし。金子を千両くれよとの書付をもち来りしゆへ、からめ置きしといへば、かの商人さるぐつわはませられなが

ら、たゞ辞儀する外ぞなき。

田山、もちたる皿を下にをき、

「さてくにくきしわざ」

と縄付のもとへよる内に、右近かけより、玉の皿を引ききたくれば、蔵人は、

「できたく、こいつは細工料延引の願いに出でた分。似せ物をくはしたとは、当座

の計略。親者人、もうのがれませぬ」

と、よるかと見へしが、刀抜き持ち、親田山がどうばらへつゝこめば、つかれなが

◆この友仲殿にあふぞうれしき「此友に逢ふぞ嬉しき」(「狸々」による。

◆親人 親のこと。「梶原源太懷中より封じ文を取出し。親人平三殿のお文でござりませう」(南嶺・魁對盃・一・二)

◆ためし見て「かかると切れもの彌々ためし見たきとて主人屋敷にて様(ため)しものありし節」(「耳袋」)

◆判形 書き判、また、印形(いんぎょう)。「相果し源十郎が筆判形ともに疑ひなし」(近松・五十年忌歌念仏)

◆まれ人も御らんずらん。月星はとくまなく「客人も御覧ずらん 月星は隈もなし」(「狸々」による。

◆みがく かがやかす。光を添える。「月に璧(みが)ける玉津島、光も今はさうでだに、長汀曲浦の旅の路」(太平記・五・大塔宮熊野落)

◆せかれぬよな 急いではいけない。「せくは」あわてる、狼狽するの意。「其日のお敵権七様御出と呼つぎぬ、すこしもせかず、火燵の下へ隠れけるこそ」(西鶴・一代男)「アアせくまいせくまい早

う早うと女がいさむをちからぐさ」(近松・心中天の網島)

◆だん／＼の 次から次へと。いろいろの。「身にあやまりあればこそ、だんだんのわびこと」(近松・心中天の網島)「戸塚の宿にて万屋(ばんおく)が行脚よりのかへりに出あい、だんだんの物語をする」(黄表紙・高慢齊行脚日記)

◆手づよく 氣強く。きびしく。「放せ放せとあせれ共、こなたは手強き忠義の一図」(浄瑠璃・神靈矢口渡)

◆にせ物をくうて にせ物をつかまされて。「くう」は、(好ましくないことを)身に受けるの意。「生血をとる、こちへおこせとは法を知らぬ雑言、権威をくふ男でなし」(浄瑠璃・浦島年代記)

◆みつ／＼に ひそかに。「禁裏へも伝奏の御方へ、密々(みつ／＼)に此旨仰遣はされしかば」(和漢果合船・二)「わかい者では名が立つとて、みつ／＼お心にしたがつたゆへ」(南嶺・大系図蝦夷断・四・一)

◆おつとりまはして しつかりと捕まえて。「十人ばかりむらむらと、てん手に

ら蔵人が髻をつかみ、

「よし家国はともかくも、思ひかけし吉野が事、死ぬる今はも忘れぬ」

と苦しむを、「えぐり刀を抜けば、息絶へたり。かへす刀に我脇つば左より右へ引

きまはせば、親を手にかけてめたりとも、いきて居べき道ならねば、皆く惜しむぞ

道理なる。

立腹切つたる蔵人が足もととはよろ／＼と、よりはりふしたる夢の世界。あつはれ義あり節あり／＼、各感じ入りにける

わり木ひつさげひつさげ、追取廻す」(浄瑠璃・傾城酒呑童子)

◆つめ腹きらさんと 責任を取らせるために、いやおうなしに切腹させようと。「急ぎつめ腹きらするに、但しひそかにさし殺すか」(近松・堀山姥・三)

◆ぎしめけば りきめば。勢いづけば。「聞よりはやくかけ出、かのものか宿を、両どなりへ理り、めいわくさせんなどぎしめくを、人々やうやうにとどめ給ふを」(是薬物語)「某をちくしやうとはすいさん也とそりをうってぎしめけば」(浄瑠璃・当麻中将姫)

◆実悪 歌舞伎の役柄で、敵役のうち、残忍で意志強く、後悔や憂心するなく、終始一貫悪役に徹する役。「伽羅先代萩」の仁木弾正、「絵本太閤記」の武智光秀などがその代表。「今少身のとりまはしにりかうあらは、じつ悪のつめひらき合合してくらしき風俗」(評判記・野郎にぎりにくぶし)「実悪といへると、染川十郎兵衛といふ人、其身実事仕にて、初て山椒太夫の三郎の役をしけるより実悪といふ」(歌舞伎事始)「授悪方

にも五等ありて実悪、色悪、実敵、半道、平敵と頒(わか)つ也、実悪を先第一として、此内にも鉢用真飯の二ツ自然と頒れて、鉢真の実悪とは一体少しもそけず、位重の所を専らとして謀叛人似勅使(にせよくし) 杯やうの大敵を勧るをいふ」(劇場一観頭微鏡)

◆藤川武左衛門 元禄期の京都で活躍した実悪の名優。享保十四年没。「暮れて行くとし浪の心よく、名残の芝居見て、大和屋甚兵衛・宇治右衛門・藤川武左衛門・坊主百兵衛などひとつに」(西鶴・名残の友・五・五)「曹操王莽のあく人方は藤川武左衛門でなければと」(秋成・世間猿・四・二)

◆まれもの たぐいまれな人。傑出した人物。「天晴(あつぱれ) 天下の稀者(まれもの)やと、扱褒めぬものこそなかりけれ」(浄瑠璃・頼光跡目論・二)「色道まれもの寄つたこそ幸」(西鶴・一代男・六・二)

◆お仕廻なさるれば 終わりにすれば。「しまう」は「やり終える、しとげる、しますす」の意。「追付、勘当帳に付て

しまふべし」(西鶴・五人女・一・一)
 ◆黒の上々吉 歌舞伎評判記では、「上」
 「上上」「上上吉」「大上上吉」「真上上
 吉」「極上上吉」などの評語を用いるが、
 白抜きの上「上」「吉」などに対して、黒
 の「上」「吉」などを用いて、白抜きよ
 り上位を表した。これによる表現で、で
 きばえがこの上もなくよいことを表す。
 「上上黒吉」などとも。「やうやうから
 き命をたすかり、黒極上々吉飛切の、め
 でたき御代こそありがたき」(黄表紙・
 孔子編干時藍染)「故に評書に上上黒吉
 と成」(秀鶴草子)「此両役も古代は名人
 ありて、既に中古沢村源次郎などは花車
 形にて黒の上上吉に至りし也」(劇場一
 観頭微鏡・親仁形花車形之説)
 ◆ほつきり 堅く持っていた意志などが
 くじけるさま。「きふい人ぢやが、ほつ
 きとをるゝ人也」(史記抄・季布縶布伝)
 「盗人のぼつきとおれし初一念」(俳諧
 けい・一一)
 ◆あやまつたあやまつた 降参したとき
 に発する語。まいったまいった。「いか
 にもさふじや。あやまつたあやまつた。
 機嫌を直したも」(近松・傾城壬生大
 念仏)「兄弟なればこそ異見もいふ。あ
 やまつたあやまつた、あやまつたはい
 (歌舞伎・助六)「金はわきものとはよ
 く云つたものだ、かう湧れてはあやまる
 く」(孔子編干時藍染)
 ◆をしなをらるれば「おし」は接頭語。
 正しく座に着くと、覚悟して座に治ると。
 「そのとき、さだみつおしなをって申あ
 ぐる」(浄瑠璃・源平武將論)
 ◆腰刀 腰に差す、つばのない短い刀、

栗形に折金をつけ、幅子(そえこ)とし
 て筭(こうがい)や小柄をつけることが
 多い、赤木柄、精巻など各種ある。「は
 かまたきぬ腰刀にいたるまではなやか
 に出で立ちて打ちすぎ給ふ」(玉櫛箭・
 四)
 ◆ばいとり 奪い取り。「夫婦此御所へ
 入込しは、帝を奪(ばひ)取る為ならず
 や」(浄瑠璃・源平布引滝)
 ◆ぶちころしてしまふ 打ち殺してしま
 う。たいて殺す。なぐり殺す。「そい
 つ共にぶちころせ」(近松・用明天皇職
 人鑑)
 ◆かひこみ 手元に引き寄せてかかえこ
 み。脇の下へかかえこみ。「星切斑(き
 りふ)のとがり矢かいこふで大床(ゆか)
 に踊出給へば」(近松・平家女護島)
 ◆しさつて うしろへ下がって。「太刀
 の柄に手をかくれば、景清しさつて刀を
 捨て」(近松・出世景清・五)「御名に恐
 れとびしさつて。うづくまれば」(南嶺
 ・龍都依系図・二・二)
 ◆礼物 感謝の気持ちを表すために贈る
 金銭・物品。「れいもつは大方三十両、
 何時でも受取」(近松・女殺油地獄)
 ◆おそなはる おそくなる。遅れる。「最
 早皆々御入とや。遅なはりし残念と」(浄
 瑠璃・仮名手本忠臣蔵・三)
 ◆世倅 せがれ。息子。「二つにたらぬ
 世倅何を以て証拠といふ」(新色五巻書
 ・五・五)
 ◆注進 事件を急いで報告すること。
 「注」は書くの意。「兄方へ帰て、実否
 をさぐり注進いたし候べしと、つかへな
 ておろしていへば」(南嶺・忠盛祇園桜

・一・三)
 ◆さるぐつわはませ 「さる」は、戸締
 りの道具(戸の上部に差し込むものを上
 猿(あげざる)、下の框(かまち)に差
 し込むものを落猿(おとしざる)、横に
 差し込むものを横猿(よこざる)。「くつわ
 は馬の口に付ける具。人に声を立てさせ
 ないように、布片などを、口の中に押し
 込めたり口にかませて後頭部にくりつ
 け。「さがし出す度びのび上るさるぐつ
 わ」(柳多留・五)「渦丸は中途に埋伏(ま
 ちぶせ)して、矢庭に朝稚を縛(いまし)
 め、口には猿轡(さるぐつわ)といふも
 のを銜(はま)して」(弓張月・後・二
 九)
 ◆できたできた でかした。物事をりっ
 ぱにやりとげた。うまくやった。みごと
 にやりとおせた。でかした。「酒肴とか
 いてあるをね酒又有とよまれて、出来た、
 おやまありとはかかれぬにより」(咄本
 ・軽口御前男)「死骸をふまへ突つ立ば
 雑式を始として、元信其外弟等出来た出
 来た、あつぱれあつぱれ御分別後覺也と
 いさみをなす」(近松・傾城反魂香)
 ◆親者人 親のこと。「親のとふらひと
 て、神子を請し口よする時に、神子いふ。
 親者人は、ふなになり水にあそふぞ」(醒
 睡笑・二)
 ◆どうばら 腹部をのしつていう語。
 どてばら。「亭主め、ふんばりめらを
 皆なこへつて来い。胴腹へ細引をと
 うして、五丁町のまんなかで、女郎の百
 万遍をくるぞ」(歌舞伎・助六)
 ◆脇つば 脇の下にくぼみ。わきの下。
 「まっ此通。仕課せよと脇つばぐつとつ

らぬいたり」(浄瑠璃集・鎌倉三代記)
 ◆皆く惜しむぞ道理なる いわゆる草
 子地にあたる部分。
 ◆立腹 立ったままでする切腹。戦場や
 争乱の場などで、介錯人なしに行うもの。
 「大門口で立腹切り、新造衆や禿共、芝
 居でするやうな事して見せふ」(近松・
 傾城反魂香)「立腹(たちばら)切つて
 のつげにそれば、亡八(くつわ)が内は
 くれなぬの川」(御前義経記・七・一)
 ◆足もとはよろよろ、よりはりふしたる
 夢の世界。「あしもとはよろよろと、よ
 はり臥したる、枕の夢の」(猩々)によ
 る。
 ◆義 五常(仁・義・礼・智・信)の一
 つで、他人に対して守るべき正しい道。
 物事の道理になつたこと。「詠」謙虚
 さ、節制、節度を保もつことの類で、支
 那および日本の為政の拠り所となる五つ
 の規範の一つ(「日葡辞書」)「父としては
 慈を施し、子としては孝を勉め、夫は義
 を守り(略)五常とは名づくるものなり」
 (浮世物語・四・三)
 ◆節 自己の信ずる考え、志、行動など
 を貫き通して変えないこと。みさお。節
 操。節義。「すべて忠臣・孝子・貞婦
 とて名に高きは、必不幸つみつみて、節
 に死するなり」(胆大小心録・一五五)
 ◆感じ入りにける 感心した。「及ばず
 ながら感じ入りました」(秋成・妾形氣・
 一・一)

○有難やこの国にふたりの美女

【梗概】

播磨の国赤松家では、悪人が退治され、友仲がもとどおり国主におさまった。住吉左京大夫の娘を本妻として祝言も終わり、継目の参内もすませた。吉野も側室として、月の前半は本妻のところ、後半は吉野のところ、というふうにして丸くおさまった。

ところが、三郎左衛門から、「吉野・藤の兩人にとつて、私は兄の敵になるから、兩人に討たねなければならぬ」という訴状が出された。友仲が取り上げてくれないと切腹するというので、やむなく敵討ちをさせることになった。しかし、吉野は、「今日こうしてあるのはすべて三郎左のおかげなところ、家中の古くからの侍一八三人が連判を集め、日雇いの井戸掘りを殺したのはいすべてお家のため、そんなことで罪にはしないではないか」と願いが出てきた。こうなつてはやむをえないので、三郎左も敵討ちの話をとりさげることになった。

その後、腰元藤は側室吉野の妹だから三郎左の娘にしたらいということになり、養女にしたうえで右近に嫁入りさせることになった。そのうえで、右近のところに預けてあつた明石梅軒を吉野と右近の妻藤の敵として討たせることにし、すべては丸くおさまつたのである。

やがて、本妻にも吉野にも若君が生まれ、本妻の子は吉野のところへ育ち、吉野の子は本妻が育てる、というふうで、以後お家は安泰、万々歳の御代が続いたのであつた。

芦の葉の笛、浪の鼓、声すみわたる播磨の浦風、しづかにおさまりて、悪人退治、友仲ふたゝび国主となり、住吉殿の息女を本妻と祝言相済み、のこる所なく、都の首尾もとのひければ、三郎左衛門願ひによつて、太夫吉野を召し出され、御手かけと

あがめられければ、上十五日は御本妻、下十五日は吉野の花、あかず詠むる殿の栄花、国の掟もそれぐにそなはり、もはや何事も気づかひなしとおもふ折から、三郎左衛門訴状さし上げ、

「吉野のために兄のかたきなれば、吉野どのならびに藤、兄弟の女にかたき討たるべき」

よし、しきりに訴たへけれども、御取り上げなかりしかば、

「しからば自身切腹いたし、吉野どのの心をはらさん」

といへば、是非なくかたき討ちに極りける。

吉野申し上げけるは、

「畢竟、今日かやうに殿様にそひ奉る様になりしも、三郎左衛門殿おかげなれば、何とも今にては刃むかひいたしがたし」

と、段々願ひしかば、加古川右近に、

「よき様にはからへ」

との御意かしこまり入り、各とをはじめ、御家古き侍百八拾三人連判して、

「畢竟主君の御ためにこそせし事といひ、死にしなにこそ武士のはてともしれたれ。さしあたつては、日雇の井戸堀ならずや。君用にて殺したる事にも敵討これある義

ならば、一同に御暇くださるべし」

としきつて申しつりける故、三郎左衛門を召され、

「その方所存にて、またく家中のさはぎとなる儀」

と、道理を責めて仰せ渡されければ、三郎左衛門も、これには困り、

「御意、畏り入る。腰元藤はお妾の妹ゆへ、三郎左衛門親分に仰せ付けられ、右近かたへよめ入り相すみければ、右近はまへかど円山より預り置きし明石梅軒をしぼり、御白砂へつれ出で、御代々の高祿をもちへり見ざる大悪人なれば、打首と存ずるが、吉野殿、私妻藤、兄のかたきの人代にこの者をうたすべし」

と、右近がしりもちして、兄弟の女に梅軒をうたせければ、悪人退治、国家繁昌

◆芦の葉の笛浪の鼓、声すみわたるはりまの浦風 「芦の葉の笛を吹き、浪の鼓どうと打ち、声澄みわたる浦風の」(「狸々」による)

◆あがめられければ 寵愛したので。大切にしたので。「当流の秘伝には人丸貫之定家卿を、和歌之三尊とあがめ奉る事なり」(「戴恩記」)

◆上十五日は御本妻下十五日はよし野の花 参考：「さあらは上十五日は上京へゆかふず、下十五日は下京へゆかふまでよ」(「狂言・鈍太郎」)

◆死しな 死に際。「しな」は動詞の連用形に下接し、「…のついで」「…のとき」「…の際」などの意を表す。「いきしな、行がけなり」(「浪花聞書」)「いきしなにつぼうだ花がきしなにはるじかつたりや桶とちの花」(「咄本・醒睡笑・五」)「そして立ちしなには此様に所書きを渡し」(「浄

瑠璃・日高川入相花王・四」)

◆さしあつては その時点では。「我々は急ぎの道、暮に及んで宿屋はなし、差当(サシアタ)つて難儀なれば」(「浄瑠璃・神靈矢口渡」)

◆日雇 おもに都市での、自由労働者。日雇い労働者。力仕事や武家方の従者。駕籠昇(かこかき)などの仕事に就いた。日用(ひよう)とも。「幸ひお出入の日雇(ひよう)が女房、夕べ産をいたした」(「其磧・禁短氣・四・三」)

◆君用 元來は、主君の用事。「当番其外君用にて罷らざる時は其病危し」(「隨筆・耳袋」)ただし、ここは、主君のために。主人にその必要があつて。

◆しきつて 何度も。しきりに。「男は悪しく聞きなし、猶しきつて毎日出で」(「其磧・禁短氣・一・四」)

◆道理を責めて 道理をたてにとつて、

くめどもつきず、飲めどもかはらぬ御座敷の盃、若殿は御本妻とおてかけと、案みづくしの枕の夢のおもしろ事に日もかはらず。稚児様二方両方できさせたまひ、御本妻のはおてかけの方でそだて、おてかけのは御本妻へとり替えての御そだて、中よしの葉をたれる又あしの葉の入江にかけたつ。讒言なく、知行は十分より肩を越し、お金ほうめく蔵百ヶ所、つかへどわき出る泉福、つきせぬ宿こそ目出たけれ

理屈せめにして。「物にこりたる人の、後よく合点して、道理をせめて云置れし」(「西鶴織留・六・二」)

◆親分 仮親、親がわり。「伯母尊ながらそなたの親分」(「近松・心中宵庚申」)

◆まへかど 以前。「此紋はまへかどに海老蔵が来た時見ました」(「秋成・世間猿・一・三」)

◆人代 身代り。この言い方の例は見あたらないが、奉公人が契約の期間中に事故があつたとき、保証人より差し出す代人を「人代(にんだい)」という。ここからの用法か。

◆くめどもつきずのめどもかはらぬ御座敷の盃 「掬めども尽きず、飲めども変はらぬ、秋の夜のさかづき」(「狸々」による)。

◆枕の夢 「枕の夢の、醒むると思へば」(「狸々」による)。

◆入江にかけたつ 「影も傾く、入り江に枯れ立つ」(「狸々」による)。

◆讒言 他人を悪く言うこと。「ソレハ御比興(ひきやう)畏(こは)くはおまへ讒言(さかしら)に極まりまするがな」(「庭鐘・時代三國志」)

◆十分より肩を越し 充分という以上になる。「肩を越す」はある基準を想定して、その基準を超えること。「余程酒も肩越時分」(「其磧・禁短氣・五・三」)

◆お金ほうめく蔵百ヶ所つかへどわき出る泉福 「狸々」に出る「この壺に泉を湛へ、只今返し、与ふるなり」「醒むると思へば、泉は其まま」などを踏まえていよう。

◆つきせぬ宿こそ目出たけれ 「尽きせぬ宿こそ、めでたけれ」(「狸々」による)。